

394  
271



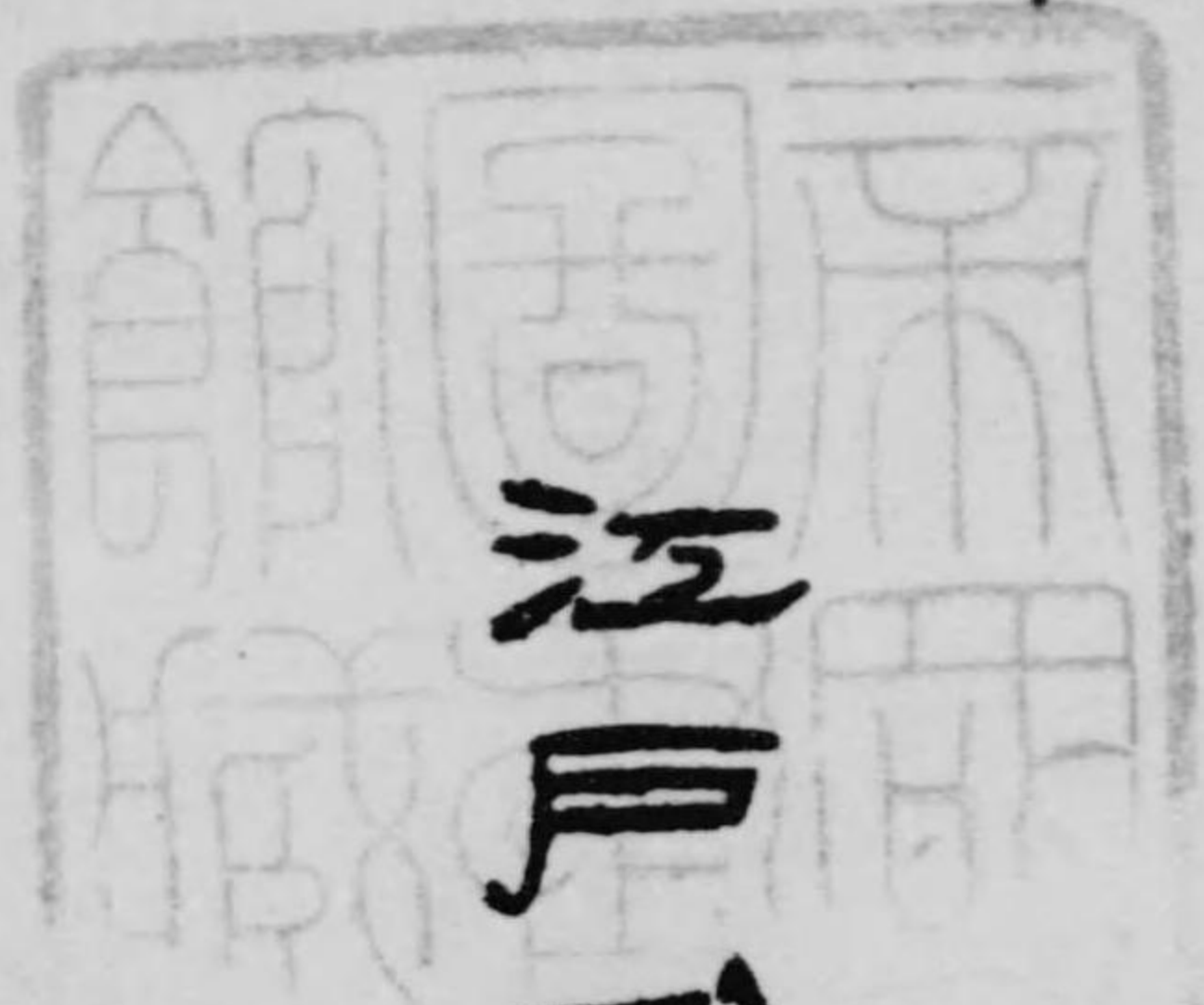
始





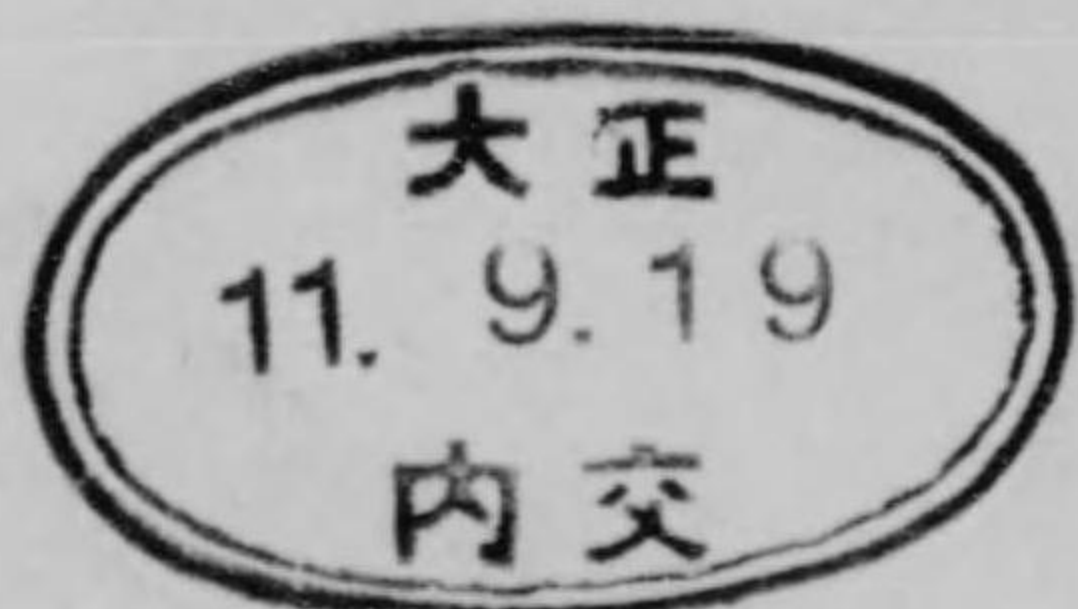
1-257-91

394-271



江戶書所圖會

一



大正

11. 9. 19

内交



緒言

江戸名所圖會七卷二十冊は、江戸の人齋藤幸雄の肇めて輯むる所にして、其子幸孝、之を刪補し、其孫幸成に至りて漸く大成上梓せる所なり。蓋し名所圖會の本書に先だてるもの、都名所圖會を首めとして大和河内攝津等其數少からず。本書の開版は實に天保三年の事に屬し、是等諸書の後に出でて、よく諸書的美點を萃め、而も遠く之に超乘せるもの、探討の周微なる、畫圖の精妙なる、考據の的確にして尋常一樣の名勝志と其選を異にせる、優に名所圖會中の白眉たること、世既に定評あり。紫の一本、江戸名所記、江戸砂子以下幾多の江戸に關する地誌は、本書によりて其大成を得たるものと謂ふべし。之を聞く、幸雄のはじめて編著に志しより、幸成の之を上梓するに至るまで、其間著者の畫師を伴ひて、遍く鄉村を巡歴すること實に三度に及べりと。又聞く、畫師雪且が筆を本書の爲に探るや、良工の苦心眞に尋常にあらざるものあり、其人物の良、大にして耳目を辨すべきものは、大抵途上親しく覩る所の男女の面貌を摹寫し、以て其千篇一律の弊に陥るを避



けたりと。江戸名所圖會が雪旦の畫によりて大に光彩を添へ、雪旦の名江戸名所圖會によりて天下に傳唱せられたるもの、亦故ありといふべし。此人の畫、大に江戸の風情を傳へし。齋藤氏は世々江戸神田雉子町の名主にして、幸成に至り最も力を著作に用ひ、本書の外編述する所尠からず。就中、聲曲類纂、東都歳時記、正續武江年表等最も著る。明治十一年七十五歳にして歿す。雪旦は長谷川氏、家世々畫師にして雪舟の畫風を傳ふ。天保十四年六十六歳にして歿せり。

今本書を翻刻するに方りては、凡そ原本有る所の插畫一として省略することなく、文字の大小の如き、亦努めて原本の體裁に倣ひ、以てその趣致を存せんことに力めたり。

大正二年十一月

校訂者 武

笠

三

### 江戸名所圖會 目錄

序文 (松平定常) ..... 一

序文 (龜田長粹) ..... 四

序文 (片岡寛光) ..... 七

序文 (松濤軒長秋) ..... 一八

凡例 ..... 三

附言 ..... 三

天樞之部 目錄 ..... 三

卷之一 天樞之部 ..... 三九—三六

舞町を起點として神田、日本橋、京橋、芝、高輪に至る。



天璇之部 目錄……………三〇七  
 卷之二 天璇之部……………三三一六〇

品川東海寺に始り大森、河崎、龜見、神奈川、横濱、金澤を経て横須賀に終る。

數十頁に渉る五十音順排列の地名及挿畫索引は第四冊の卷末に附載す。

序

都名所圖會始出。適在余成童時。一閱之。即謂此可以供臥游矣。則江戸亦不可無是輯也。後數歲。聞諸西山大久保翁。有齋藤幸雄者。有探勝之癖。方撰江戸名所圖會。採擇稍遍。挿寫頗盡。然獨病江戸稱名所者。僅僅不足。俚指也。余謂凡名所之稱。本出於和歌者流。蓋其設法。嚴畫一。縱令有山秀水麗。足以吟咏。而其不爲古歌所取者。不得稱之名所。是其所。以雖世有汗隆。要不失爲雅馴也。然名者賓也。實者主也。主豈可以賓加損焉哉。矧秋里氏之撰。非惟所謂名所而已。神祠佛寺。說係。惟。紫陌綺街。事涉猥瑣者。亦網羅而不遺乎。矧復江戸之爲地。



武野之曠。秩嶺之峻。墨流之永。玉川之澄。絡繹邦域。霞關忍圃之宜。春  
眞土菴崎之宜。秋。衿帶郊坰。其勝殆不讓上國乎。是亦何病之有。翁頷  
而是之。既而幸雄沒。翁亦尋逝。終不知其成否。然而秋里氏所著拾遺  
與和河泉攝及一二諸州名所圖會者。陸續上梓。盛行於世。余於是乎。  
悵然恨幸雄之輯愆期失時。而又聞其男幸孝善追其志。再搜三策。蒐  
聚滋廣。猶未公於世。幸孝亦以文化戊寅沒。又遺託之男幸成。幸成泣  
受之。黽勉不怠。校讐極力。竟竣其功。間者幸成突然抵門通刺。出其全  
帙示之。且需序言。是蓋由余往日介人促其成也。余乃一閱三歎。追念  
與西山翁言三紀於茲。喜悲交集。又憾幸雄幸孝與西山翁皆不觀其  
完成矣。然其所以歷年若此其久者。敬慎遺託。不敢輕舉。則死者而有

知。必曰余子若孫。相續能成吾志矣。抑圖會之撰。固供臥游。亦以充童  
觀。非所以專示大方。若夫覽者。尤其不雅馴。則可謂不知類矣。余更爲  
作者分疏其由云。天保三年閏月冠山松平定常撰



海內地名。著於古人和歌者。宗祇澄月之徒。攬而輯之。稱之名所。山川之險易。風俗之濟感。名物之同異。可坐而識也。吾江戸名所。顯於古人和歌。而晦於當今者不少矣。多磨川調布。著於延喜式。霞關載於武藏風土記。堀兼井彰於紀貫之僧西行之歌。皆名所之顯於古而今失其蹤者也。及考古之士。過而訪之。林壑再啓其闕焉。泉石再炫其奇焉。然無勝情者。則不能也。齋藤幸雄有勝情矣。有勝具矣。江戸勝區名蹤。棄於榛叢荒墟之間。而不可識者。搜絕谷。披窮林。或訪之故老。或徵之斷碑。又自史傳地誌。諸家名所和歌。紀行之書。以及稗說野乘。苟有足以資考鏡者。必博採總括。闡發於湮淪。不可問之蹟焉。其名所。則著之繪事。收山河於尺幅。斷萬象於筆端。亦可以當臥遊矣。於是百年湮晦之



勝區英雄百戰之故處。名士烈女之芳躅。燦然而復炫。其奇焉。所謂物不能自見。待人以彰者。驗矣。未及成書。遽疾而逝。識者惜之。嗣子幸孝克續先緒。補其未備。余先人與幸孝締交已久矣。嘗約爲之序。而幸孝享年不永。亦繼而捐館。嗟夫。幸孝胡爲所稟於性者厚。而所享於年者獨薄。殊不勝痛惋也。及今幸成。能承遺誠。以一人而任二世之編纂。卷帙愈繁。採掇亦博。而補輯悉審。契勘必當。始克成斯浩漭之編。可謂聿修有人。逝者無憾矣。乃走人徵序於余。時去余先人易簀。蓋八稔矣。而余以薄技。浪代先人之任。大方之誦。固所不免也。

天保癸巳春三月

江戸 龜田長梓謹識

序

あらかねの土てふものは、とこしへに動く事なきことわりながら、とし月のうつりゆくにつけては、山崩れ海あせて、かはりゆく事なきにしもあらぬは、そのあだならん國々にとりては、大きなるさわぎにてありぬべけれど、そも大塊のうへより見れば、まことに、九牛の毛ひとつにもおよばずとかいひけん諺のたぐひに、なんひとしかるべき。さればむかしより名にきこえたるところどころも、猶おのづからしかもなりゆきあるはたよりにつけて、田とも溝とも、或は軒をならぶる市人のすみかともうつろひきぬる事なれば、あまたの世をへての後には、たゞ名ばかりはむな



しう残れるものから、あらぬおもむきになりもてきぬる事、ことのみにしもあらず、こと國にもかぞへつくしがたうなんあるべき。されば今の世よりしては、そこしもまさしくさしてことなりけんとはしりがたき事おほかれど、猶そのすぢの事どもかいしるしたるものら、そこよにちりほひのこりてあれば、それにつきて考へあはすれば、あたらずといへど遠からずといひけんさかひにはいたるべき事、又少からずおほゆるよ。こと藤原幸雄といふ翁ありて、おもへらく、いにしへの事は皆しか成りきぬ。今此二百年ばかりの事だに、日にそへて此大江戸の賑ひゆくにつけてもと有りつるところを、ことかしこに移されたる事、いとおほかるを、それだにはたしる人まれなれば、かくていよ

ますく、にさかえゆきてんには、市人の家をしもおきならべんにところせくして、いま見およぶ所をしも、又うつされもし給ふべき御代のにぎはひにしあれば、いかで今見るさまつばらに書きしるしあつめてん、遠きころ何某主、内日刺都の名にきこえたるところを、を委しうしるし、忍などかよせて世にあらはされて後、大和なる、河内なる、攝津の國なる、紀伊の國なる、つぎに出来ぬるは、眞に世の中に住みとすむ人なりはひ捨てよ出でた、たん愁もなく、沓代費さんわづらひもなく、たどるながらにゆき見たらん、ことちすべければ、遠くあそばざれとのたまひけん聖のみこよろにもかなふべきはしにもなりぬべければ、よのなかの人のためには、まことに大きなるいさをならんかしとて、おも



ひおこされしなりとぞ。されど、はこやの山をなかばとか聞つるよはひなれば、ことおほきにやたへざりけん、つひにはたすともなくて過ぎられき。さるをその子幸孝うけつぎて、いかでほいのごとはたしてんと、こよらはせめぐりてものしつるそのまぎれに、いかにとりおとしけん、としごろかいつめおかれしうちなる一卷をうしなひき。さるを本所石原のわたりなる番場てふ所に、妙源寺海煉上人とて、たふときひじりおはしけり、もとより世の中はおもひはなれて、山水の清くいさぎよきに心をすまし、ことばの花のたへにかくはしきを衣にしめて、もてあそびものとし給へるが、常に我が門ふみならしおはするついでに、この二年ばかりをちなりき、わがすむてらの事など委しうねもごろにとひ

あきらめてかへりし人のわすれたりけん、かよる一卷なんおるたる、あはれかばかりにも心いれたるものをとおもへば、いとほしくて、月ごろすぎやうしありくにもくびにかけて、その人に見しりたる人あらばかへしあたへてんとおもへど、みちかひにてもさる人とおほえたるはなく、歌よむ人々にあふときは、かよることおもひたちたる人やあるととひあはせなどしつれど、ふつにたづね出ねば、今までにかくはおもへどかひなし、かくばかりにもこよろつくしたるものを、とかたられたれば、いでそはおのが知りたる人になん、といへば、ひじりよろこほひて、そはとしごろのほいかなひたり、いとうれし、さらばかへしやりてん、その人にたがはずばとらせ給ひてよとて、ふところより出されたる



をやがてみづからもてゆきて、けふはしかくの事ありて來つ、  
といふを湯あみしてありけるが聞きつけて、さながらにはしり  
出でて、あなうれし、この巻うしなひしより、さるべきをりにつけ  
ては、かたぐいとあなぐりもとむれど、わすれぬることはあやに  
くなるものにて、あまたたびかたぶけど、そこなりけんとはおも  
ひよらぬものなるよ、おやのしたよめ給へるものにしあれば、い  
かで身にかへてもとおもへど、すべなくて過しつるを、などいひ  
ていとよろこほひて、うれしと思ひたるけしきなりければ、歸り  
てそのよしつばらにのぶれば、我も此としごろめぐりあひて、そ  
の人なりけりとしらばかへしあたへてんとおもひつるかひあ  
りて、とよろこばれたるおもとち、まことありてあはれに有りが



たかりきさることろもち給へればこそ、つひに身延山の貫首と  
あがめられ給ひて、去年の春かの御山にはうつり給へるなれ。こ  
はくだくしうことにしるすべき事にしもあらねど、上人の有  
りがたかりし御心ざしをものばへまほしくおもへば、およばぬ  
筆のつたなさをもわすれての事なりけり。まことやこの幸孝ぬ  
しは、市人の長だちてうたへごとまかなひつかふなるがうへに、  
ぜさいもの奉る納屋あづかりてさへつとめられたれば、かたが  
たにつけてのがるべきひまなさに、はつかなるいとま得るをり  
をりのたのみみにて過ぐされつるほどに、此ぬしもふとおも  
ひがけなういみじきやまひにかよりて、よもつ國にまかられた  
るは、たれ人かをしまざらんや。しかはあれど、そのいたつきむな



しからざらしめじと、さきはひ給ふ神やまし／＼けん、その子幸  
成主清うあらため書きて、今かく世にひろうなりゆかん事、この  
ふたりのぬしたちのみたましも、天がけりて見給はど、いかばか  
りよろこびおもはざらんや、あはれ世の人、いかばかりめでもて  
はやさどらんや、かれ今板にゑりて、おほやけにせばやとて、よは  
ひまだはたちにもおよばざりしころより、おもひおこされて、文  
政三年といふとし、龜田の翁などかたらひて、世にあらはさんと  
はかられつるそのきざみに、おのれこの父ぬしより明くれとひ  
とはれし友にはあらねど、さるべきゆかりはた無きにしもあら  
ねば、はしにまれおくにまれ、いさ／＼かするしてよとこはれたれ  
ば、いなむべきなからひにしもあらねば、つたなきものから筆と

りて、いさ／＼かするしおきつれど、十あまりの年もへぬる事にし  
あれば、いづくにかさしおきけん、見うしなひて、今はもとむれど  
さぐり出づべきたよりなし、さるは去年やよひのすゑとしごろ  
すみならしたる家のまへうしろ、こよなうかまびすしう、よから  
ぬいと竹の愁をいとひて、根岸といふ山里にかごかなるすみか  
もとめて、うつろひかくろへぬるそのまぎれにやありけん、いか  
で見いでんともとむれどもとよりやまひがちにて、何事もお  
もふかひなく、はか／＼しからぬ身にしあれば、友だちの歌むし  
ろなどにだに、ものうくおほえてたちあはんともせず、かきこも  
りてのみすぐすに、今は老のくるしさをへせめ來つれば、うしな  
ひつるものさがしもとめんとするちからさへなく、氣むづかし



ければ、いかでひとくだりのことをだにしたとむべき。かうかよ  
わくやまひがちになりて、たどみづからをやしなふのみを、たけ  
きものにてあかしくらせば、いまことさらにしたとめんにはい  
とわづらはしう、いかでのがれてんとうしなひたるよしあらは  
しつれど、このぬしの母君おはして、よしさらば、墨ひきてなりと  
もえさせよとせめらるゝを、もどき聞えんだにこゝちむつかし  
ければ、たどひとくだり筆とる手さへ、ちからなきかへるの子の  
やうにてなん。そもくこの幸雄の翁といふは、吾が淨有翁とは  
へだてなき友どちにて、佛の道をも心にいれて相ともにおこな  
ひ、から人のをしへをもわするゝまなくつようまもりて、相とも  
にちからいれられたる翁にすれば、さる心よりおもひおこさ

れての事にしあれば、いかで身延山の貫首など、世にもくすしう  
なさけある御方のやうなるさいはひにしもあひ奉らざらんや。  
天保三年といふとしの五月はじめ、かたをかの寛光。



このごろ世にひろうもてとどろかしきこゆる國つ名どころ圖  
繪てふ書ぞ、しかもこのくにつ文字して、女兒等にもいとめやす  
う、將こよなき心なぐさなり。そはうち日さすみやこあたりを初  
めにて、あしびきの大和路より、おしける浪速のうらづたひ、かう  
ちいづみも共に、名におへるところく、えらびものして、五つの  
くにまたく、それがあまりには、神風の伊勢の國、東路の五十まり  
三つのうまやくも、洩るゝかたなく、まさしに繪かきつ、ことの  
よしをもつばらにかいあつめて、その境えしらぬ人にたよりせ  
んのいさをは、實にみやこ人のみやびの心よひなれるわざにて、  
いと雄々しくなも、おのれゑびす心にして、かれをまねぶとは  
あらねど、その大江戸にすめる身にして、このあたりしらであら

むもうたて心ぐるしくて、とし月いゆきめぐらひぬる處々かい  
あつめぬれば、さすがに書かましくもなりぬるにこそ、されどな  
まくの言の葉にとうでんもやさしみおほかなれば、そのまよ  
に打おきぬるを、萩の屋のあるじと、こをしも見たまひて、いとよ  
し、とく櫻木にゑりてよなど、をりにふれつゝそよのかしきこゆ  
るも、いなみがたければ、心おこしつ、しぬびく、に此ことをしも  
思ひたちぬるは、むさしあぶみさすがにまけぬこの國人のさが  
なるべし、されば野の草のゆかりには、ほりかねの井のそことも  
しらすたづねめぐらひ、隅田河のながれにとほき昔をたどりて  
は、葛飾のかすみしことももらさじとなんかいあつむ、今や武藏  
野の廣きおほんめぐみに、もるゝかたなきたみくさの、家居つき



づきしく、霞のせきも戸ざしせぬ御代にあへるをよろこほひて、この書のはしつかたに、事のよしをかきつく。ゆるけきまつりごととも十まり二とせといふとし、松濤軒長秋しるす。

（Faint bleed-through text from the reverse side of the page, mostly illegible due to fading and ghosting.)

凡例

凡此編の次序は、大城を以て首とし、餘は南方に回環する迄、北斗七星の位に配當して、都て七卷を以て全部とす。

凡江戸の地は、廣大盛壯にして、名流高士の芳躅は蔚然として史冊を照耀し、琳宮梵刹は林の如く聯りて、悉く數へ舉るに違なし。故にその中にも由致あるを選て録す。或は傳記亡びて證としがたきものは、土人の口碑に存するものを取て證とし、或は無根の浮説にして、言妖妄に渉るものはこれを省く。然りと雖も、人口に膾炙して傳稱の久きものは、いま強ちに添削評議を加ふるに能はずして、姑く其儘を載す。大伽藍と雖も、其來歴事實を亡失して、詳かにする事能はず、且小祠支院の類、新建勸請のものは、悉くこれを闕きて、攷古博物の士に訪ひ、他日後輯の成るに及びて、附載せんと欲するのみ。凡方位を示すには、前位に循うて某の東西南北に在りと標す。又左右とあるは、その地に至



らんとする儘の左右を云ふ。覽るものこれを推て標準とせよ。

凡引用の書、全文を載せずして、その綱要のみを撮て主意を摘するものは、紙員増多にして、覽るもの厭倦の心を生ぜんことを恐るゝが故なり。次に神社佛刹に傳ふる所の佛像、寶塔、書畫、諸什器の類、神奇附會に涉りて、眞實決すべからざるは、社司寺僧の言ひ傳ふる所に任せ記す。又武藏風土記の殘編は、偽書なりと雖も、古來より世に傳へたる書なれば、姑く是を引き用ゆ。その取捨に至りては、覽る人の意に在るのみ。

凡神社佛閣の幅員方域を圖するは、専ら當今の形勢を模寫す。且地圖の間に、四時遊觀の形勢を繪くに、其態度、風俗、服飾、容儀、これ亦當今の形容を圖す。舊地に基て畫するものは、各時を分てり。是其地の風光を潤色して、他邦の人をして東都盛大の繁榮なる事を知らしめ、且童蒙の觀覽に倦む事なからしめんが爲なり。

凡此地名所の中、武藏野、隅田川二所を以て、第一の勝槩とす。故に限田川をば兩岸に分ちて六七の二卷に配せり。西岸には、芙蓉の白峰雲間に聳え、東岸には筑波の翠鬢晚霞に蘸して、

山水の風致備はり、縱觀の美此地に停まるか。依て兩岸の全勢を眸中に收んと欲せば、此兩卷を對照して、其全局を知るべし。

凡眞間の舊跡は、下總の地にして、武藏にあらずといへども、纔に利根川を隔つるのみにして、實に萬葉集以降の芳蹟なり、且文人墨客、吟篋を負ひて游筇を曳くものは、必ず其風光を賞して第一の壯觀とす。こよに於て、鎌倉志の例に倣ひて、併せ記して此記の内に收む。覽るものこれを諒せよ。



附言

此書は祖父が寛政中の編にして、父縣麻呂が刪補、文化の末に至てなり、文政の今に至て上梓の功を終りぬ。凡年序を経る事三十有余年、江都蕃昌に隨て、神社寺院境地沿革するもの頗多し。一向の小祠も、須臾に壯麗たる大社となり、纒の草菴も巍然たる莊嚴となれるもの少からず。或は祝融の災に罹りて、樓門回廊を焼失し、礎石のみ存するの類、興廢枚擧すべからず。然りといへども、時々是を改むる事能はず。故に今時の録に差へるもの多し。見るものいぶかる事なけれ。

齋藤月岑 識

江戸名所圖會

天樞之部目錄〔原本一より三まで三冊〕

- 武藏國號基 むさしのかくにけい
- 江戸始元 えどのはじめ
- 元且諸侯登城圖 げんじしよこうとうじやうのづ
- 八代會河岸 ややがし
- 常盤橋 とこはなはし
- 通町 とほまち 駿河町三井吳服店 大傳馬町木綿店 本町藥種店
- 本石町時の鐘 ほんいしこうちのときかね
- 本銀町土手 ほんしんちのかねのちゆうて
- 日本武尊秩父岩倉山に武器を收め給ふ圖 やまとたけのみことちちいほくらやま
- 御城興基 おんしろのこころ
- 吹上御庭 ふきあはむにわ
- 龍の口 たつぐち 平田明神 瀧生飛彈守宅地
- 一石橋 いちこくはし 八橋一覽圖 榎木河岸
- 松原小路 まつはらこうぢ
- 道三橋 だうさんはし
- 日本橋 にほんはし 同馬市
- 浮世小路 うきよこうぢ
- 福田村舊址 ふくだむらきやうし 白旗稻荷祠
- 神田明神舊地 かんだみやうじんのみやうち
- 大江戶東南の市街より内海を望む圖 おほえどせうなんのいちまちうちうみののぞむづ
- 梅林坂 はいろんざか 平川天満宮舊地
- 錢瓶橋 ぜにがめはし
- 天王御旅所 てんわうおたひしよ 大傳馬町 小船町
- 十軒店 じっけんだな 同雜市
- 千代田村舊跡 ちよだむらきやうせき 千代田 稻荷祠
- 神田橋 かんだはし 鎌倉町島屋酒店 白酒を售ふ圖



護持院舊地 蕪淵 飯田町 筋違橋 藍染川 馬喰町馬場 清水如水宅地 加茂真淵翁閑居地 四日市 兜塚 俳仙其角翁宅地 靈巖島 永代橋 新川酒問屋圖

護持院舊地 蕪淵 飯田町 筋違橋 藍染川 馬喰町馬場 清水如水宅地 加茂真淵翁閑居地 四日市 兜塚 俳仙其角翁宅地 靈巖島 永代橋

田安臺 水道橋 神田川 辨慶橋 柳橋 歌舞妓芝居 三派 天王御旅所 伊雜太神宮 新川太神宮 惠比須前稻荷社

小川町基立 御茶の水 昌平橋 於玉が池 淺草橋 杉森稻荷社 新大橋 中橋 永田馬場山王御旅所 祖來先生居宅地 隨見屋鋪 藥師堂橋本稻荷社

小川清水 神田淵 太田稻荷祠 於玉稻荷 杉森稻荷社 新大橋 中橋 永田馬場山王御旅所 祖來先生居宅地 隨見屋鋪 藥師堂橋本稻荷社

飯田町 中坂 九段坂 八小路 東錦繪店 東錦繪店 東錦繪店 東錦繪店 東錦繪店 東錦繪店 東錦繪店 東錦繪店

魚板橋 世繼稻荷祠 魚板橋 世繼稻荷祠 魚板橋 世繼稻荷祠 魚板橋 世繼稻荷祠 魚板橋 世繼稻荷祠 魚板橋 世繼稻荷祠 魚板橋 世繼稻荷祠

魚板橋 世繼稻荷祠 魚板橋 世繼稻荷祠 魚板橋 世繼稻荷祠 魚板橋 世繼稻荷祠 魚板橋 世繼稻荷祠 魚板橋 世繼稻荷祠 魚板橋 世繼稻荷祠

淡稻荷社 佃島 同白魚網 咳嗽者姬 木挽町歌舞妓芝居 尾張町吳服店 圓光大師舊跡 日比谷稻荷祠 眞福寺 金地院 西窪八幡宮 赤羽川 御穂神社

淡稻荷社 佃島 同白魚網 咳嗽者姬 木挽町歌舞妓芝居 尾張町吳服店 圓光大師舊跡 日比谷稻荷祠 眞福寺 金地院 西窪八幡宮 赤羽川 御穂神社

鐵炮洲 住吉明神社 寒橋 織田有樂齋第宅地 三綠山増上寺 烏森稻荷社 愛宕山權現社 天徳寺 飯倉 赤羽橋 鹿島神社

鐵炮洲 住吉明神社 寒橋 織田有樂齋第宅地 三綠山増上寺 烏森稻荷社 愛宕山權現社 天徳寺 飯倉 赤羽橋 鹿島神社

新橋 飯倉神明宮 藪小路 城山 熊野權現宮 心光院 毘沙門堂 汐留橋 采女原 了然禪尼菴室地 江風山月樓 宇田川橋 櫻川 青松寺 太田道灌城跡 勝手が原 芝浦 西應寺

新橋 飯倉神明宮 藪小路 城山 熊野權現宮 心光院 毘沙門堂 汐留橋 采女原 了然禪尼菴室地 江風山月樓 宇田川橋 櫻川 青松寺 太田道灌城跡 勝手が原 芝浦 西應寺

新橋 飯倉神明宮 藪小路 城山 熊野權現宮 心光院 毘沙門堂 汐留橋 采女原 了然禪尼菴室地 江風山月樓 宇田川橋 櫻川 青松寺 太田道灌城跡 勝手が原 芝浦 西應寺

新橋 飯倉神明宮 藪小路 城山 熊野權現宮 心光院 毘沙門堂 汐留橋 采女原 了然禪尼菴室地 江風山月樓 宇田川橋 櫻川 青松寺 太田道灌城跡 勝手が原 芝浦 西應寺



- |        |       |       |        |        |       |       |
|--------|-------|-------|--------|--------|-------|-------|
| 三田     | 綱坂    | 手引坂   | 産湯水    | 網塚     | 小山神明宮 | 春日明神社 |
| 月波樓    | 三田八幡宮 | 竹柴寺舊址 | 同古事    | 龜塚     | 功運寺   | 徂徠先生墓 |
| 濟海寺    | 潮見坂   | 高輪が原  | 伊皿子薬師堂 | 牛小屋    | 如徠寺   | 臥龍岡   |
| 魚藍觀音堂  | 高輪大木戸 | 待之圖   | 泉岳寺    | 常光寺    | 寶藏寺   | 辨才天   |
| 太子堂庚申堂 | 釋神社   | (石神社) | 東禪寺    | 有喜壽八幡宮 | 谷山    |       |

# 江戸名所圖會

## 天樞之部

### 卷之一

**武藏** 東海道に屬す。和名類聚抄曰、牟佐之國府多磨郡に在と云々。武藏國上古は東山道の内に入る。光仁天皇の寶龜二年辛亥冬十月日卯、太政官奏して東海道に屬せしむるよし、續日本紀に見えたり。久良、都筑、多磨、橘樹、荏原、豊島、足立、新座、入間、高麗、比企、横見、埼玉、大里、男衾、幡羅、榛澤、那珂、兒玉、賀美、秩父、葛飭等、以上二十二郡なり。拾芥抄に、大縣、東海、那珂等の三郡を加へ、葛飭を除て廿四郡とすれども詳ならず。貞享三年丙寅三月、利根川の西を割て、武藏國に屬せしむ。昔は本所葛西の邊、淺草の川を國界として、川より東の地は、一圓に下總國なりしを、右に云ふ如く、今は葛飭郡の半を割て、利根川の以西を武藏の國の葛飭郡とす。以東を下總の國の葛飭郡とす。和名抄に、武藏國管、古事記、牟邪志に作る。舊事記、胸刺に作る。萬葉集に牟邪志に作る。同くむさしと稱す。其義は、風土記抄にいふ、武藏の國、秩父の嵩ば、その勢ひ勇者の怒り立るがごとし。日本武尊、此山に東



日本武尊東夷征伐の時武具以鉄父岩倉の御子に是武藏國子の監筋たり

倭健彦彦孫征西又伐夷藤原と東劔草薙偃威風春野子





夷征伐の祈願をこめ給ひ、その後東夷盡く平治せしかば、その武器を、秩父岩倉山に納めたまふ、よりにてこの國をむさしと稱せしとなり。そののち稱徳天皇の神護景雲二年、武藏の國より、白雉を獻じたるが、公卿の奏せし言に、**戴武崇文**の祥なりといふ。よりにてこの國を、武藏の字を以て嘉名となし給ふといふ。神護景雲二年六月癸巳云々、武藏國橋本郡人飛鳥部吉志五百國於同國久良郡、獲白雉、獻焉、即下郡縣、戴之。

奏云、維新良臣一心忠貞之應、白色乃聖朝重光照臨之符、國號武藏、既呈戰武崇文祥、とあるは、もと牟邪志の三字を、好字に改め、二字に定め、武藏と書て、志の文字を畧かれしより、此白雉の瑞につきて、武藏の二字を戴して奏したる詞より、今の名に成るとなり。

東照宮様、當國に大城をしめ、鴻業の基を闢き給ひしより、四海竟に干戈の勞を忘れ、萬民長に太平の化に浴するは、乃是天意のしからしむる所にして、國の號も自ら昇平の御代に應じたるなるべし。

家集 物名むさし

枝折せむさして尋ねよあし引の山の遠にてあとはとどめつ 柿本人丸

**江戸** 豊島郡峽田領とす。其封境 往古は廣くあらざるに似たり。白石先生の説に、江戸は庄の名なるべし云々。按ずるに、中古庄と唱へしは、郷の事をいふなるべし。郷里共に、佐登と訓ず。今義解に云ふ、凡五十戸爲里と云ふは、江戸は庄の名なるべし。然るときは、佐は狹、登は處の界にして、廣大なざるの意にとりて云ふなるべし。武藏國風土記に荏土に作る。傳云。

この地は大江に臨む故に江戸と稱せりといふ。甲陽軍鑑に、江戸のあたりを中武藏と唱ふるとあり。義經記に云く、江戸太郎重長は、八箇國の大福長者とあり。しかる時は、江戸の地は其頃なるべく、重長領せしなるべし。南向亭いふ、平川一水を隔て、いまの三の丸の地は、江戸の郷、日輪寺のかたは神田郷なりと。ここに平川と云ふは、今の飯田町の下よりつとく入堀の水脈是なりと。(猶菰が淵の條下と照し合せて見るべし)又同じ説に、今の郷城の邊り、いにしへ江戸ととなへし地なるべし。攝州大阪御城内の雁木坂、舊名を大坂となづく、後世御城の號に呼れしより、彼地の惣名となる。江戸の名も此類ひなるべしと云々。寛永二十年開板のあづまめぐりといふ冊子に、ゆくへいかにと白鷺の、葉末にむすゞ淺草を、打越えゆけばほどもなく、むさしの江戸につきにけり、とあるも、上の

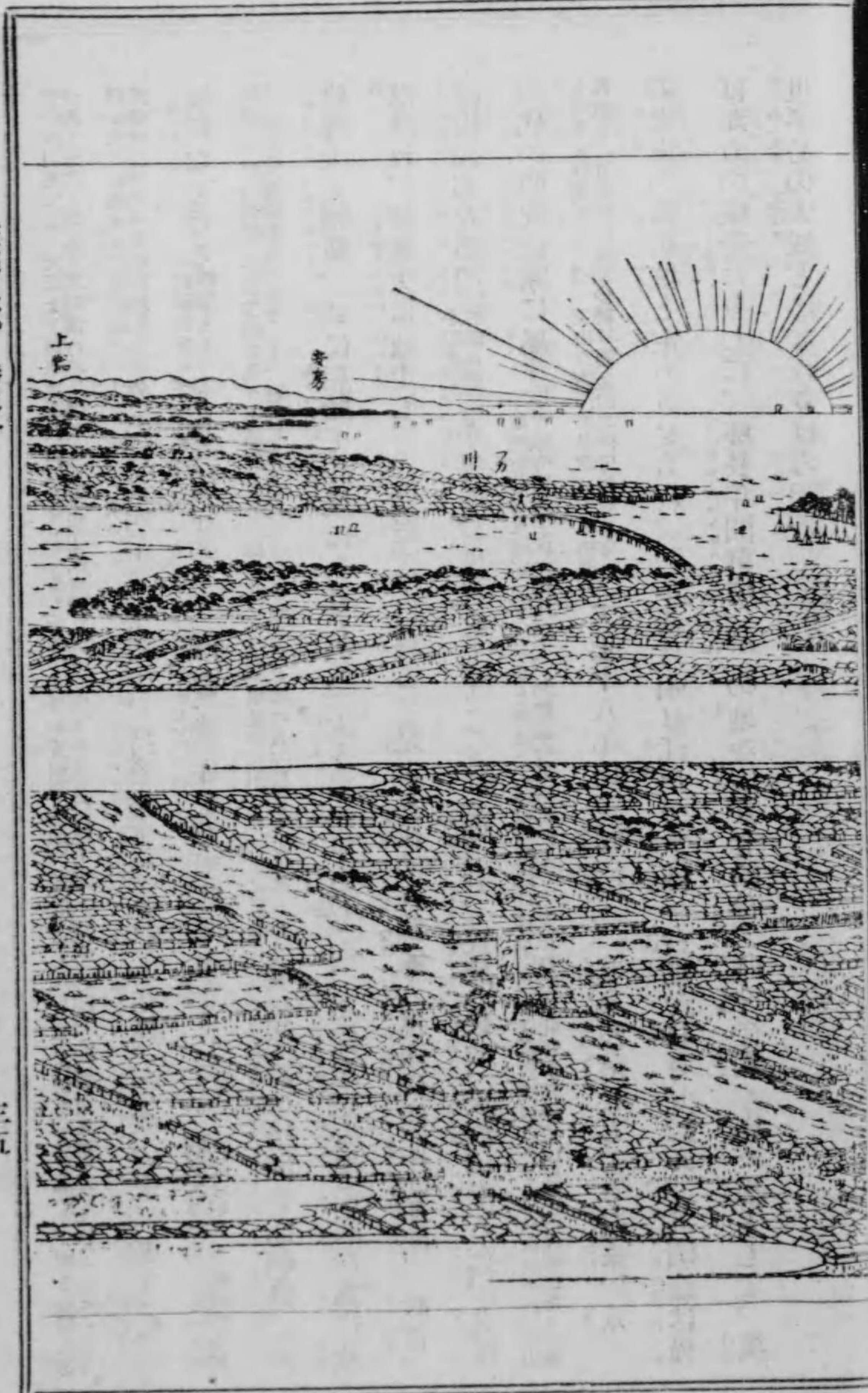
天正己降、江戸を以て御居城の地となし給ふ。故に日を重ね、月を追ひ、益繁昌におよび、今は經緯拾里におよんで、都て江戸と稱せり。萬國列侯の藩邸市廛商賈の家屋鱗差して、縱横四衢に充滿し、萬戸千門藁を連ねたり。實に海陸の大都會にして、扶桑第一の名境といひつべし。

**江戸大城基立** 人皇百三代後花園帝御宇、鎌倉の官領上杉修理太夫定政の老臣太田左衛門太夫源 持資入道道灌、勝寺の條下に詳なり。當國荏原郡品川の館にありし時、勝地たる故を以て、

豊島郡江戸の地に城營を闢かんとし、康正二年丙子經始し、長祿元年丁丑功成りて道灌、ここに移り住す。江戸名所記等の説に、父資清入道道真樂所にして、其子左衛門太夫持資相繼て居城とす、といふといへども、未だ取立て、同左衛門太夫は江戸の城を取立たりとあり。是を證とすべし。又或書に云く、千代田資田の里といふ所を以て、城地にとると。大取説に、千代田資田資田等の三氏をして、武州江戸河越岩付等に城壘を築かしむ、とありて一ならず。或は地名とし、或は人名とす。大



江戸東南の市街より内海と望む圖





道寺友山翁云、天正より以來は千代田城と申しけると云ふ。其并特資城中に蕪所の室をいとなみ、軒の南を靜勝と號く、東を泊船と呼び西を會雪と唱ふ。其頃灌の招に應じて萬里居士江戸城に入り、山水の美を眺望し窓含西嶺千秋雪、門擊東吳萬里舟といふ古人の詩を引て大に稱揚せり。猶此地の然るに文明十八年丙午、持資讒害せられし後は、定政の手に屬す。依て美景は江亭記の文中に詳なり。

執行なりける武藏志野にそがひやうのかみ、會我兵庫守の子、同豊後守をして此城を守らしむ。鎌倉大草紙に、文明九年江戸の城に上杉判部少輔

朝昌、三浦助義同、千葉次郎自胤等を籠置とあり、按ずるに其頃長尾景春武州にありて、兵を備、其後定政の子同五郎朝良、同故に道灌軍事にいとまなし、鎌倉にありし故、江戸の城には是等の人を居置きしなるべし。

修理太夫朝興、共に相續て此城にありしが、大永四年甲申正月、北條左京太夫氏綱が爲に攻落され、朝興大に敗走して、河越の城に移る。是より後は氏綱家人富永神四郎小田原記四郎左衛門、政直、遠山四郎左衛門四郎兵衛、某等を、城代としてここに籠置き、氏康、氏政、氏直に至る迄、凡て四代の間北條家に屬す。是則遠山富永兩家より代々是を衛護す、諸城變遷録には遠山丹波守直景城代とあり、然に永祿の始、遠山十八年北條家滅亡の頃、遠山左衛門佐景改は、小田原に籠城し、其弟河村兵部少輔同勢遠山丹波守當城を守る。天正十八年庚寅秋七月、其家没落せしより己來、永く御當家の御居城と定めさせられ、同年八月朔日江戸の大城へ台駕を移させ給ふ。其頃迄は僅ばかりの城營たりしに、慶長年間御城廓の地を廣がせ給ひ、唯今の如く巍々然として、萬世不易の大城とはなれりける。

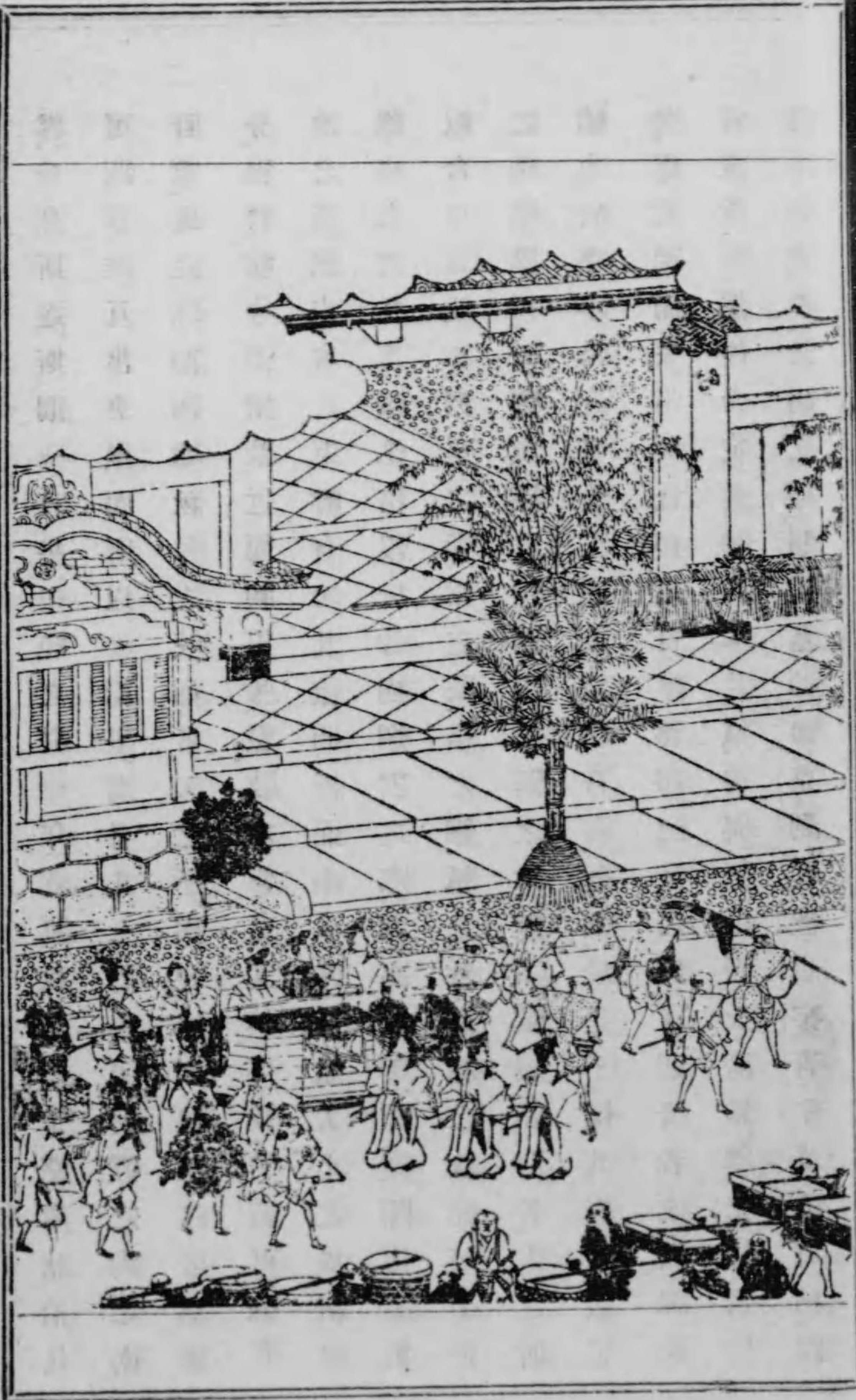
江亭記 寄題江戸城靜勝軒詩序

武州江戸城者。太田左金吾道灌源公所肇築也。自關以東。與公差肩者鮮矣。固一世之雄也。威愛相兼。風流籍甚。比來騷亂以來。欽承王命者。八州内才三州。三州之安危係于武之一州。武之安危係于公之一城。可謂二十四郡唯一人。夫城之爲地。海陸之饒。舟車之會。他州異郡。蔑以加焉。壘之高十餘丈。懸崖峭立。固以綠垣者。數十里許。外有巨溝。浚塹。咸徹泉脉。潄以隣碧。架巨材爲之橋。以爲出入之備。而鐵其門。石其牆。磴其徑。左盤右紆。聿升其壘。公之軒峙其中。閣踞其後。直舍翼其側。戍樓保障。庫廩厩廠之屬。爲屋者若干。西望則逾原野。而雪嶺界天。如三萬丈白玉屏風者。東視則阻墟落。而瀛海蘸天。如三萬頃碧瑠璃田者。南嚮則浩乎原野。寬舒廣衍。平蕪茵布。一目千里。野與海接。海與天連者。是皆公几案間一物耳。以故軒之南名靜勝。東名泊船。西名含。



元旦諸侯  
祭城之圖

藩邦玉帛此朝宗  
關險何須百二重  
四海道通台榭靜  
中原嶽秀有天容  
城地日暖晴雲過  
邸第春分淑景從  
回望樽意佳氣裡  
車如流水馬如龍  
服元香





雪公息斯遊斯。則一日早午晚之異。一年春夏秋之變。千態萬狀。拍几可翫者。雖互出更呈。而所以出焉呈焉者。凡三焉。東瀛晨霞之絢如。南野薰風之颯如。西嶺秋月之皎如者。天之所與也。遠而瀕波曙兮。島嶼分。鴉背嘯兮。岡巒紫。近而腴田旁。環陂水常足。其林可樵。其叢可蘇者。地之所獻也。城之東畔有河。其流曲折而南入海。商旅大小之風帆。漁獵來去之夜篝。隱見出沒於竹樹烟雲之際。到高橋下。繫纜閣榭。鱗集蚊合。日日成市。則房之米。常之茶。信之銅。越之竹箭。相之旗旄。騎卒。泉之珠犀異香。至鹽魚漆。泉后筋膠藥餌之衆。無不彙聚區別者。人之所賴也。於呼不出此室。收天地人以爲吾有。豈哉。於是乎懼其搖而散。正矣。慮其躁而失常矣。杜戶瞑目。厚養弗已。發之於言。則清者成歌詞。和者成政化。然後乃定其神。乃寧其氣。神與氣合。而太清爲輿。元氣爲馬。逍遙於玄々無窮之域。則雖鬼神弗克測其機也矣。青牛真人有曰。躁

勝寒靜勝熱。清淨爲天下正。蘇灣城解之曰。成而不缺。盈而不冲。譬如躁之不能靜。靜之不能躁耳。夫躁能勝寒。而不能勝熱。靜能勝熱。而不能勝寒。皆滯於一偏。而非其正也。唯泊然清淨不染於一。非成非缺。非盈非冲。而後無所不勝。可以爲天下正矣。今也公之以所守扁於軒。不翅勝熱。無所不勝。則宇宙間與公相爭而相戰者。未之有也。所謂可以爲天下正者也。其不知焉者。咸謂公之威愛能俾人忻懼矣。如含雪泊船者。浣花老人蜀中倦遊之境。題扁所及。而以此地同此景。摘以爲名。在公乃吟中一風流爾。聽松村菴翁。由幼至老。鴻藻片章。被於天下。其名誼傳者六十餘年於此矣。是以公欲需翁題詩其上者。蓋亦有年矣。丙申夏。適介人請詩及跋。且要屬能言之二三子。題于後。書于板。掛于室。俾關左人歌之。翁告予曰。我未嘗東遊矣。以得措一辭。幸子所目擊。述以序可也。予退讓弗允。蓋予之序乘韋也。翁之詩與跋。吳昇也。遂以



所聞見者。次而爲之序。文明八年丙申秋八月。羣玉峯叟蕭菴龍統。

村菴靈彦

傳聞靜勝軒中景。四面窻扉一夕開。野闕青丘吞帶芥。

天晴碧海望蓬萊。商帆似自平蕪過。漁火如從遠樹來。

我老無期泊船處。關心西嶺成堆塊。

雪樵景菴

兵鼓聲中築受降。聞君延客日臨牕。風帆多少載詩去。

吹雪士峯晴墮江。

默雲龍澤

籍々威名關以東。又知天下有英雄。鼓聲不起邊城靜。

驅使江山入轂中。

補菴景三

江戸城高不可攀。我公豪氣甲東關。三州富士天邊雪。

收作青油幕下山。

蕭菴龍統

雲連雪嶺水連吳。城上軒窻開畫圖。最愛似留行地日。

碧天低野入平蕪。

古今壯遊之士。有志於四方者。必以經歷關左山東之地爲先焉。凡遊關左者。必以見富士山。過武藏野。渡隅田河。登筑波山。則皆誇四方觀遊之美也。予壯年之時。跋而望之。然今耄矣。遂初志者。百不獲一。以是爲恨。頃聞太田左金吾源公者。關左之豪英也。守武州江戸城。而有功於國矣。蓋武之爲州也。以用武爲名。甲兵四十萬。應卒如響。乃山東之名邦也。江戸之城。於是乎在。雄據其要。而堅備其壘。所以一人當險。萬虜不進。亦乃武州之名城也。矧夫此城最鍾勝景。寔天下之所稀也。睥



睨之隙。隨地形勢。彼有樓館。此有臺榭。特置一軒。扁曰靜勝之軒。是爲其甲也。亭曰泊船齋。曰含雪。各其附庸也。若其憑軒燕座。回瞻四面。則西北有富士山。有武藏野。東南有隅田河。有筑波山。此乃四方之觀。在此一城也。而一城之勝。又在此一軒也。繇是四方有志之士。不欲復遠遊。俱願一登此城。到此軒者。亦其理之當然也。而今金吾公託其客之西上者。求京師諸人之題詠。而將藻飾其軒楣間之詩板也。得命同題者。及予五人。然此五人之中。東遊躬歷其地者。惟統正宗一人而已。故以序屬正宗。具陳于前。告不知者。如往觀焉。於是就予以求後題。不肯拒辭。輒用所聞於正宗之說。而附于篇末。且復傳語金吾公。雖予耄矣。之後。而跋望之志尙在焉。文明八年龍集丙申八月初吉。書于岩栖之村菴。希世靈彥。

寄題左金吾源大夫江亭



士嶺衝天東海瀾

靜中勝景畫中看

湘山暮樵得么

一山旬雪梅花鶻

載泊前灣晚照殘

武陵興德

華構臨江天宇低

北帆南揖日斜西

鸞端雪白漁竿客

萬頃玻瓈可釣齋

相陽中榮

華館相攸主亦賢

江亭茲試武城絃

東溟浸戶波黏地

西嶺當窻雪界天

珠履三千門下客

玉樓十二洞中仙

憑誰說與蘇夫子

赤壁休誇前後篇

河陽東勸

士嶺之東湘水北

一亭新架有高城

閭閻撲地育民庶



經籍滿床羅俊英。

鷗渚鷺汀春晝靜。

竹籬茅舍暮光晴。

丹青難畫戰圖外。

帷幄運籌張氏情。

左金吾源大夫江亭記

關左形勝之雄。以武爲冠。武者大國也。其山木奇傑。而兼要嶮者。江戸其武之冠乎。距相府。連幙可百里焉。綠蕪白沙。竝海以北。玉簪之山。羅帶之水。跋涉忘劬。而不覺日之將晚也。翠壁丹崖。屹然以高峙。珍卉佳木蔚然而中秀。迺左金吾公源大夫之所築新城也。攀以躋焉。俯以臨焉。四面斗絕。直下百丈。東南佳山水。歷々以在杖履之下。南顧則品川之流溶々漾々。以染碧。人家鱗差乎北南。而白楸紅樓。鶴立羣飛。以翼然乎其中。東武之一都會。有揚一益二之亞稱也。東望則平川縹緲兮。長堤緩廻。水石瑰偉兮。佳氣鬱芬。謂之淺草濱。白花大士遊化之場。巨殿寶坊輪奐。以掩映乎數十里瀛。補洛妙境。神人所幻云。其後則滄洲

茫乎。百川與海會。吳楚東南拆。乾坤日夜浮。卽此乎。其前則谷岩出沒。而原野莽蒼。天塹之幾多仞。一夫當關。則百萬不可以近。世乃知此地。面勢實一方金湯之最。而無所與二也。昔周室中微。有諸侯患仲山甫。城于東方。國人安以集也。宣王大興焉。公柵於斯。外扼敵之喉襟。內據武府之腹背。東民賴之。公之功可謂與仲山甫顏行者。城上置間燕之室。扁曰靜勝。靜勝蓋兵家之機密乎。當其西簷。而有富士峯之雪。天削芙蓉。以玉立三萬餘丈。其窻曰含雪也。凭南檻。則積水涵天。沙鶻含吐。洪潮以出。縮于曉夕。羣山隔岸。雲鬢梳洗。濃翠而隱。見于陰晴。自然無軸之畫也。鳧渚鷗汀。漁家民屋。枕藉以雜處。沙戶水扉。人朴地清。旅船之所泊也。青龍赤雀。舳艫相銜。蘭棹桂槳。舸經舫緯如織。而欸乃之聲無斷也。江情湖思。寔樂矣哉。縮小亭曰泊船也。摘字於浣花詩史。其人襟宇瀟灑。措意於騷雅之域。弗語而可以知而已。於是湘中僧卽以詩



鳴其道者。或慕鬻公之逸韻。或歆羨其山水之美。以寄詩言志。金薤琳瑯。其音玲瓏而成章。余亦寓錚々於餘響。魚目入珠。燕石濫璞。非志也。公之求之嚴也。重以紙尾書而見命。余朴而野者。文何之有邪。然督責弗過。譚避無他辭。磨鈍鐫朽。以聊且槩記其景象之曼乙而云爾焉。文明丙申秋之抄也。湘山暮樵得么。

文明六年六月十七日、江戸城において、道灌歌合を興行す。これを江戸歌合と呼べり。其人々にいはく、

心敬	資雄	平盛	音譽	道灌	珠阿	孝範
資俊	好繼	快承	卜巖	資常	宗信	瑞泉坊
惠仲	資忠	長治	<small>以上十七人判者は心敬、備郡、講師は平盛なり。</small>			

孝範家集 二月十三日いつも聖廟法樂とて和勝軒(太田道灌)にて一讀はべりしに梅の盛うすくこき色香もわかぬ梅の花ひとつにかをる春のあけほの 孝 範

宗長東土産 折ふしうちくしに申し傳ふる人ありて、江戸の館に六七日逗留にもよべり。連歌三百韻あり。

霜さむき松ゆく田鶴の朝日かな  
遠山にこよろは雪の朝戸かな  
雪は今朝水につもれるみぞれかな  
上杉建芳

我庵は松原つづき海ちかく土富のたかねを軒端にぞ見る  
道 灌

此和歌は太田道灌和勝軒の合雪亭にありて詠じけるといふ。

宗牧東國紀行

四日、天氣よくて江戸の城につきたり。遠山甲斐守に人造したれば、驚きながら先づ旅宿の事云付られたり。ことに亭主宗三とて、和泉堺衆なれば、時宜心やすし。城より使、明後日上總國へ出陣の事侍るとも、むりに一座懇望のよしあり。色々故障めいわくの由、再往なれども不及了簡。しかればせめて晝つかたより始られよかしなど申して、一順の爲



とて、筆も取あへず。

玉すだれ花にあけゆく千里かな

此城の遠望、下には運籌帷幄中決勝千里外、このこころをいさよか祝したるばかりなり。又六日太田越前守興行の事申し來れり。これは小田原にての兼約と申ながら、既に明日息彌太郎出陣なれば、取亂さで侍らむ、されども斟酌同心あるまじき執心なれば、發句のもよほしにおよばず。

花にみぬ朝露ふくむ色香かな

見えたるまよなるべし。一座はとくはてたるに、盃色々彌太郎出陣をいはず、連歌の心だて見えたり。立兼て舍弟西堂のえさがたく、れいの酪酩、このかへさに富士見の亭一見すべしと申したれば、富永もとへ會席よりたよれて、またれたるほどなり。これ又小田原より兼々仰られたる事にて、掃除などの本ノマ、迎の岡、松いくむらとなく入江かけたる本ノマ、もひとつにながれ、みちたるひろぬさ忍び、用心こころやすけなり。暮はてたれば、

富士も見えず、おもかけさながら中空なりけむ。武藏野の眺望こよにつくしたるべし。東の矢ぐら又菟玖波山の亭とや、遠浦の歸帆、むさし野をはしるかと思えたるに、さしのほる夕月夜、盃にうつりたれば、

國々も君がなびかす白雲のはたてにかすむ山はふじのね

明る出陣、又太守へ詠進しかるべきよし、各異見の事にて、はどかりを忘れたり。七日には、はたらきの軍勢、あとさきに立ち侍り云々。始に四日とあるは天

吹上御庭 舊名を局澤と云ふ。 按ずるに、吹上とは江河に臨んで高き地をいふなるべし。嵯州富士川の邊、武州荒川の邊、吹上といへる所あり。又江戸小石川永川明神の南の地、舊名を吹上といふも、小石

松原小路 田安御門の内なり。昔此地松原にてあしりを、結城黄門公御館を建られて、木立

の御館と呼けるとぞ。 往古太田道灌、我處は松原つとき海近く、と詠せし和歌によりてしか名づくるといへり。或人云ふ、此

邊に、國師やしき、と記してあるは、觀智國師の屋敷を踏して

梅林坂 平川口御門の内にあり。文明十年の夏、太田持資或日一室にありて午睡のうち、靈



夢を感じ、翌日菅公親筆の畫像を得て、こゝに勸請し、梅樹數百株を栽、依て梅林坂の號ありと云ふ。其昔神の宮は、今龍町平川町にある、平川天満宮なり。三卷の初平川天神の條下につまびらかなり。平河は、往古上下とふたつにわかれてありし由、小田原北條家の古文書に見えたり。本所の法恩寺、赤坂の淨土寺等の寺院、昔は此地にありしとなり。

八代曾河岸 和田倉御門の外の、御堀端をいふ。天正以前は、此地波打際にて、漁者の住家のみなりしとぞ。其後日比谷町と云て、肴店多き町屋となりしに、慶長の頃、ヤンヤウスハ

チクワンといへる異國人にこの地を給ふとぞ。名所記に、八重敷に作り。又江戸雀は八重洲とし。紫の一本に、彌與三に作る。又江戸子治容子とも書くとあり。事跡合考には、彌養子に作りたり。或人云ふ、慶長十九年甲寅九月一日、阿蘭陀人來る。耶揚子虎の子二疋を柳營に奉ると云々。又一書に、耶揚子は吉

利交丹御制禁のとき、御恩節をなせし蠻人なりといへり。事跡合考に云ふ、日比谷町は芝口へ遷され、肴屋のありし町は、京橋の新看町是なり。又彌左衛門町壘町など云ふも、同じ所にありしとなり。新看町の一を内町と唱ふるも、御城内の町といふ古俗の唱なりと云々。今八丁堀に、日比谷町と云ふあり、是も其地より出たる町なるべし。

龍の口 和田倉御門の東、御溝の餘水を落す。此所迄潮さし入あり。昔此邊を平田村といひしと云ふ。同所南の角、松平右京兆第宅の内に平田明神の社あり。祭る神詳ならず。いはば稻荷を勧請す。又此地其

昔は、蒲生飛驒守氏郷の宅地なりと云傳ふ。龍の口、虎の門、梅林坂、竹橋是を合せて、營中の龍虎梅竹と稱しあへり。道三橋 細川侯藩邸の北の通より、常盤橋の方へ渡る橋の號とす。昔此橋の南に、典藥寮の

御醫官、今大路家の弟宅ありしとなり。ゆゑに此所を道三河岸といふ。延寶圖に内河岸とあり。慶長の頃は、柳町と云ひし傾城町なりしとなり。慶長十二年の圖に、町屋とのみしるしてあり。俗間傳云ふ、ある時大將軍家道三をめさる、少し遅々したりければ、御咎ありし時、御堀をめぐる故に、其道遠しと申上げれば、其後此橋をかけしめ給ふとなり。江戸名所ばなしに、道三河岸南北ともに道三をはじめ醫術の面々本道外科針立衆まで軒をならべて住宅すと云々。寛文江戸繪圖に、此はしを彦次郎橋としるしてあり。又大道寺友山翁云く、道三河岸御入國の頃、材木渡世の者軒をならべてありしが、後年彼地武家の屋敷となりける故、御城の外東の方へ移さる。今の材木町是なりと云々。

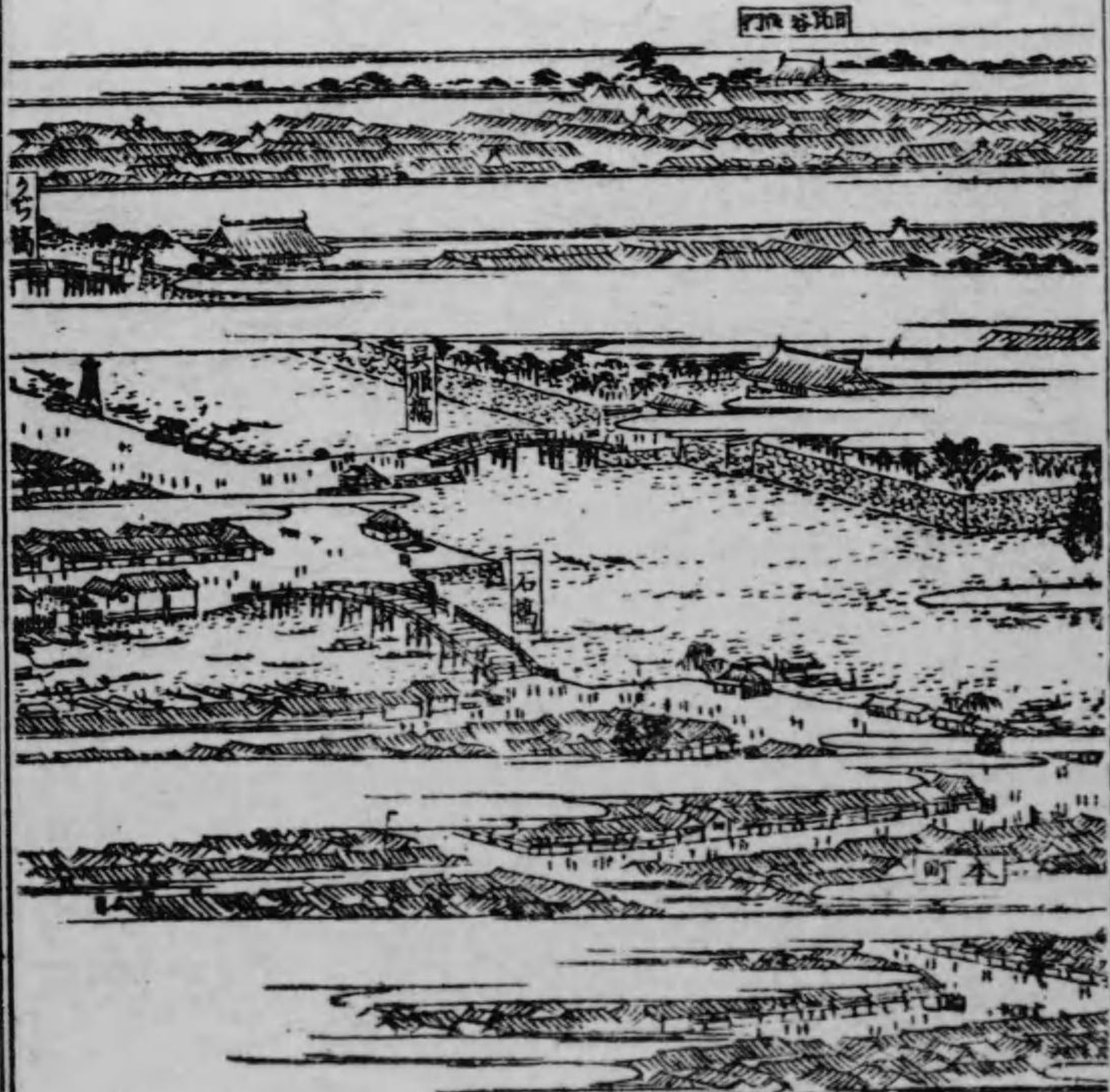
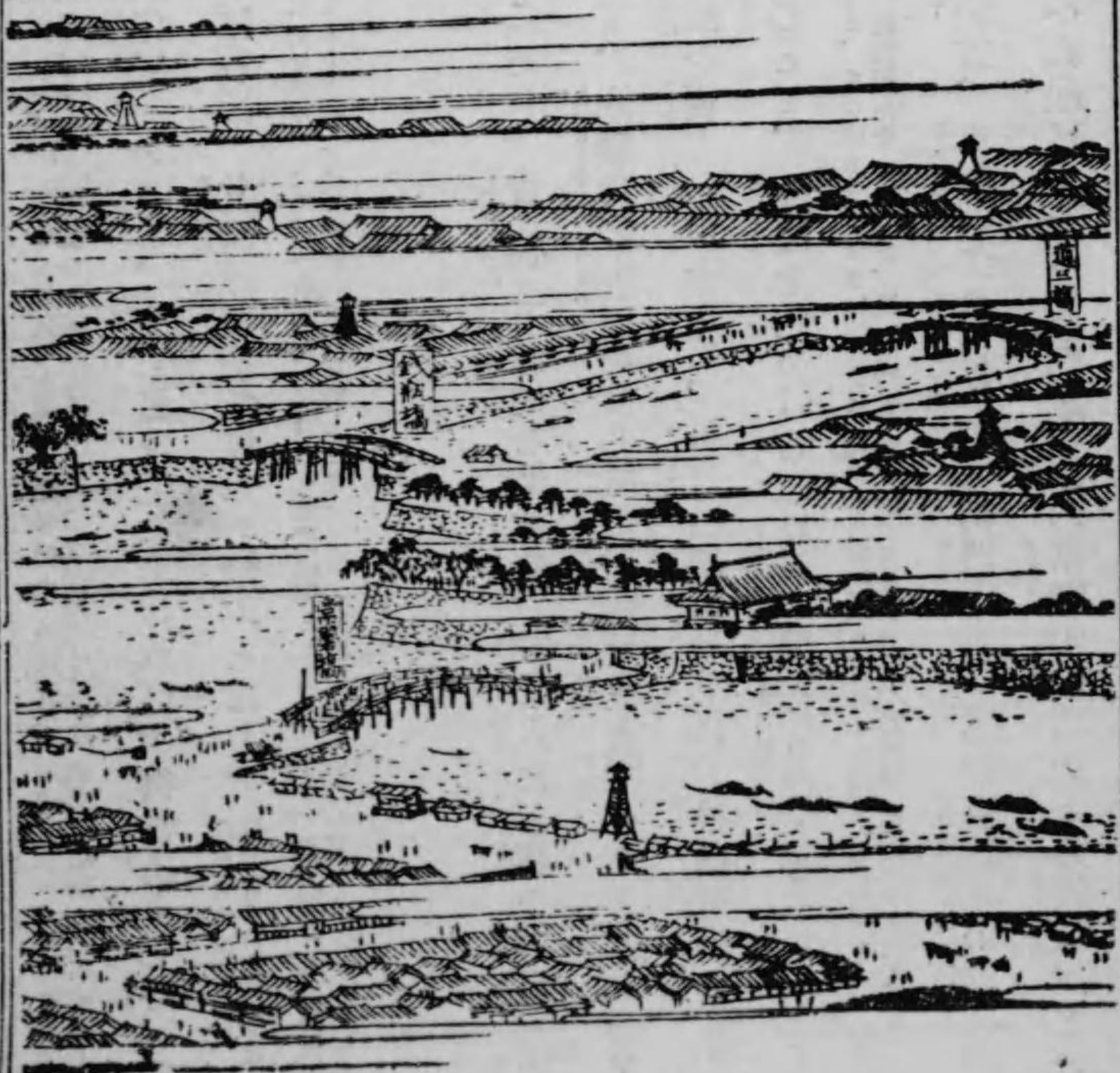
錢瓶橋 常盤橋と吳服橋の間にあり。昔初て此橋を架す時、錢の入たる瓶を堀得し故、號とすと。一説に、昔此所にて、永樂錢の引替ありし故に、錢替橋と唱へしとなり。又江戸總鹿子に云く、昔此地にて、錢を賣もの市をたて、毎日に兩替せしに、後は錢賣多くなりければ互に渡世の爲にもなるまじとて、仲間を定めける。依て其頃錢買ばしと云けると云々。

常盤橋 御本丸の大手より東の方、本町への出口にして御門あり。橋の東詰北の方に、御高札を建らる。金葉集に、色かへぬ松によそへてあづま路の常盤の橋にかゝる藤波、といへる

江戸鹿子、江戸雀等の冊子に、錢瓶橋に作るは、さらにより所なきに似たり。寛永十八年印本をよめるもの語といへる冊子に、天正十九年の夏、伊勢與市といへる者、錢瓶橋の邊に洗湯風呂を一ツ立る、風呂錢は永樂一錢なりとあれば、錢瓶橋に作る事久しとしるべし。



八見橋  
 一石の異名  
 ありは格上り  
 願望せられ  
 常盤橋  
 鐵丸橋  
 道三橋  
 兵服橋  
 日本橋  
 江戸橋  
 鐵治橋  
 一石橋を加へ  
 八見と云ふ  
 日本橋と江戸橋  
 の間ハ次々  
 ありてぞぞぞぞ





日本橋

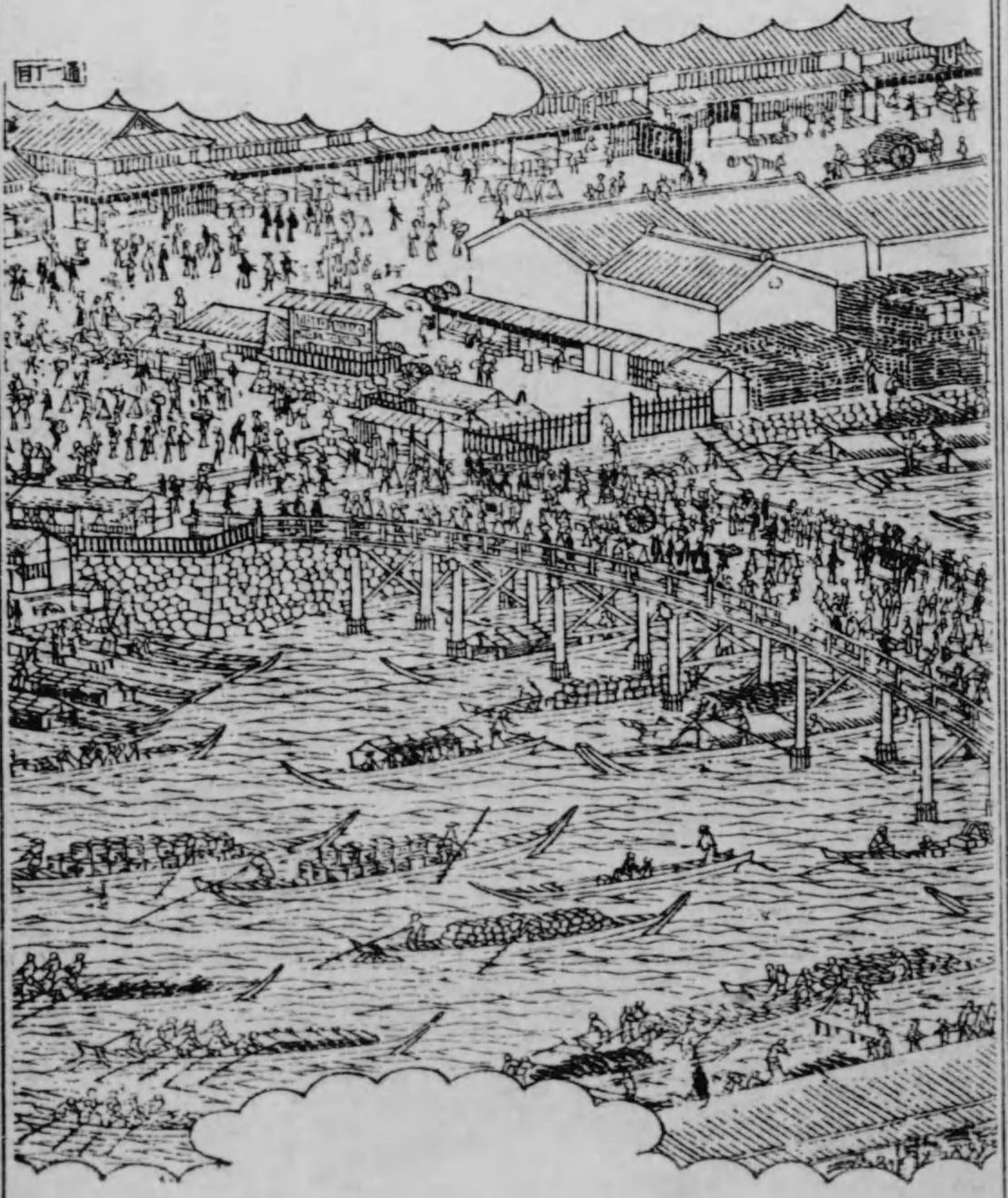
自是太平無事客  
東國行盡幾山川  
武江城上慶雲節  
日本橋頭人氣旋  
翠帶紅衣常好舞  
玉鞍金帶每頻聞  
相如題柱如何意  
富貴使來元在天

山崎廣壽

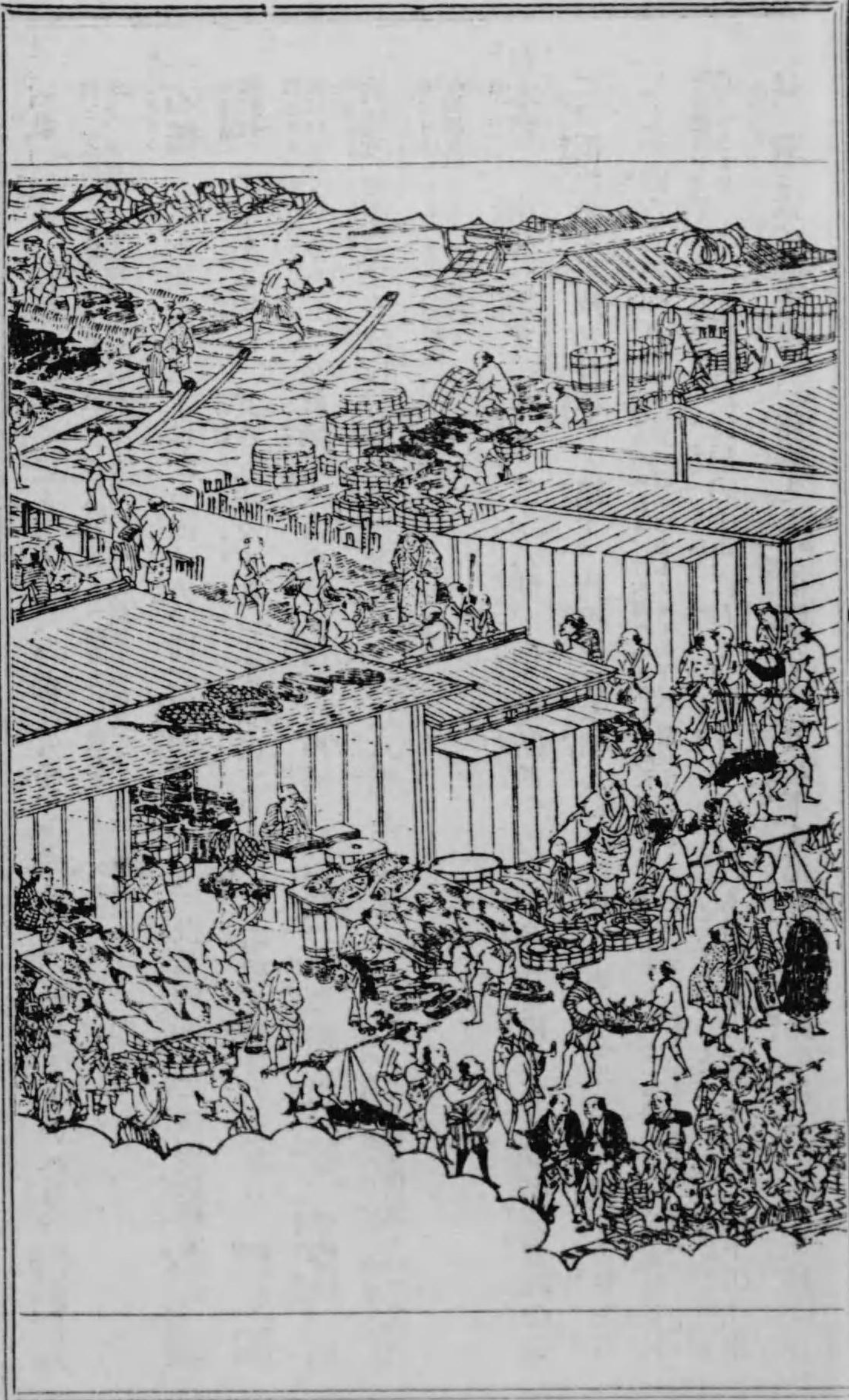
日本橋



日本橋







日本橋  
魚市





古歌の意を、松平の御稱號にとりまじへ、御代を賀し奉りての號なりといへり。按ずるに、此橋といひ傳ふるは誤なり。慶長十二年の江戸繪圖に、今の御本九の下乗橋を、大橋とししてあり。同圖に、常盤橋をば淺草口橋としるせり。依て常盤橋の大橋にあらざる事をしるべし。

一石橋 日本橋より二丁ばかり西の方、同じ川筋にかよる。此橋の南北に後藤氏兩家三郎、吳服所後藤 邸助の宅ある故に、其昔五斗々々といふ秀句にて、俗に一石橋と號けしとなり。寛永の江戸繪圖には、後藤邸助の宅あり。斗の音トウなり。其頃は五斗と云しなるべし。又此橋上より日本橋、江戸橋、吳服橋、錢瓶橋、道三橋、常盤橋、鍛冶橋等を願望する故に、此一石橋を加へて共に八橋と云ふとぞ。

此橋の南詰、東の方へ行く河岸を西河、岸町といふ。榎木間屋多く住する故に、榎木河岸ともよべり。又差垣廻船間屋其外諸方への舟宿多し。

日本橋 南北へ架す。長凡二十八間、南の橋詰西の方に御高札を建らる。欄檻葱寶珠の銘に、萬治元年戊戌九月造立と鐫す。此橋を日本橋といふは、旭日東海を出るを、親しく見る故

にししか號るといへり。事跡合考に云ふ、日本橋のかくりしは慶長十七年の後歌とありて、其考へを記せり。されど北條五代記、永樂錢御禁の事をしるせし條下に、慶長十一年のとし極月八日、武州江戸日本橋に高札を建る、とある

時は慶長十七年より以前なりとしるべし。此地は江戸の中央にして、諸方への行程も此所より定めしむ。橋上の往來は、貴となく賤となく、絡繹として間斷なし。又橋下を漕つたふ魚船の出入、旦より暮に至



る迄、嗷々として罷りし。北の橋詰を望町一丁目となづく。この町の眞角を尾店といふは、尾船屋又右衛門、拜領の町屋な  
きなふ船多し、其西の橋小路を品川町裏河岸と號く、釘物物の店多き故  
に、釘店といふ。又東の河岸を船町といふ、魚家ありて日毎に市を立る。

**魚市** 船町、小田原町、安針町等の間、悉く鮮魚の肆なり。遠近の浦々より海陸のけぢめ  
もなく、鱗魚をこよに運送して、日夜に市を立て甚賑へり。

鎌倉を生て出けんはつがつを  
帆をかふる鯛のさはぎや薫る風  
芭蕉  
其角

**祇園會御旅所** 大傳馬町二丁目の乾の角にあり。此所は、すべて兩側共に、吳服物の問屋のみ住す。此街に、年  
はなはだに、その宮所は、神田明神の地にありて、祭神は五男三女なり。これを八王子と稱す。每歲六月五

日、本社よりこよに神幸ありて、同八日歸輿す。また小船町を旅所とするものは、同十日に  
神幸ありて、同十三日歸社なり。是も宮居は、神田明神の社地にありて、祭る神は奇稻田姫

にして、是を本御前と稱せり。いづれも旅所に遷幸の間は、日夜參詣群集して、一時の賑ひ  
なり。



駿河町  
三井呉服店

えびの

の

とみや  
せん

ふ二

の

ちん

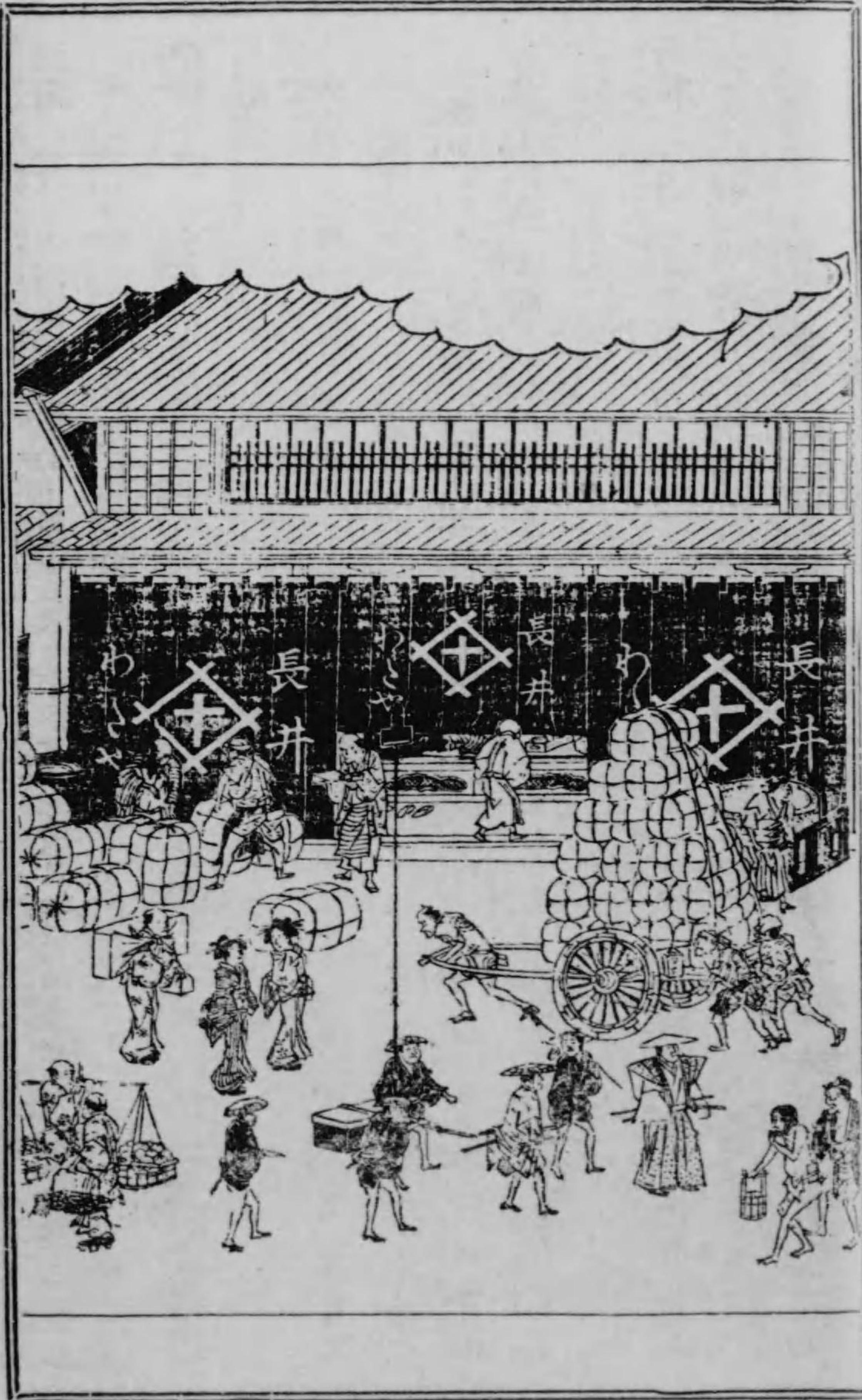








大傳馬町  
木綿店





通町 北の方、筋違橋の内、神田須田町より南へ、今川橋、日本橋、中橋京橋、新橋を経て、金杉

橋の邊迄の惣名にして、町幅十間餘あり。

浮世小路 室町三丁目の間の東の横小路を云ふ。されど其故をしらず。或人云ふ、疊表、浮世臥座而ふ

呂屋遊女の居たりし故ともいへり。

十軒店 本町と石町の間の大通をいふ。桃の佳節を待得ては、大裡雛、裸人形、手道具等

の、鷹軒端を並べたり。端午には、胃人形、菖蒲刀こよに市を立て、其賑ひをさく、彌生

の雛市におとらず。又年の暮に至れば、春を迎ふる破魔弓、手毬、破胡板を商ふ。共に其市

の繁昌言語に述盡すべからず、實に太平の美とも云はんかし。町、駒込などにも雛市あれども、此所の市

にはし

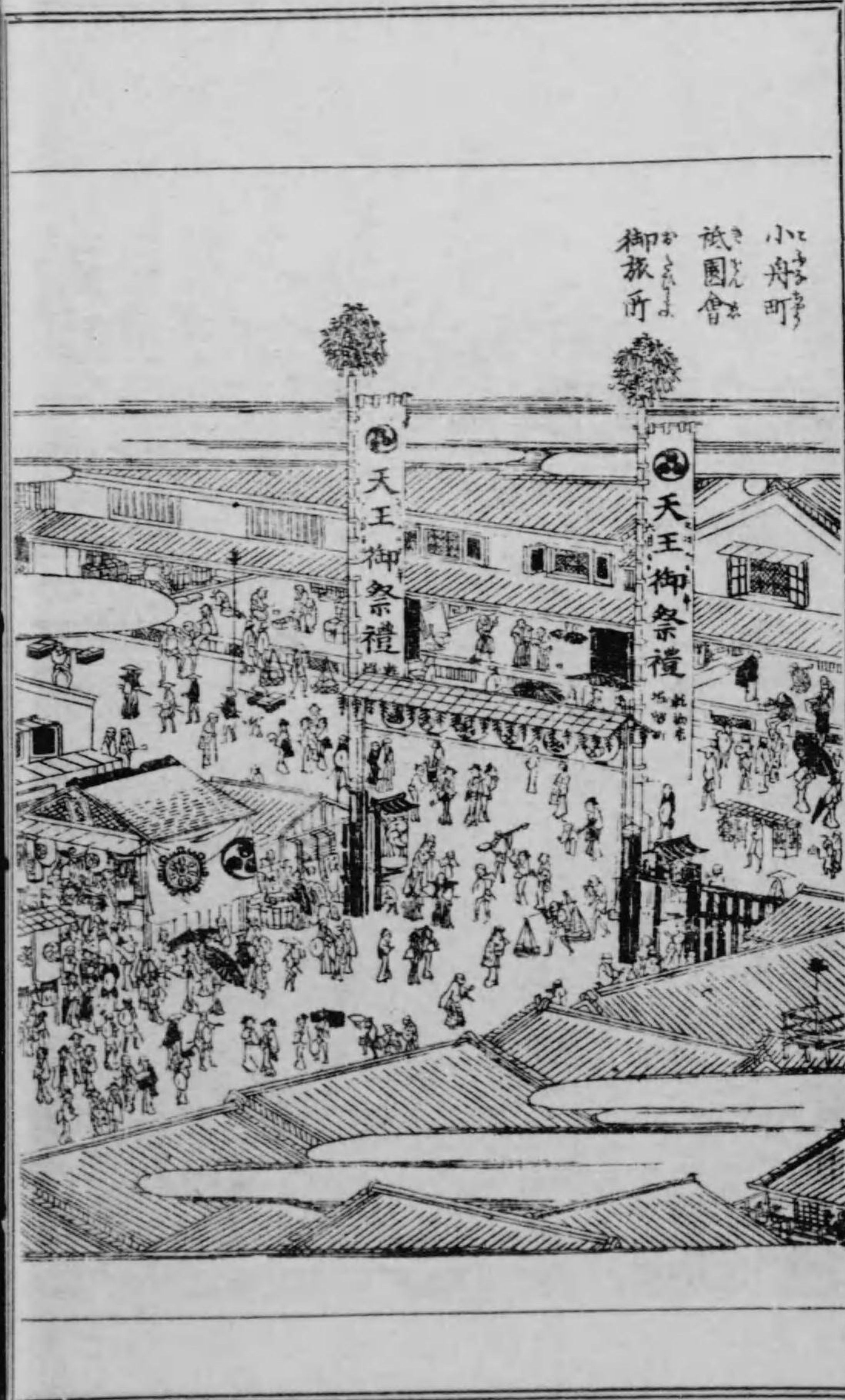
時鐘 石町三丁目の小路にあり。辻源七といへる者は役す。此鐘初は、御城内にありしと

なり。其餘、都城の礎りに有て、候時を報するものすべて八ヶ所なり。所謂淺草寺、本所橋

銘曰 寶永辛卯四月中浣鑄物御大工権名伊豫藤原重休







小舟町  
祇園會  
御振所

天王御祭禮

天王御祭禮

五元集

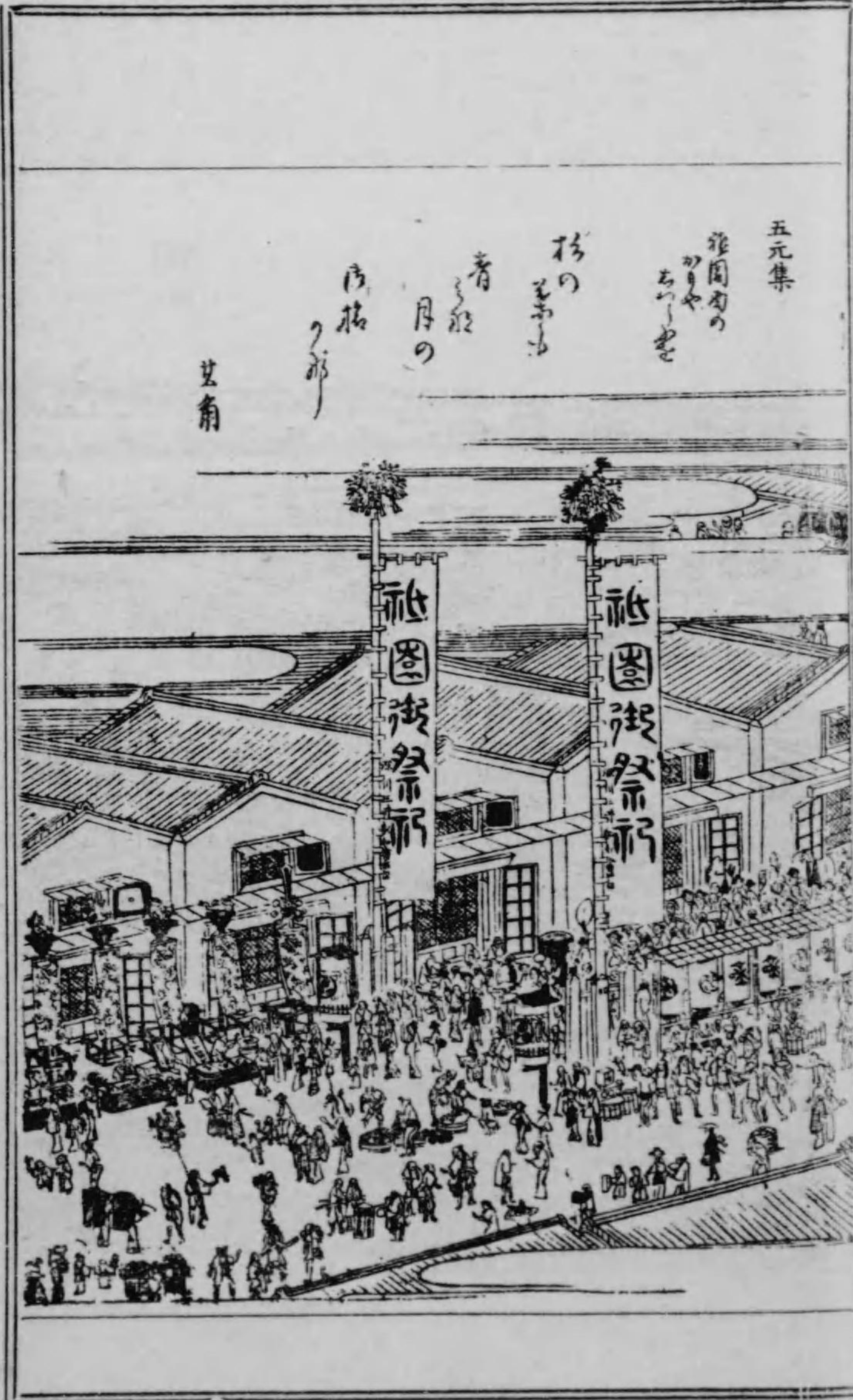
祇園町の  
お祭り

杉の  
まつり

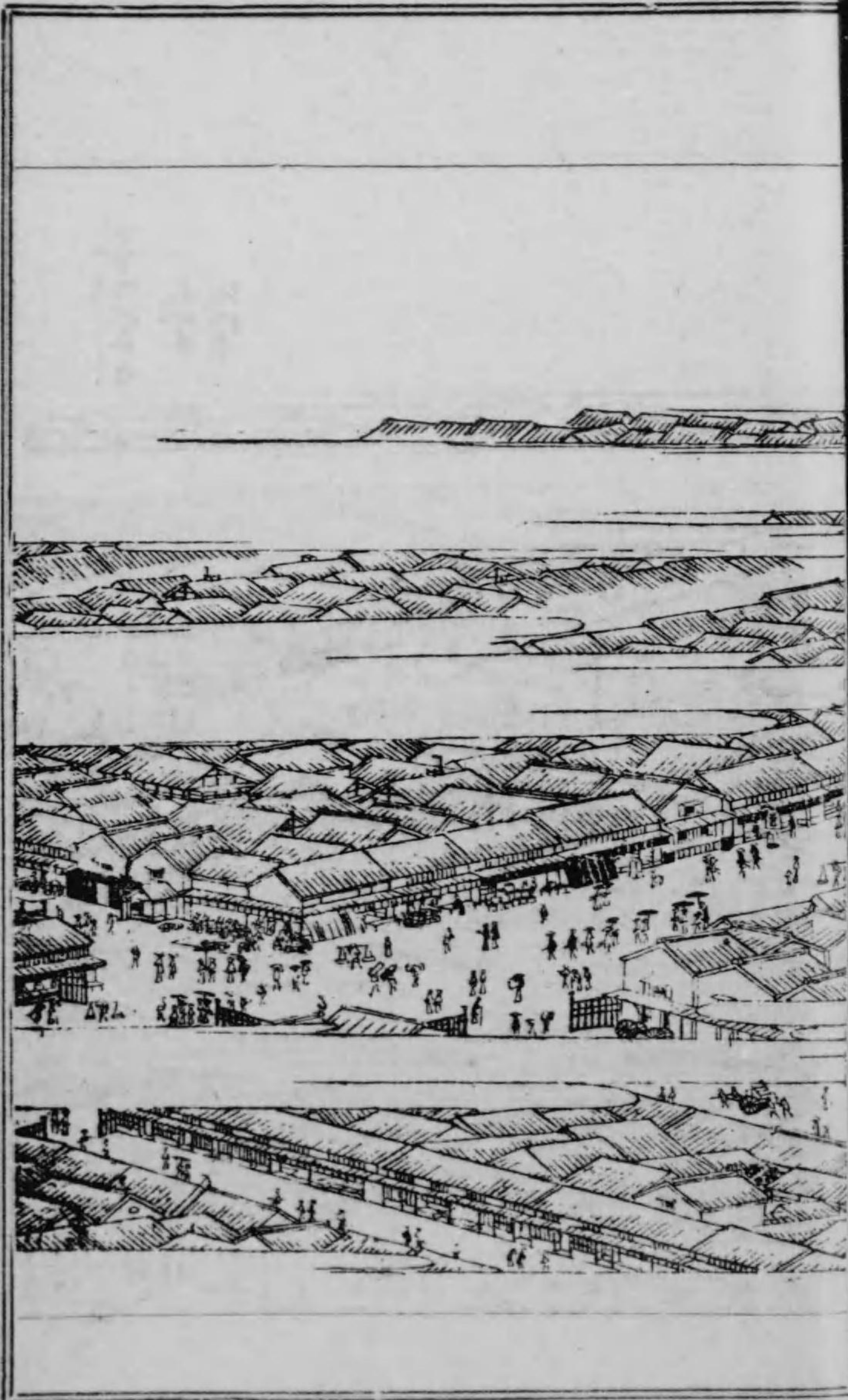
若  
月の  
まつり

花  
まつり

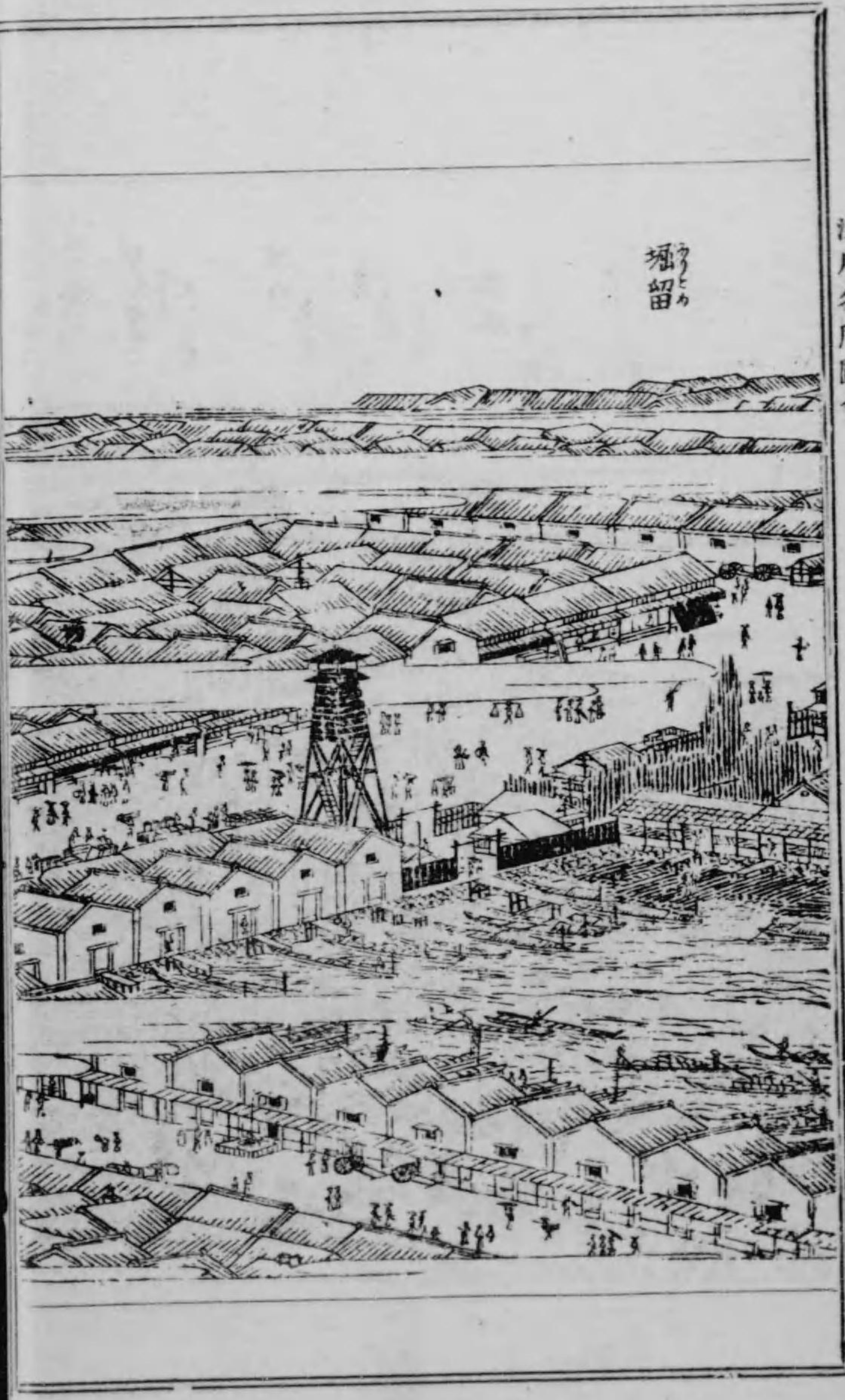
芝角





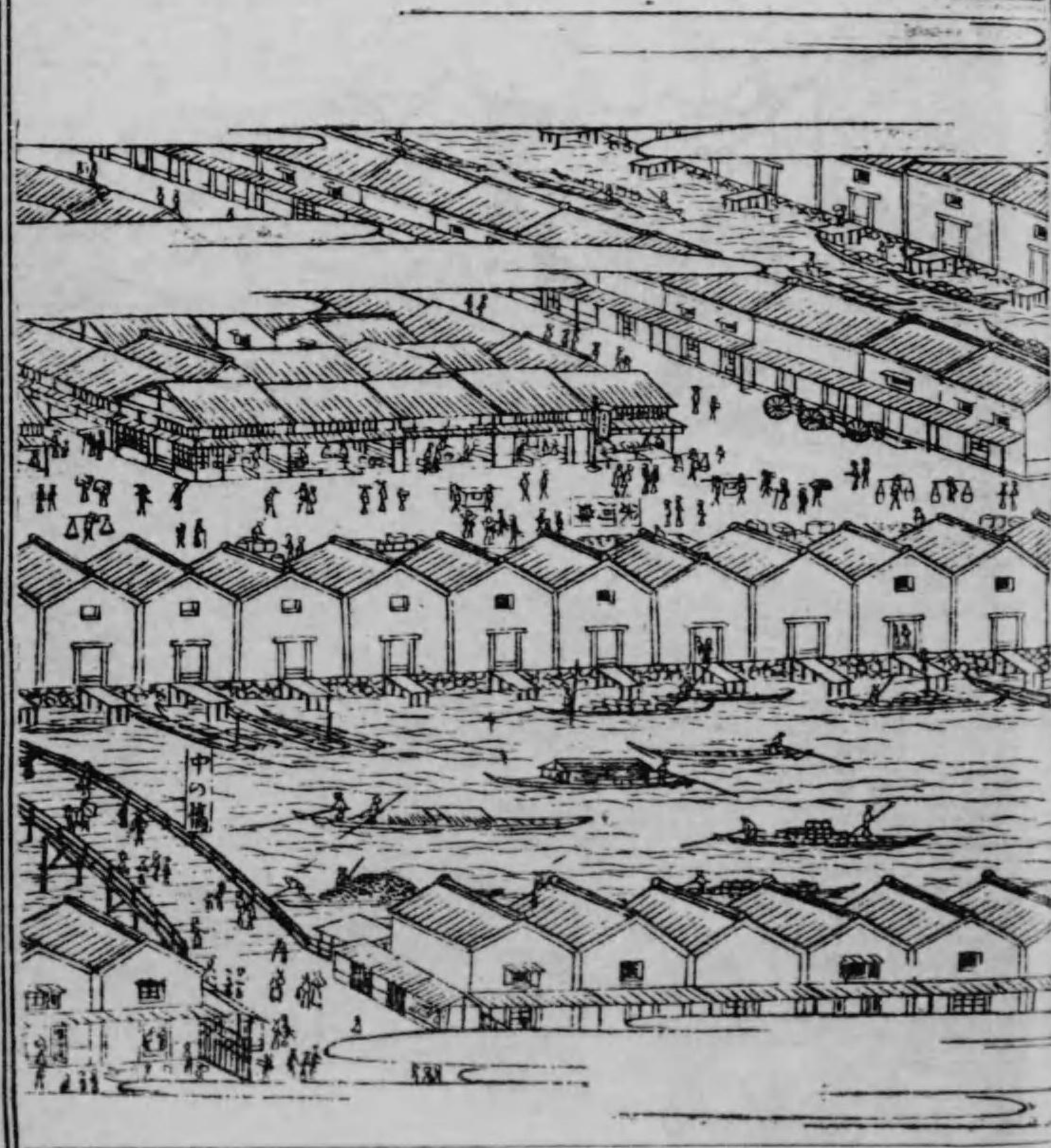
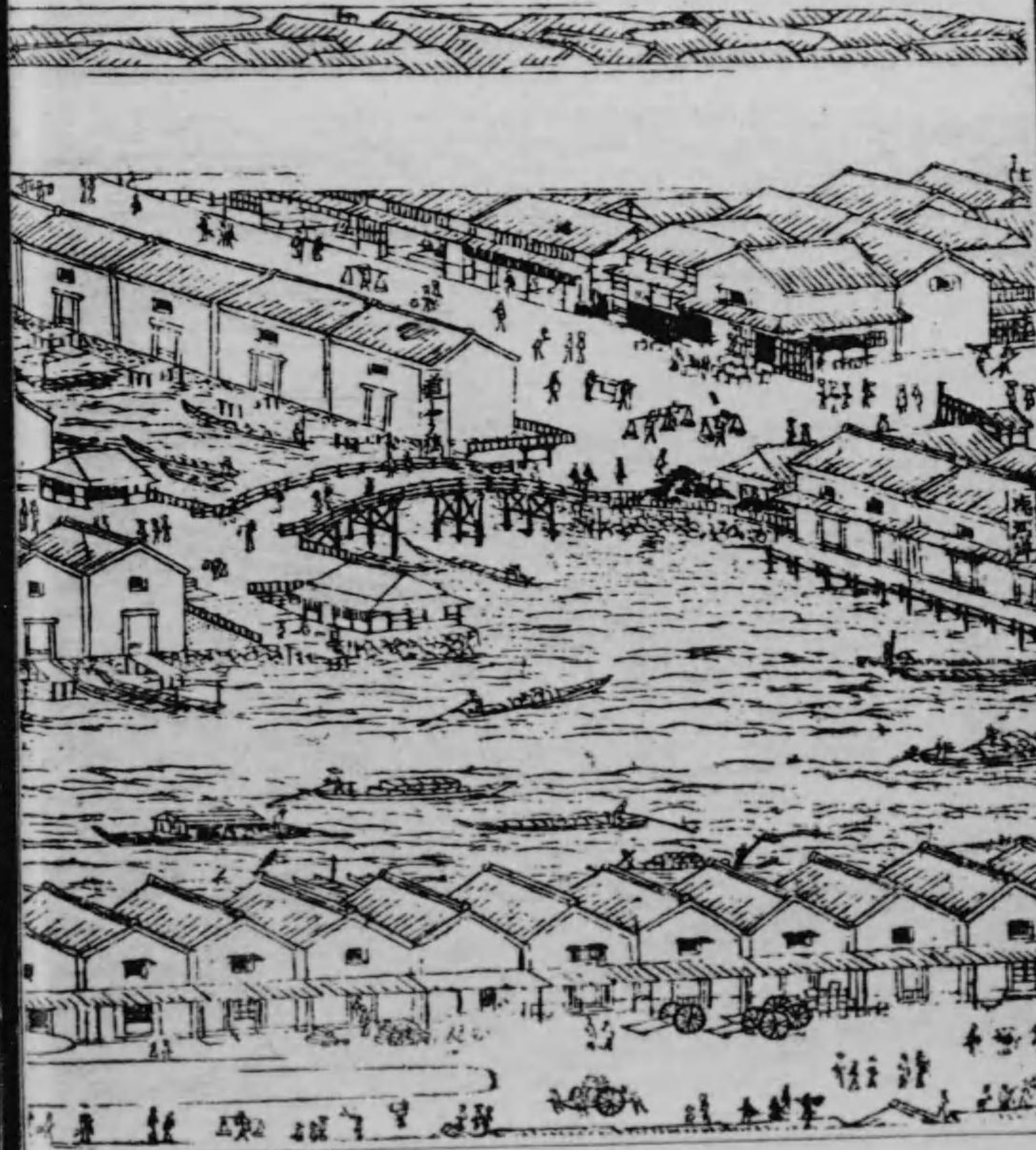


堀留





伊勢町河岸通  
米河岸  
盛河岸







十軒店  
市

内表筋

人形

三堂の

所宇

とよ

芭蕉





抄ずるに、寶永七年十二月十九日、警願寺前より出火し、石町のあたり焼亡す。其頃此鐘も焼けたりし故に、翌る寶永八年、鑄直されしなり。

**福田村舊跡** 本石町一二町、本銀町一二町の邊其舊跡なりと云傳ふ。大久保主水屋敷内に、福田稻荷と稱する官居あり。わかし

福田村といひし頃の鎮守なり。今本銀町一丁目自旗稻荷とて、三寶院派大壽院もちの官は、自ら別なり。

**千代田村舊跡** 鉄炮町のあたり、昔の千代田村なりといへり。いふ小馬馬町の裏の小路に、千代田稻荷と

此地の里正官邊某、昔忍岡の鎮より、宅地に移すとなり。靈驗奇蹟頗る多しといへり。或人云ふ、此官は、寶正中太田道灌の弟千代田若狭守の勳請なる故に此名ありと、されども道灌に若狭守といへる同胞ある事を考へず、又系圖にも此名見えず。

**本銀町封疆** 明暦年間水災を除かしめんが爲にこれを築しむ。今寶永八年の江戸繪圖に、銀町及び鹽町と號くる。今

は同所二丁目三丁目の邊、わづかに其形を残せり。延寶八年の江戸繪圖に、銀町一丁目より、大門通りの所迄、石垣の土手をしるして松の並木を畫けり、茶の一本といへる冊子に、「一本松や六本松白銀町に八丁つづいたまづばら越えていとうたひしと云ふ。

**今川橋** 本銀町の大通より元乗物町へ渡る橋を云ふ。此堀を神田堀と號く。元祿四年辛未堀割たりとぞ。其頃此地の里正を今川某と云ければ、直に橋の號に呼けると云ふ。今此橋

詰の左右に陶器齋あり。又此北詰の西の河岸を、主水河岸と字す。御菓子司大久保主水の宅

ある故にしか云り。宅の前に井あり。主水井と云ふ。昔は御茶の水にもめさせられしとなり。

再較江府名跡志に、一石橋の北の橋詰に大久保主水が亭あり。寶永のころに大嵐、御船にて彼地を通らせ給ふ頃、主水の宅を問はせ給ひ、又半井下邊に一首仕るべき由、仰事ありければ、ト養とりあへず、大橋を通らぬみこも通れかし主水が餅を口によせば、と申上げるとなり。但しその家の傳ふる處、いかなるやしらず。

**神田明神舊地** 神田橋の内、一橋御館の中にありて、御手洗など今猶存すとなり。隔年九月十五日、祭禮の時は神輿をこくに渡り奉りて、奉幣の式あり。此邊舊名を芝崎村と云ふ。小田原北條家の古文書に、太田大膳亮所領の中に、江戸芝崎一跡と云ふ名を注せり。其昔は淺草

の日輪寺も芝崎道場といひて此地にありしなり。又神田と號くる事は、傳云ふ、往古諸國伊勢太神宮へ新稻を奉る故に、國中其稻を植るの地ありて、是を神田或は神田御田と唱へしとなり。此地は當國の神田なりし故、大己貴命は五穀の神なればとて、こよに齋りて神田明神と號け奉りしとぞ。

**神田橋** 大手より神田への出口に架す御門あり。昔此地に土井大炊侯の第宅ありし故に、又大炊殿橋とも號したるとなり。事跡合考に云く、昔は神田橋の外に茅商人あまた住す。今の八丁堀の茅場町。今本所の茅場町といふはこの故なりと云々。この御門

の外の町を、すべて神田と號く。

**護持院舊地** 神田橋と一橋との間、御溝の外芝生を云ふ。此所は大塚護持院の舊址なり。元祿年間

天樞之部 卷之一









梅原の南にありし知足院を、引て興持院と號せられ、殿室御建りんせん  
 立ありしが享保同院の後、大塚の地へ移され、後明地となる。林泉の形残りて頗る佳景なり。夏秋の間は是を

開かせられ、都下の人こゝに遊ぶ事をゆるさる。冬春の間は、時として大將軍家こゝに御遊

獵あり。故に此所を新駒が原とも唱ふるとなり。世俗は護持院の原と呼べり。

菰が淵 元飯田町の東の入堀をしか號く。蟋蟀橋と云ふは、同所北の方の小溝に架す石橋の

號なり。又小川町より九段坂へ向ふ所の橋を、今魚板橋と唱ふ。又廻橋に作る。されどその所以をしら

す。江戸名勝志に此川を飯田町と云ふとしるせり。世繼稻荷は飯田町の中坂にあり。文安の頃より此地に鎮座ありしと云

傳ふ。南向亭云く、天正の始、いまだ御廟の結構出来ざる先は雉子橋の外北の方の柵木板の下まで入江にて、其頃は市谷長圓寺谷に

橋の下の水流も、三崎稻荷の邊より小川町を經て、一橋より少し東南へよりて流れけると云々。

按ずるに、かく小川二筋迄流るる地故に、後世小川町の號起るならん歟。今松平讀岐侯の南の方の小構の石橋を、袖摺橋と唱へたる

も、小石川の水流の舊跡なりといへり。

關東古戦録 太田道灌江戸城にありし頃、眺望の和歌として、  
 むさしのよ小川の清水絶えずして岸の根芹をあらひこそすれ

按ずるに、此詠風調とくのはずして、しるすに堪へずといへども、しばらくこゝに擧ぐ。其小川の清水と號くるものは、小川町内藤大  
 和侯の庭中に存して、神田が淵とも云ふよし菊岡沾涼の説なり。江戸名勝志に云く、神田が淵は、内藤大和守屋敷の内にあり。これを





小川の清水と云ふなり。即ち神田明神の御手洗と云々。又按ずるに、かくいふは神田明神中古の舊地をいへるならん。其地は松平備前侯の屋敷なり。彼是混雜せしなるべし。

**田安の臺** 元飯田町九段坂の上、田安御門の邊をいへり。東南の方を斜に見下して、佳景の地なり。此所に築土明神の舊地あり。牛込御門の内、米倉家の所なり、此構の前に大榎一株あり。昔の神木なりと云傳ふ。築土明神昔は此地にありて、田安明神と稱したるとなり。

**水道橋** 小川町より小石川への出口、神田川の流に架す。此橋の少し下の方に神田上水の懸樋あり、故に號とす。此下の川は、萬治の頃仙臺侯命を奉じて、掘割らるる所なりといふ。萬治の頃迄、駒込の吉祥寺此地にあり。其表門の通りにありしとて、此橋の舊名を吉祥寺橋ともいへり。三崎稻荷は同じ西の方、土堤に傍てあり。此社ある故南の街を稻荷小路と號く。社記に云ふ、當社は上古の勧請にて、年代不詳。近くは天文七年小田原北條氏綱の造營たりと、又云ふ、此地は昔三崎村といひけるとぞ。因て三崎稻荷とも稱す。

**駿河臺** 昔は神田の臺と云ふ。此所より富士峯を望むに掌上に視るが如し。故に此名ありといへり。一説に、菅野府御城御在番の衆に、賜はりし地なる故に、號とすといへども、證としがたし。

**筋違橋** 須田町より下谷への出口にして神田川に架す。御門ありて、此所にも御高札を建てる。此前の大路を八ッ小路の辻と字す。昌平橋は是より西の方に竝ぶ、湯島の地に聖堂御造





鎌倉町  
豊島屋酒造  
白酒を  
商人  
岡

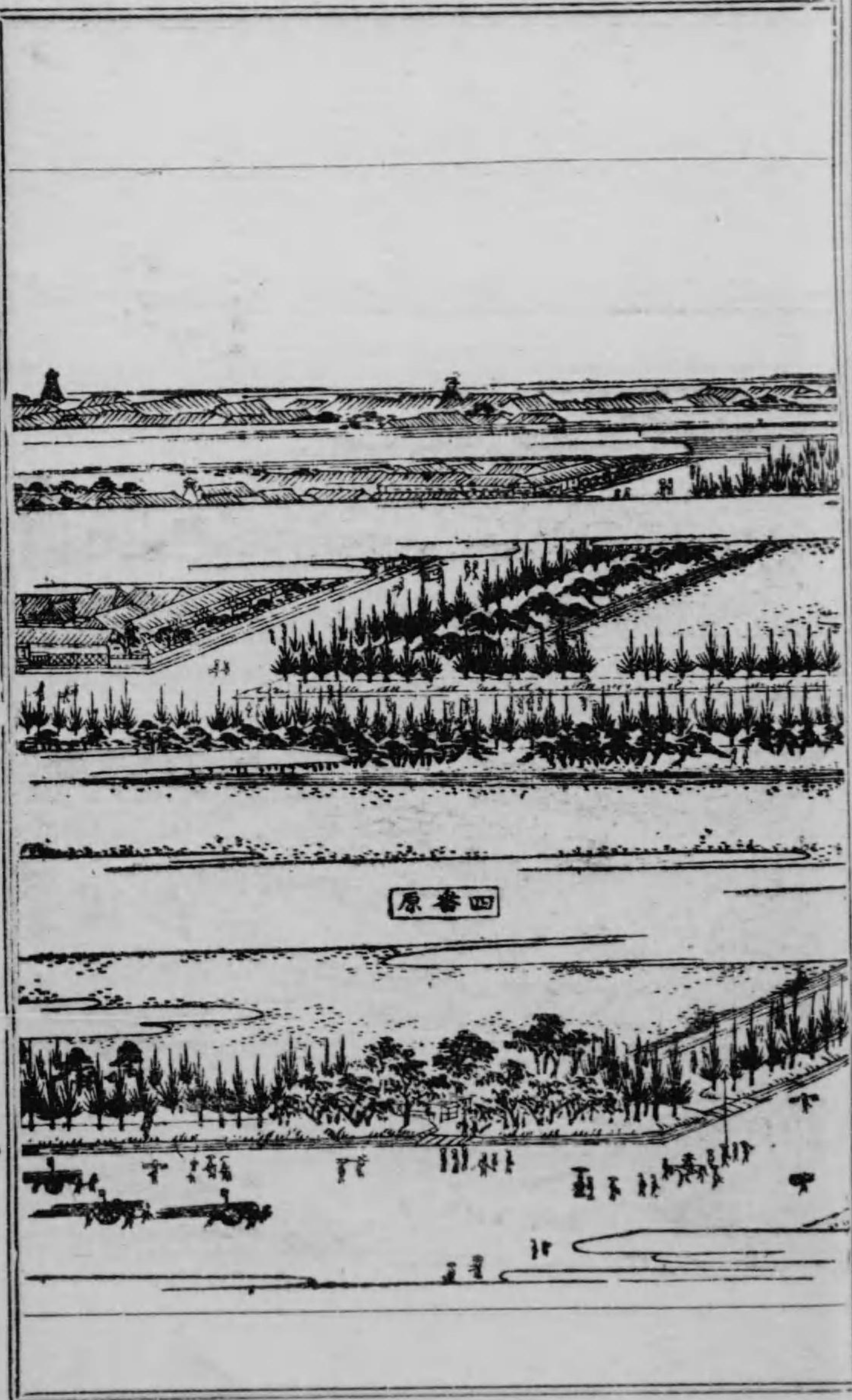
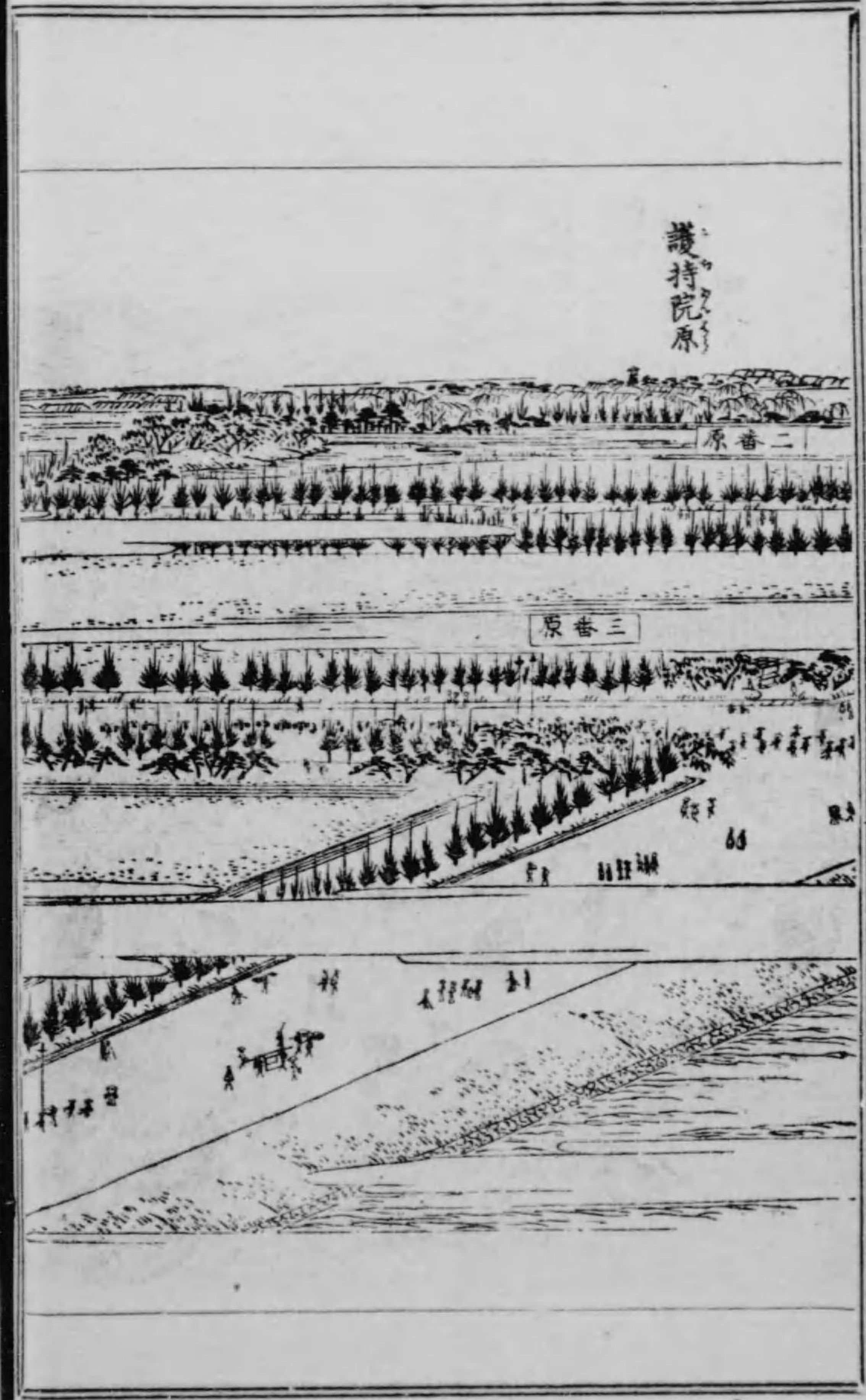
酒場油桐休中

例年二月の末博金町  
その年の酒屋  
於て難産の山崎  
と南は是と来ん  
とて速近の業  
黎明より  
肆前より  
賑ひ



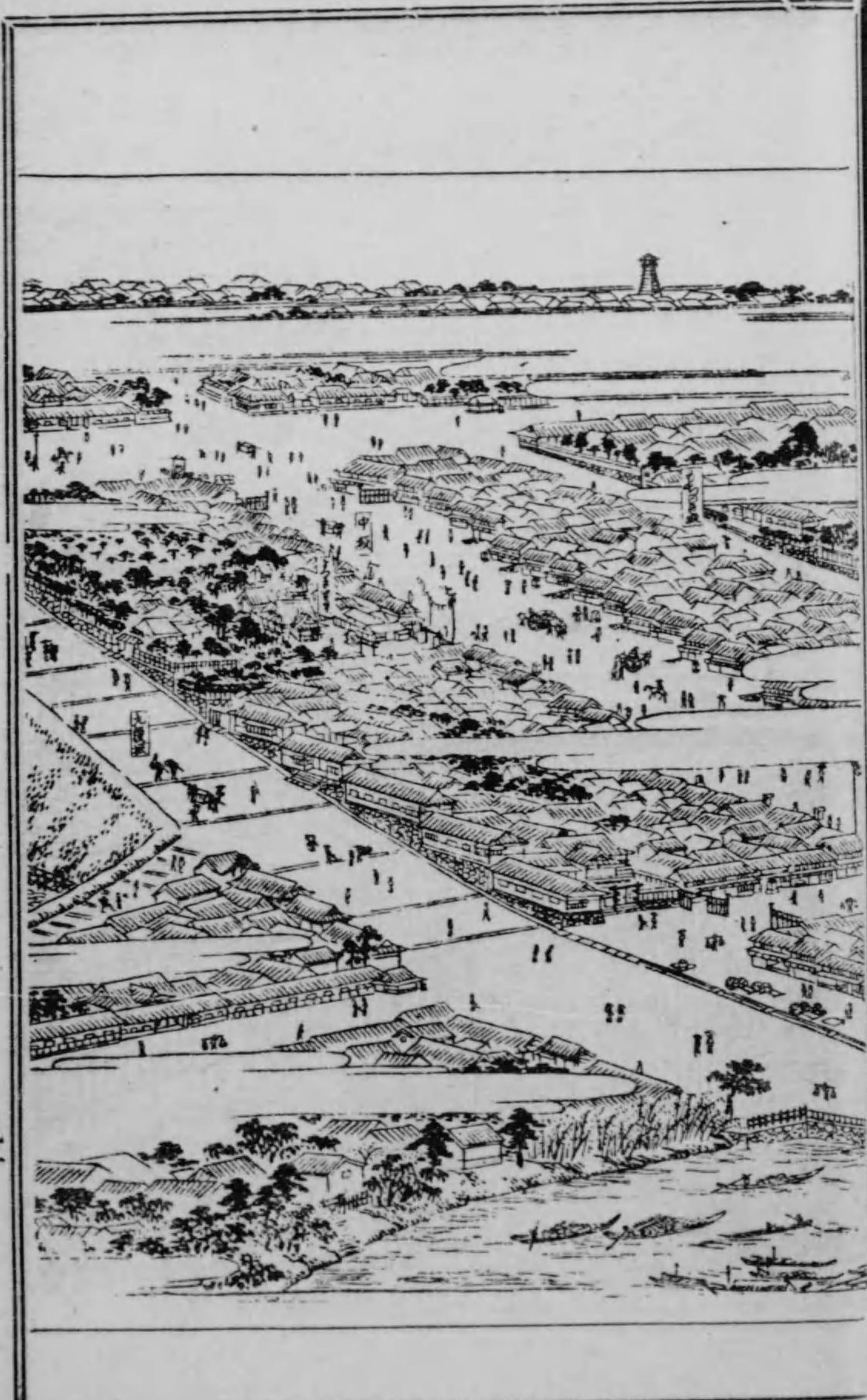
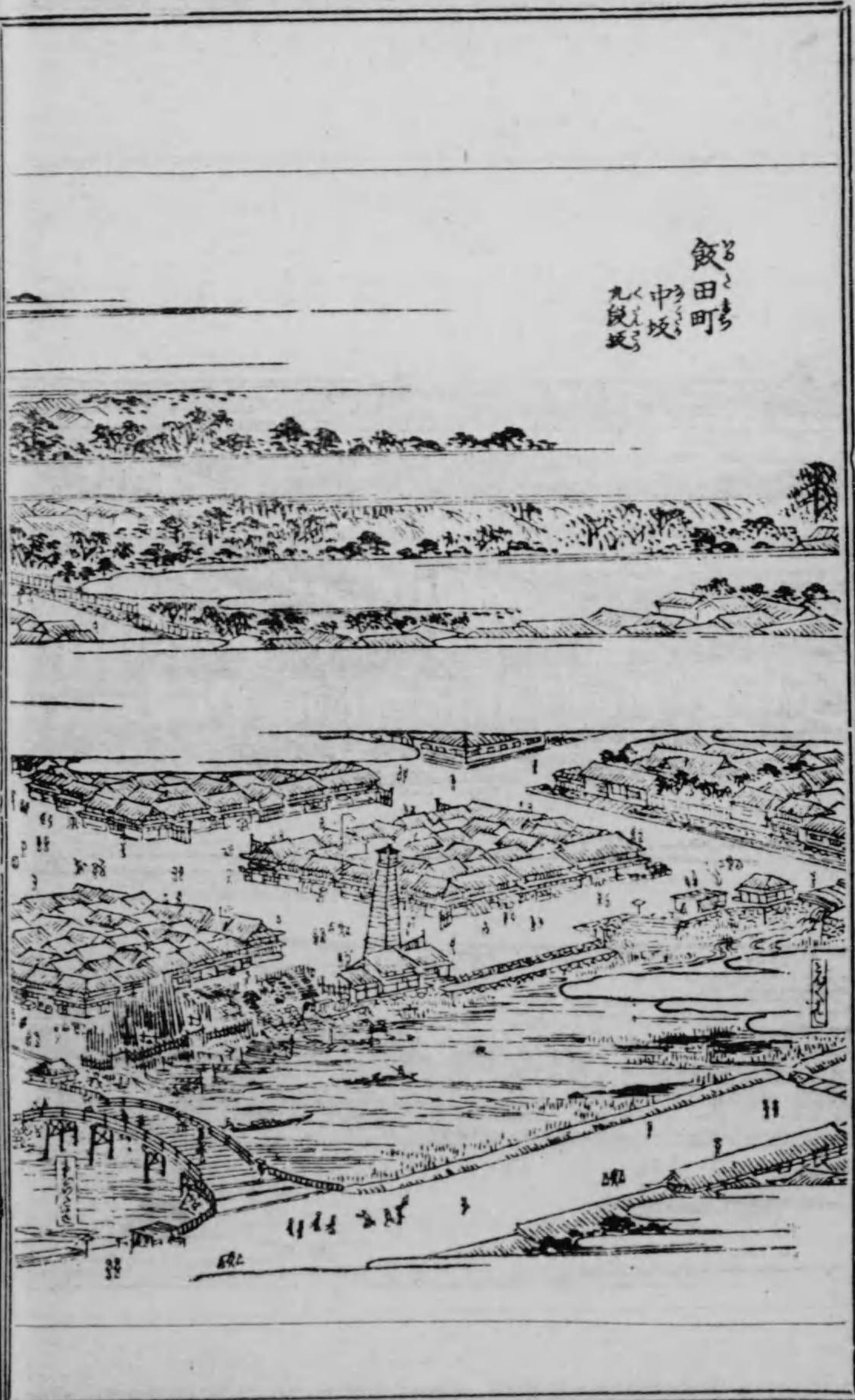


護持院原





飯田町  
中坂  
丸坂

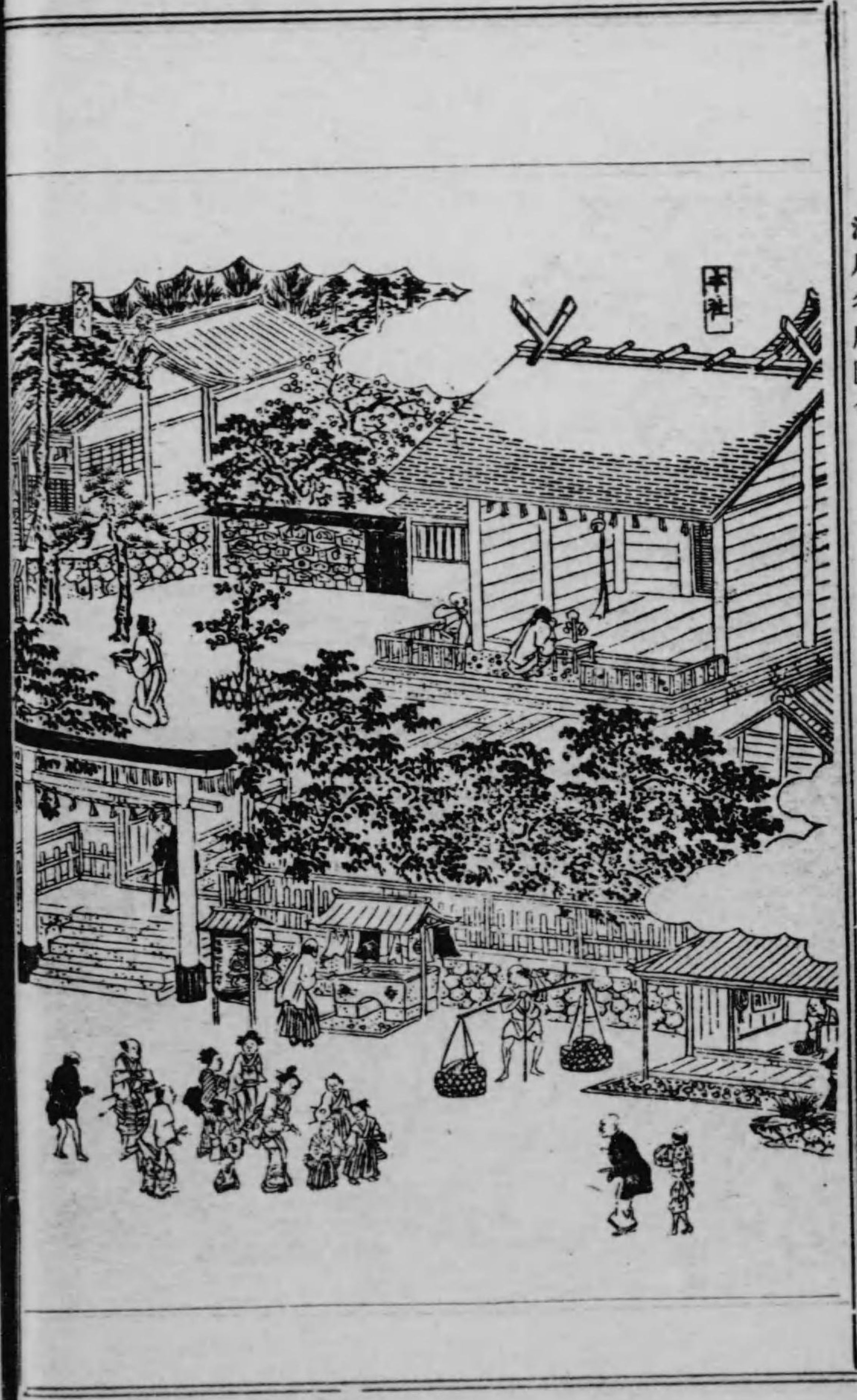




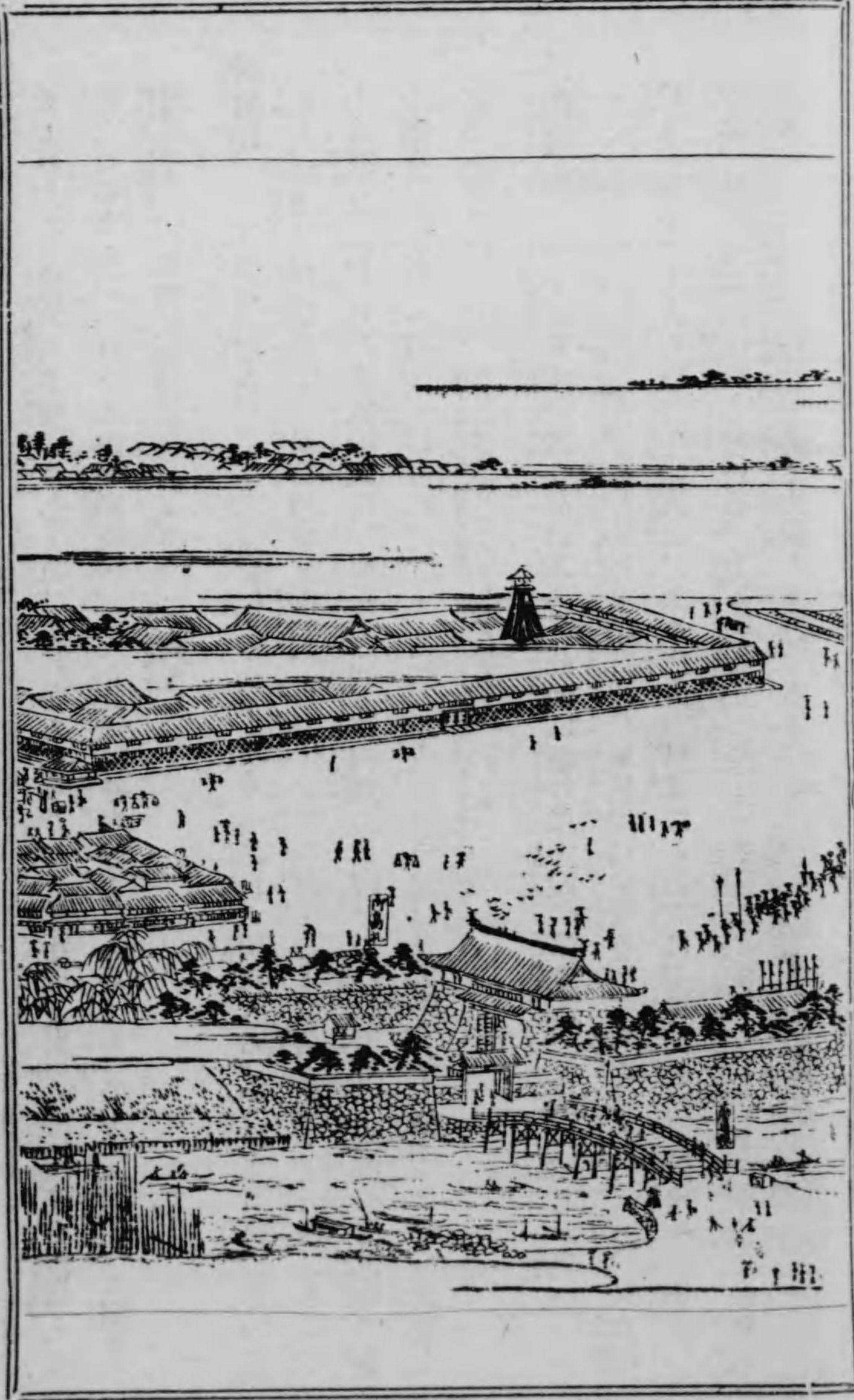
御茶の水  
水道橋  
神田上水懸樋













營ありしより魯の昌平郷に比して號けられしとなり。初は相生橋、あたらし橋、又芋洗橋とも號したるよしいへり。太田姫稻荷の祠は、此地淡路坂の上にある。舊名を一口稻荷と稱す。社記は拾遺名所圖會に詳なり。又東に柳森稻荷社あり。並に拾遺に之を載す。

神田川

江戸川の下流にして、湯島聖堂の下を東へ流れ大川に入る。明暦より萬治の頃に至り、仙臺侯台命を奉じ、湯島の臺を掘割、小石川の水を初てこよに落さると云傳ふるは少しく誤るに似たり。古老の説に、慶長年間、駿河臺の地開けし時に至り、水府公の藩邸の前の堀を、淺草川へ掘つゞけられ、其土を以て土堤を築き、内外の隔となし給ふと云ふ。此説しかるべきに似たり。按ずるに、昔は舟の通路もなかりしを、仙臺侯命をうけたまはちれし頃掘廣げ、今の如く舟の通路を開かれたりしなるべし。

丹後殿前

雉子町の北の通りをいふ。昔此地に堀丹後守殿の第宅ありし故に、しか唱へけるとぞ。寛永九年の江戸繪圖に因て考ふるに、今の其頃此邊の風呂屋に湯女を置いて客を招しにより、又六法組とて武夫にもあらぬ壯年の俠夫、大小立髪の異風なる出立にて、此風呂屋の邊を徘徊せしかば、是を丹前六法風と呼ける。丹前は丹後殿前の略語なり。今も此地に清水屋堀川杯云ふ湯屋あり。則ち昔の湯女風呂にして、其頃は清水風呂が風呂と稱へたりしとなり。後に歌舞妓芝居にて、狂言に取組、名も丹前とよびけるとなり。所謂六法とは、神祇組、鶴龜組、白柄組、鐘練組、唐犬組、猿籠組等なり。





於玉池の  
古事





藍染川

神田鍛冶町の通を横ざりて、東の方へ流ると溝なり。里諺に、一町ばかり上にて、

南北の水落合、此所にて會流する故に、逢初と云ふ儀にとると云ふ。又紺屋町の邊を流ると故

に藍染川と云ふともいへり。此講の端鍛冶町の裏の小路に、養源院といへる眞言の庵堂あり。本尊を頼煥律師と

於玉が池

舊名を櫻が池と云ふ。今神田松枝町人家の後園に、於玉稻荷と稱する小祠あり。里

諺に云ふ、於玉が靈を鎮ると。其傍に少く井の如き形残り。昔の池の余波なりといへり。

往古は大なる池なりしが、江戸の繁昌にしたり。里老傳云ふ、昔此地は奥州への通路にて、櫻樹あまた侍りけ

る所によりし池なる故に、櫻が池とよべりとぞ。其傍の櫻樹のもとに玉といへる女出居て、

往來の人に茶をすむ。容色大かたならざりければ、心とどめぬ旅人さへ、掛想せぬはなか

りきとなん。中頃人がらも品形もおなじさまなる男二人迄、彼女に心を通はせける。されば

切なる方にと思へどもいづれおとりまさりもあらざりければ、我身のうへを思ひあつかひ

て、女は終にこの池に身を投てむなしくなりぬ。さながら津の國の求塚の古事に似て、いと

ちあはれなればとて、里民打寄て、亡骸を池の邊に埋み、しるしにとて柳を植て、記念の柳

とは號けると云々。其舊址、明曆の回祿にじびぬるとぞ。今は名のみを存せり。この故にも玉が池と呼ばはせりとなん

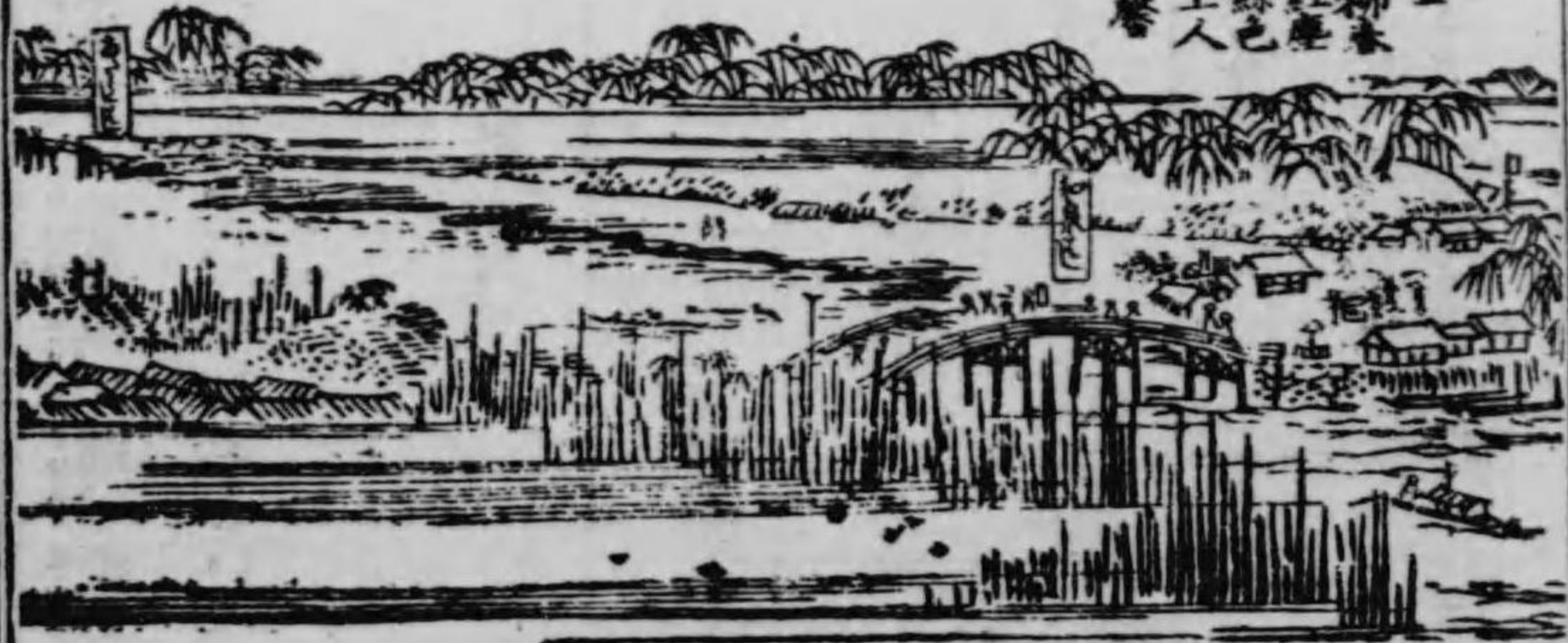




神原堤

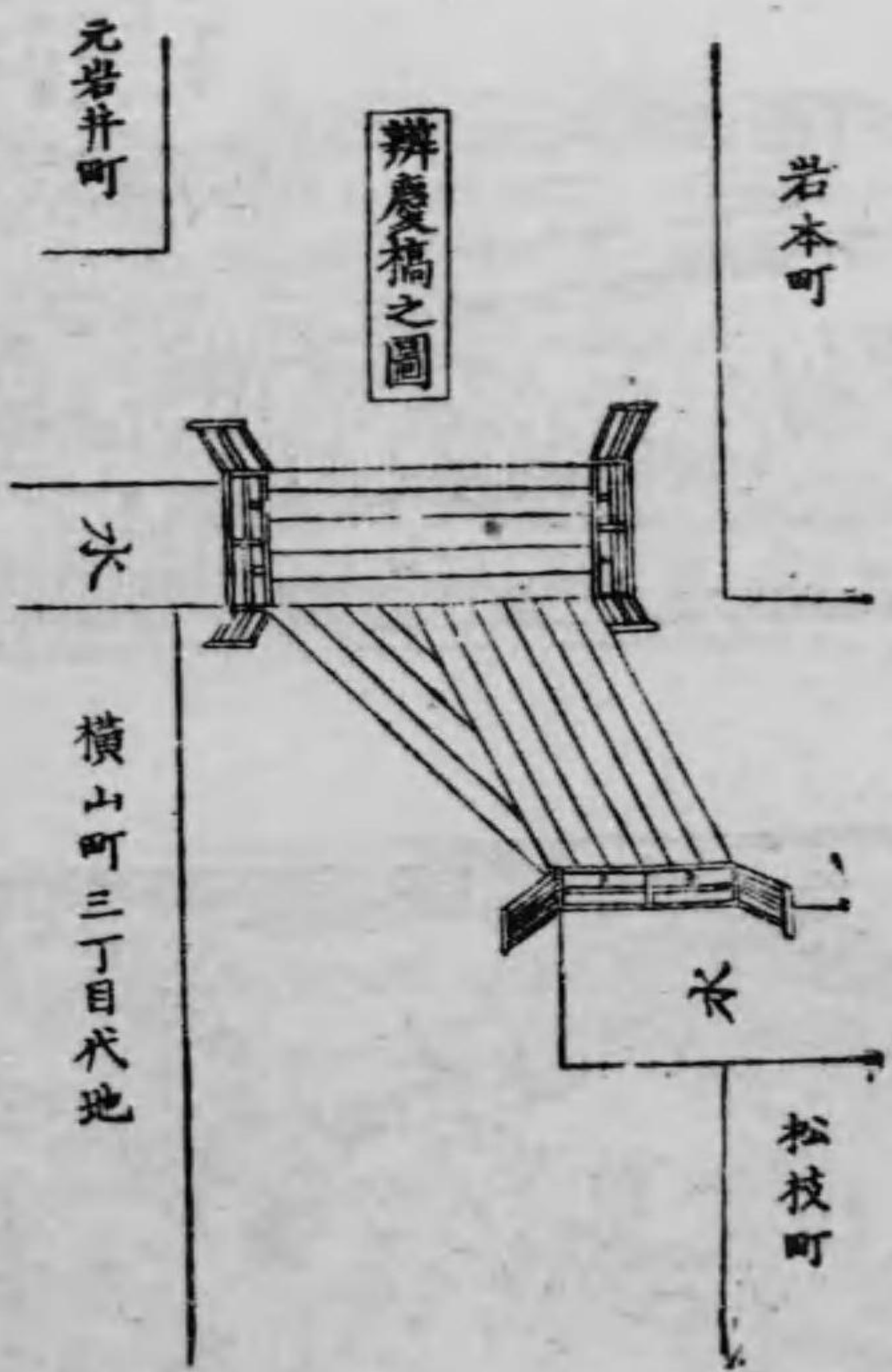


楊柳堤登望  
楊柳堤遠揚柳  
十枝交影拂紅塵  
請看最上金絲色  
總映青雲馬上人  
高維馨





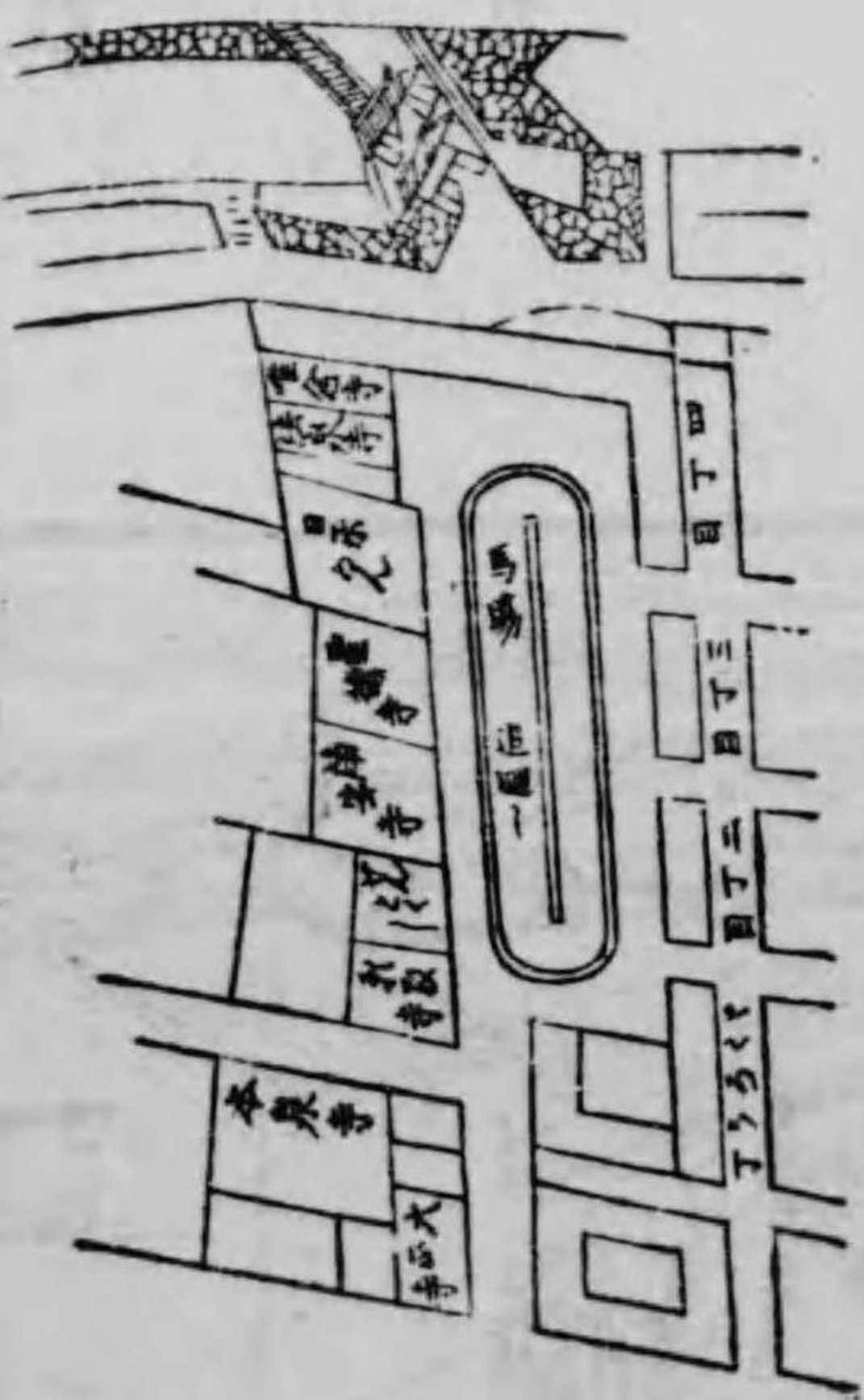
**辨慶橋** 同所東の方、和泉橋の通、藍染川の下流に架す。その始御大工棟梁辨慶小左衛門といへる人の工夫によりて、懸初しといへり。此地の形に應じ衢を横切て、筋替にかくる尤も奇なり。



**柳原封疆**

筋違橋より淺草橋へ續く。其間長凡そ十町ばかりあり。享保年間、此所の堤に悉く柳を栽させらる。國には柳堤とあり。堤の外は神田川なり。又此堤の下に、柳森稻荷と稱する叢祠あり。故に此地を稻荷河岸と呼べり。昔は神田川の隔もなく、此川の南北ともなり。馬喰町三丁目の西北の裏通にあり。江戸馬場の中最も古し。慶長五年關が原御陣の時、御馬揃ありし所なりと云傳ふ。御馬工郎高木源兵衛、是を預り奉る。此地を馬喰町といふなり。昔は富田半七と高木源兵衛と兩人なりしとぞ。寛永二十年開板のあづまめりといへる草紙に、「末は馬喰町とかや、待あまたうちつれて、こゝにくり毛の馬もあり、あるひは月毛鹿毛かすけ皆せめ事とうちみえて云々」其頃は追廻しといひて、左の如き形なりしと云ふ。寛永 明曆、延寶等の江戸繪圖にしかしるせり。

馬場 馬喰町三丁目の西北の裏通にあり。江戸馬場の中最も古し。慶長五年關が原御陣の時、御馬揃ありし所なりと云傳ふ。御馬工郎高木源兵衛、是を預り奉る。此地を馬喰町といふなり。昔は富田半七と高木源兵衛と兩人なりしとぞ。寛永二十年開板のあづまめりといへる草紙に、「末は馬喰町とかや、待あまたうちつれて、こゝにくり毛の馬もあり、あるひは月毛鹿毛かすけ皆せめ事とうちみえて云々」其頃は追廻しといひて、左の如き形なりしと云ふ。寛永 明曆、延寶等の江戸繪圖にしかしるせり。





馬家町馬場

鶴岡放生會職人寺合

博労忌

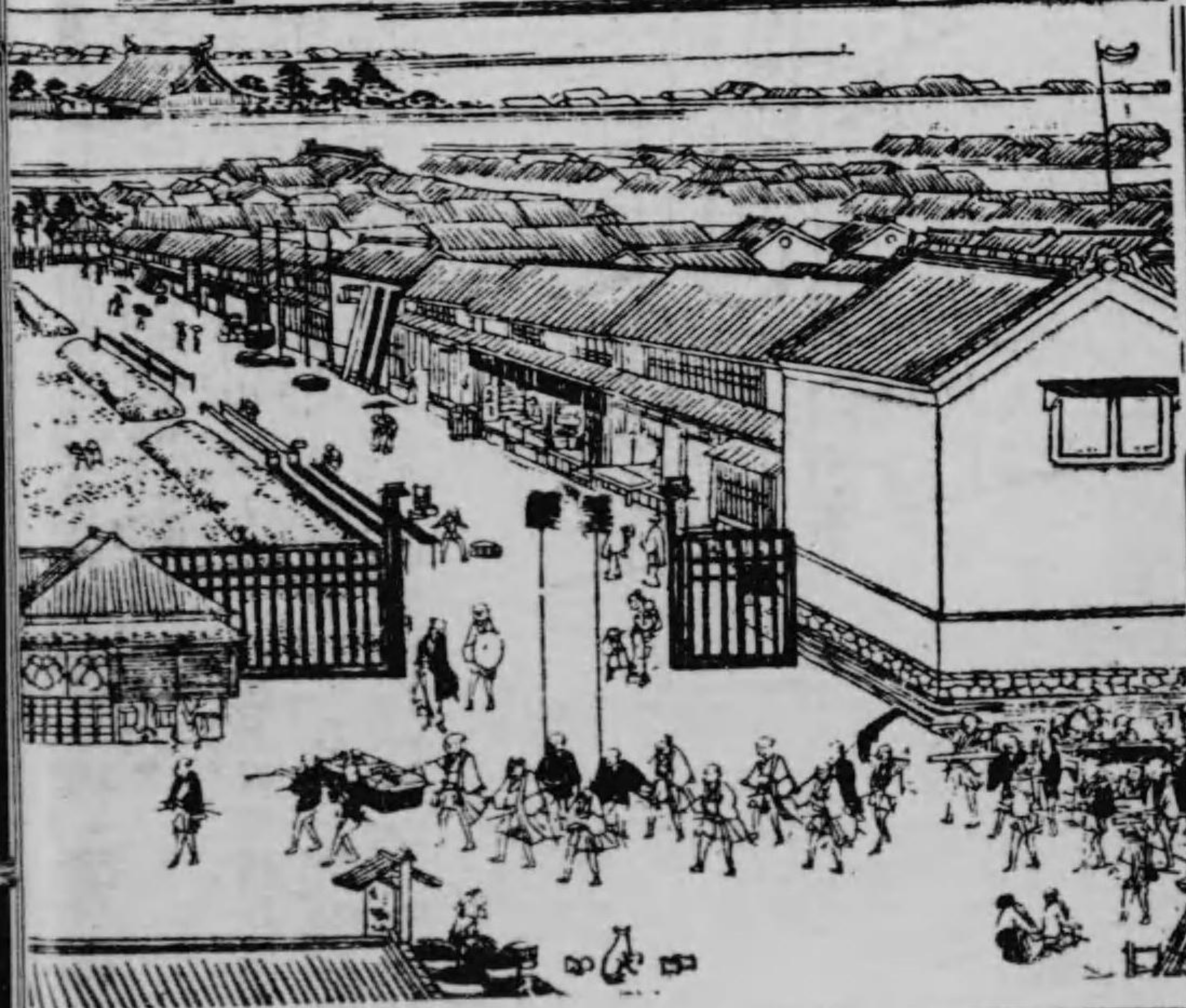
多入り  
世の

人ふもあれの

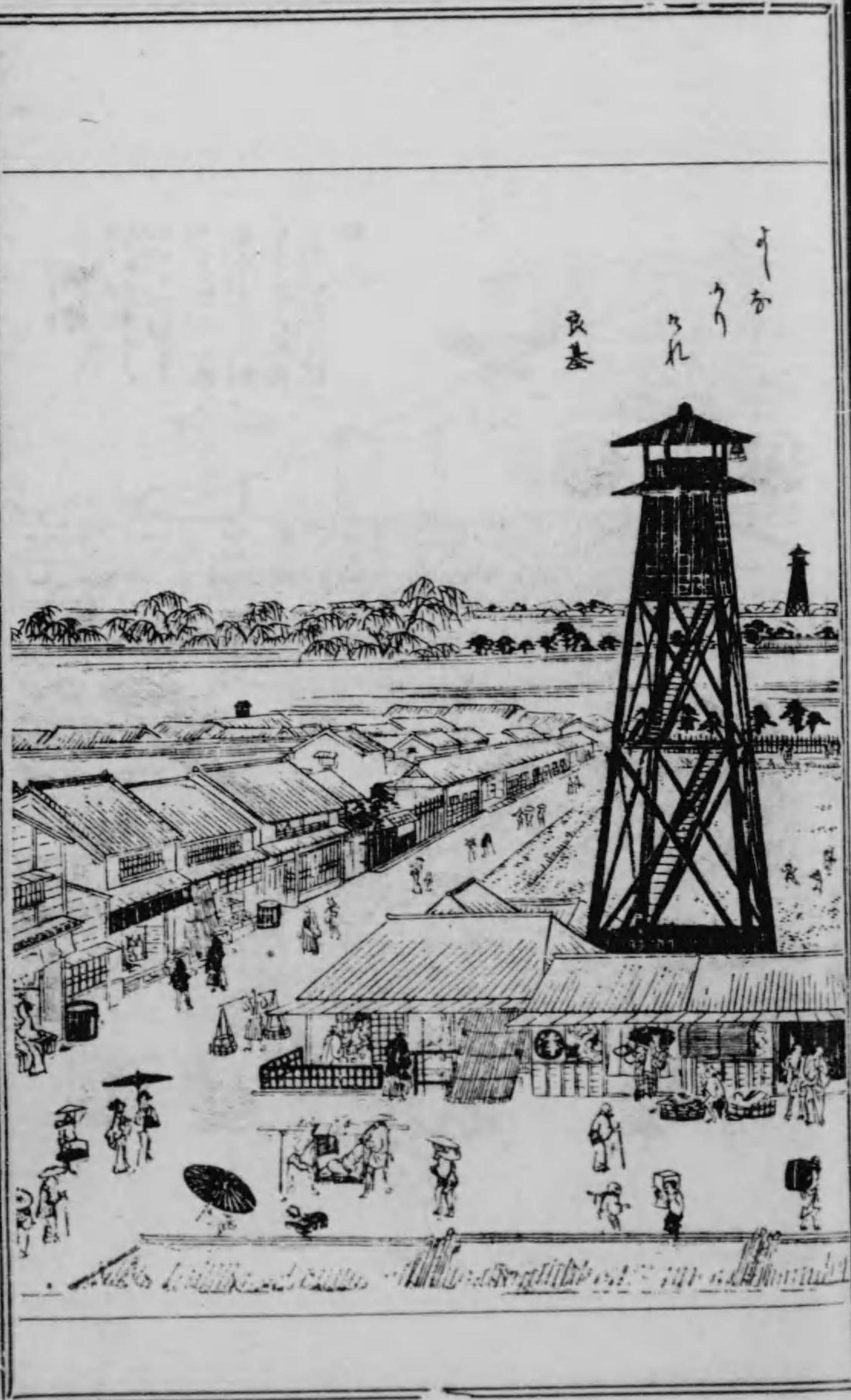
あゝあゝ

つけすまひ

江戶神宮



すか  
うり  
これ  
良基



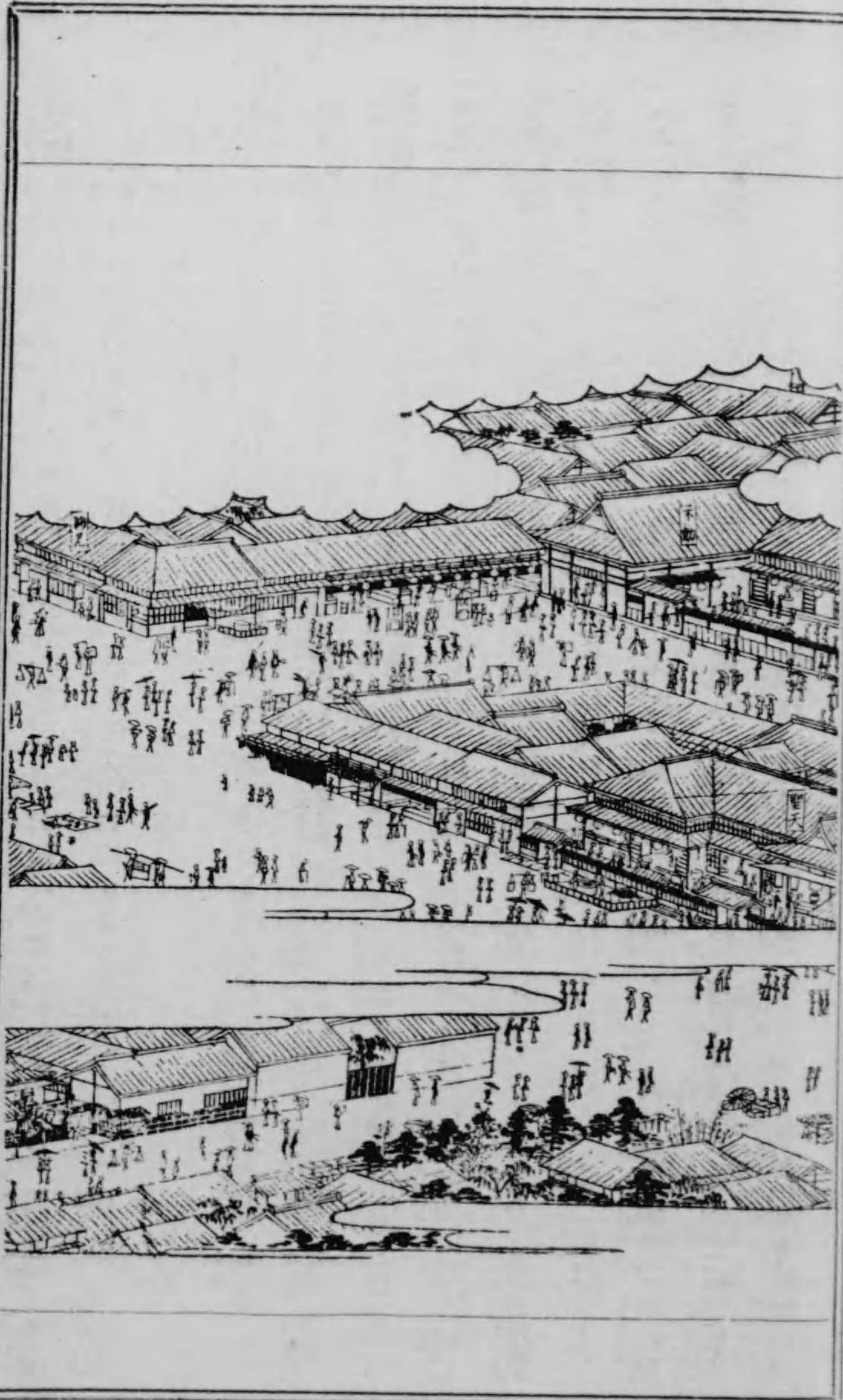




錦繪  
 江戸の各處にて  
 也作の錦絵  
 中々極彩色  
 更ら美のり  
 ひやありて  
 小賣するも







茶研堀  
不動  
金屋  
歡喜





浅草橋

神田川の下流、浅草御門の入口に架す。この所にも御高札を建らる。馬喰町より浅草への出口にして、千住への官道なり。此東の大川口にかよるを柳橋と號く。柳原堤の末にある故に名とするとぞ。この所諸方への貨船あり。

兩國橋

浅草川の末、吉川町と本所元町の間架す。長九十六間。橋の前後並に橋上に番屋を居て是を守らしむ。萬治二年己亥官府より始て是を造り給ふ。三橋記或は云ふ、寛文元年辛丑新に兩國橋を架しめらる。御普請奉行、芝山坪内兩氏大橋一ヶ所をかけらるるとあるも此橋の事なり。又むかしあぶみといへる草紙にも、此其昔此川を國界とせしにより、橋を大橋とし居してあり。事跡合考に云ふ、此橋の形は扇を開きたるに似たと云々。其昔此川を國界とせしにより、

兩國橋の號ありといへども、今の如く利根川を以て界と定め給ふより、後は本所の地も同じく武藏國に屬すといへども、橋の號は唱へ來るに任せて、其儘改られずとなり。或人云く、貞三月、利根川の西を割て、武藏國に屬せしめらると云々。この地の納涼は、五月廿八日に始り八月廿八日に終る。常に賑はしといへども、就中夏月の間は、尤盛なり。陸には觀場所せき計にして、其招牌の幟は、風に飄りて扁翻たり。兩岸の飛樓高閣は大江に臨み、茶亭の床几は水邊に立連ね、燈の光は玲瓏として流に映す。樓船扁舟所せく、もやひつれ一時に水面を覆ひかくして、あたかも陸地に異ならず。絃歌鼓吹は耳に滿て響しく、實に大江戸の盛事なり。

此人數船なればこそすゞみかな

其角

千人が手を欄檻やはしすゞみ

同

このあたり目にみゆるものみなすゞし

芭蕉

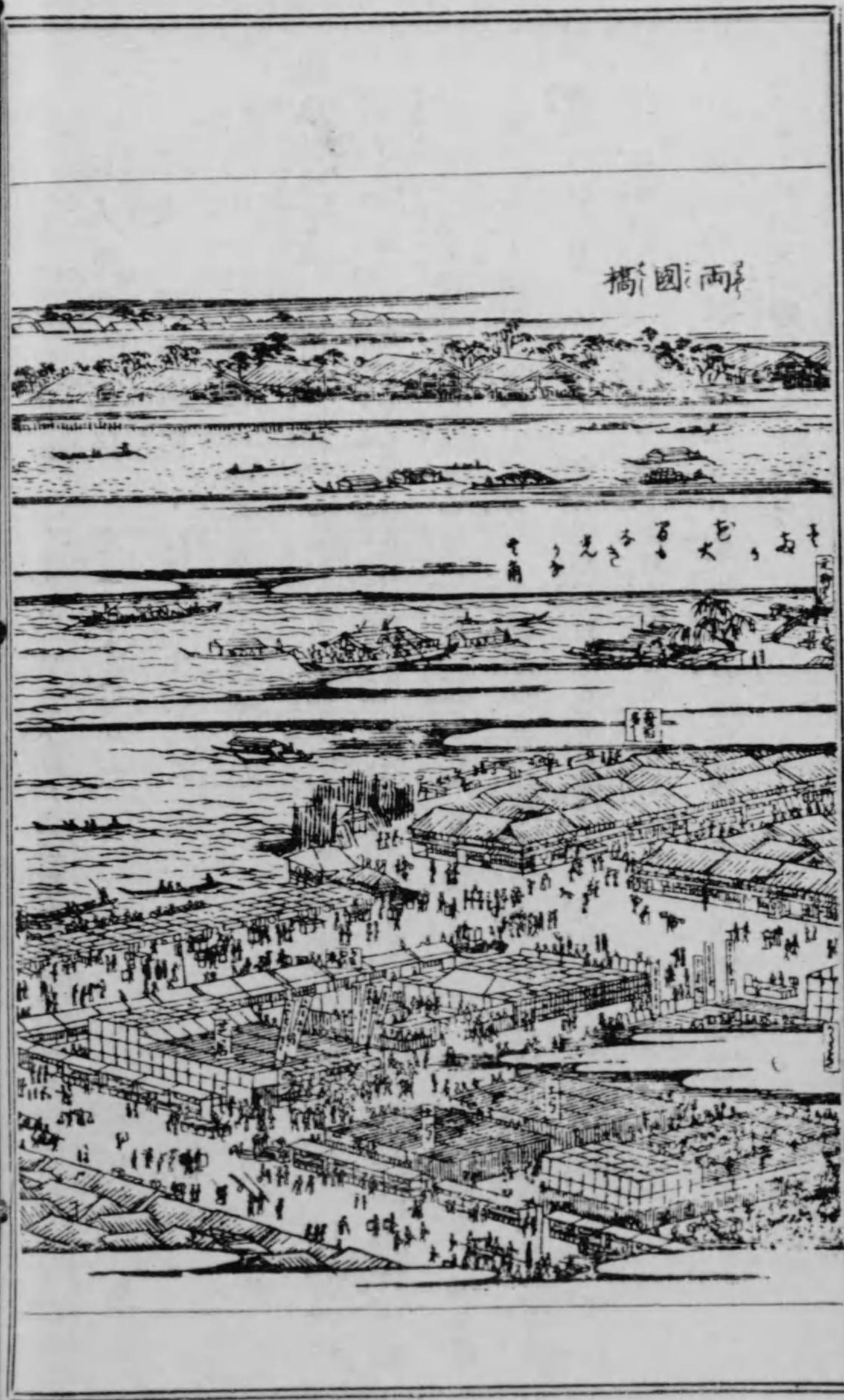
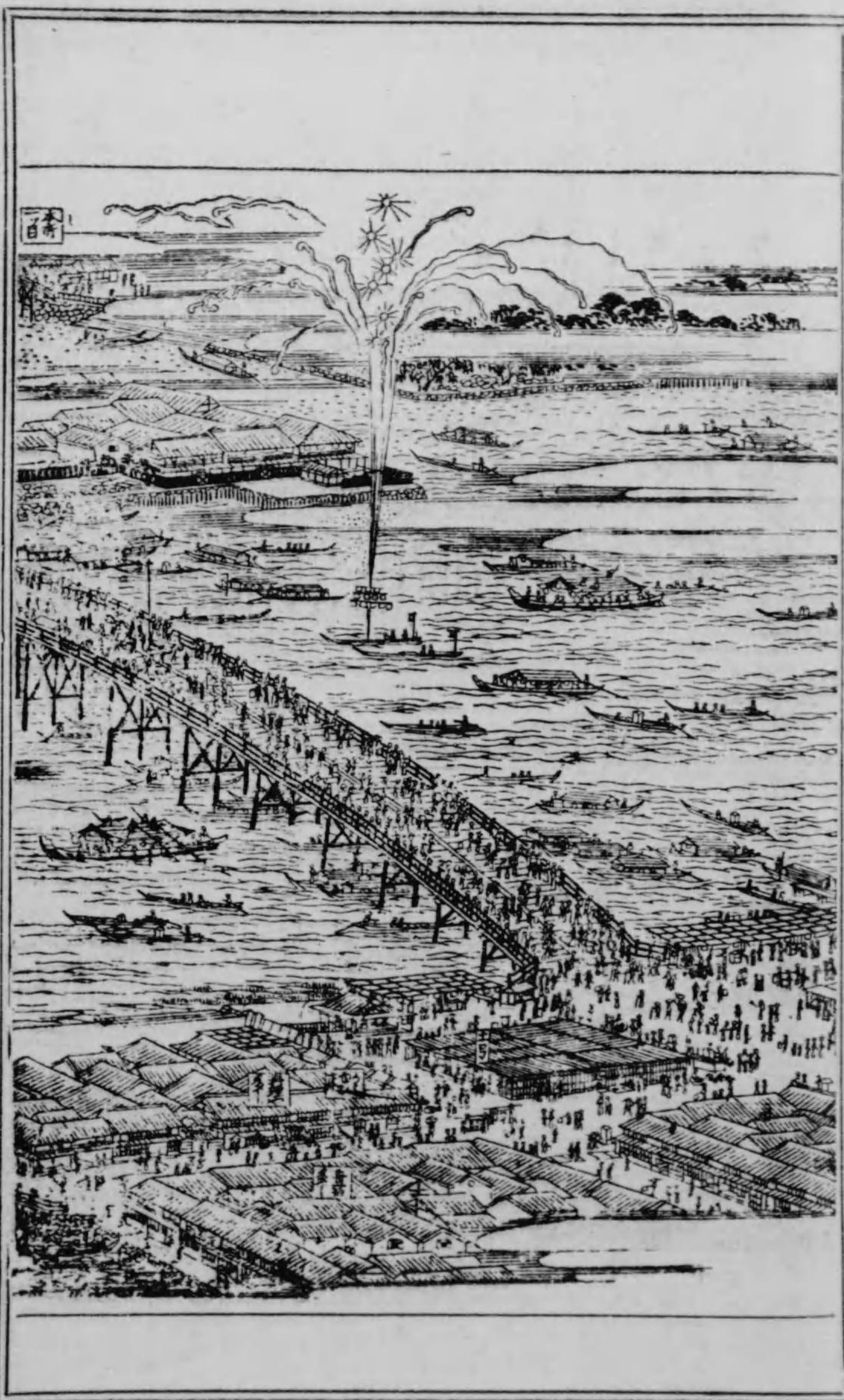
清水如水宅地

横山町に住けるといへり。如水は藤根堂と號す。狂歌に名あり。常に酒をたしめ

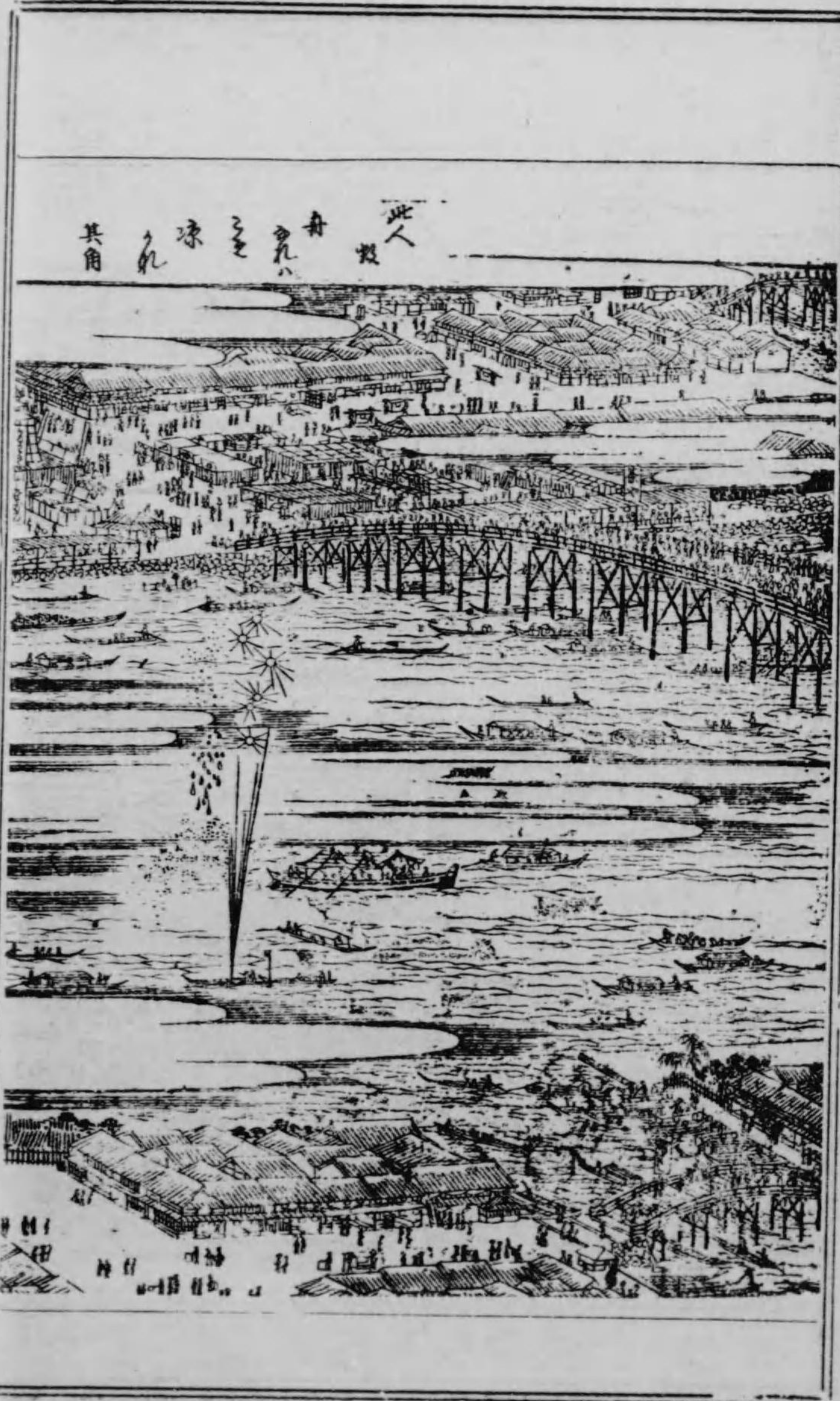
はしはくとして、癡に言語を發する事なく、酒を飲する時は、のび／＼として勢ひよく、はひあるきければとて人名付て藤根堂と呼びけるとなり。按ずるに雄長老下巻、又近くは九州の甚久法師杯、各狂歌に名ありて家集もあれど、此如水は名さへしる人稀なり。如水一時、大和國法隆寺に藏する所の賢聖の瓢といへる器物を見て後、瓢に彫物をする事を得たり。しかも鈍刀を用ひて、其巧尤絶妙なり。依て其需多かりければ、此匏瓜の爲に身を押へられたりとの意にて、自ら迷淵踏鯨候とぞ名乗ける。住家より東に藥研堀と云ふ所あり。其邊知人の許に行て、樓上より遠近を見やりて、

見おろせば氣の藥なり藥研堀月は白湯にてかけは水にて  
又ある時漁父の辭の意をよめる。









世はすめり我ひとりのみ濁酒酔て寝るにてさふらふの水  
 享保十三年戊申正月三日朝起て、

公事喧嘩地震雷火事晦日飢饉煩なき國へのく

かくよみて同じ五日の暮方、剃頭湯あみし、太神宮を拜し奉りしまよに、終をとれり。行年七

今も浅草金龍寺に墓碑あり。石を以て瓢の形に造立す。如幻庵東湖老和尚、此如水が臨終の記をかゝられたりといへり。按ずるに墓碑に一陽如睡とあり。水睡同音なれば、其臨終の相を表して、投後文字を如睡と改めしならん歟。

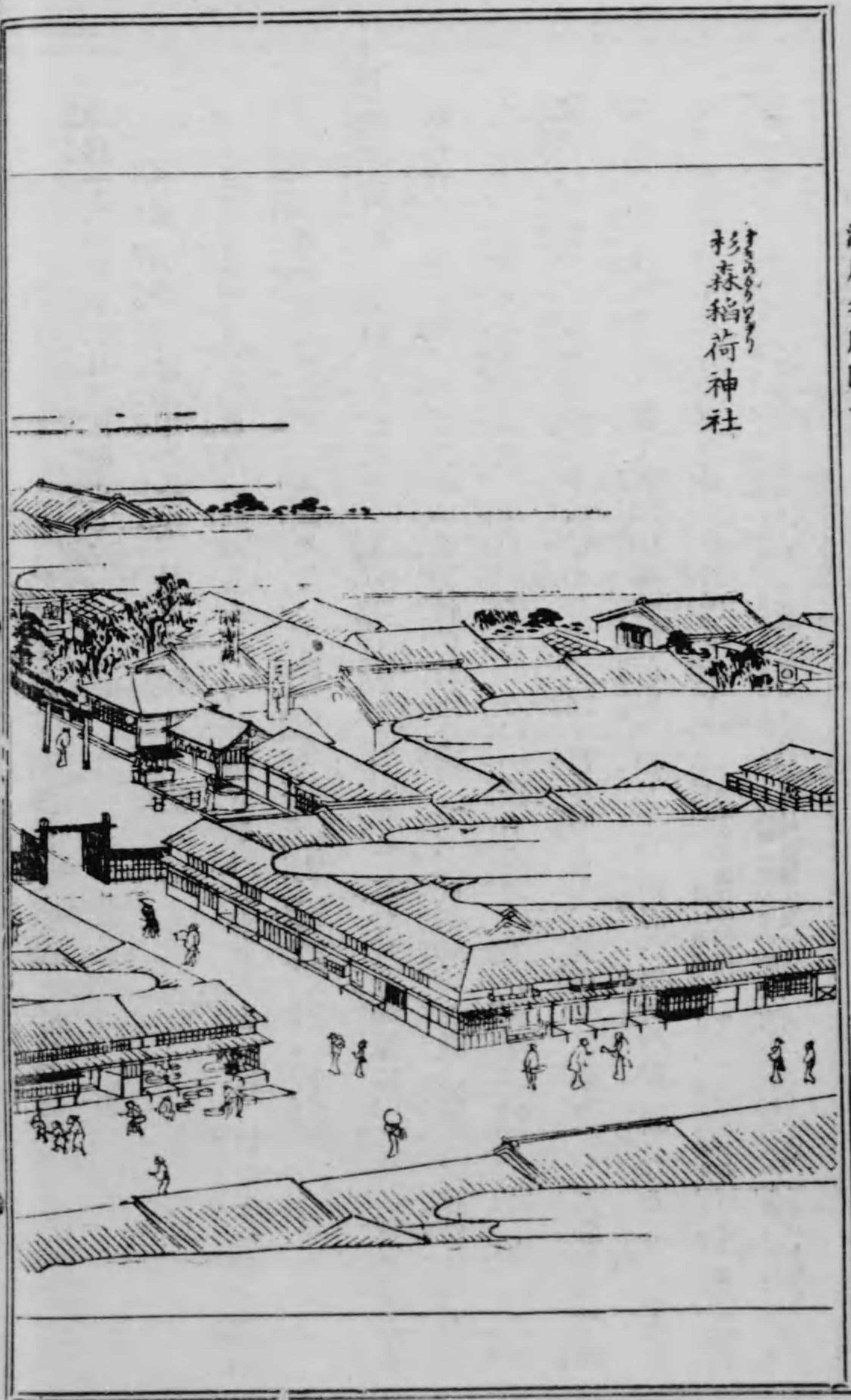
杉森稻荷社 新材木町にあり。俗に當社ある故に、此社記に云ふ。此神像は、相馬の將門威を東

國に逞しうせし頃、藤原秀郷朝敵誅伐の計策を廻らし、此御神の加護に依て、遂に將門を亡  
 したり。後靈夢を感じ此地に至り、矯々たる杉の森ある地に崇め祀る。當社は、寛正の頃東  
 國大に旱魃す。太田道灌江戸城にありて、深く是を患とし、此御神に禱るに、其驗ありて雨  
 降り百穀大に登る。依て其頃山城國稻荷山を模して、伍社の御神を勸請なし奉るとな  
 り。毎年四月十六日祭奠、神主小針氏奉祀す。當社は、町屋の後面にありて、參詣の道さへなかりしに、元祿

開き給ふとなり。菊岡法涼云ふ、此所は昔杉の木立いと深かりしとなり。又此地の或古老の話に、寛文の頃此地は小針孫右衛門といへる商戸の地にして、彼宅地にありし稻荷の祠なりしが、其後延寶七年五月二十九日、此邊火災に依て、焦土となりし頃、此祠のみ現然と残り



杉森稻荷神社





ければ、諸人皆これを奇とす。吉川氏某深く信仰して、新に經子と姫太神とを相殿に祀ると云ふ。又或人云ふ、長谷川町、舊名を禰宜町と云ふ昔當社の總々たりし時、禰宜の住みし所故に、しか號くると。されども此説信じがたし。

歌舞妓芝居

堀町 葺屋町にあり。

寛永元年甲子の春、中村勘三郎、堀町狂言座元の始祖な

繁關及び管中に於ても、猿若の狂言をなし、又は官船安宅丸大江戸の川口へ入津の時、綱引の音頭調を調はしめられし折から、備袋賞として、賜はる所の金の鷹、ならびに猿若狂言の衣袴及び御簾の扱巻等、今猶其家に傳へて重寶とす。又上京せし時、勘三郎の性新發知に、明石といへる名を賜はりし事、官府の免許を蒙り、江戸中橋において、始めて太鼓櫓を揚げ、猿若狂言杯は、皆中村座の規模たり。

盡の芝居を興行す。是大江戸常芝居の始元なり。江戸鹿子といへる草紙に、寛永より前は芝居町にありと記せしは、柴井町の事

又江戸名所ばなしに、芝居町より中橋へうつり、又堀町へ引移したる事を擧げたり。事跡合考に、寛永元年日本橋の西河岸町に、芝居を取建るとあり。可考。寛永十八年の印行の、そとる物語といへる冊子に、中橋にて米島丹後守歌舞妓ありと高札を建てければ、貴賤群集すたと。

同九年壬申中橋より禰宜町へ引き、遂に慶安四年辛卯今の地に移る。禰宜町といふは、今の長谷

を人形町と字するは、人形屋多く住む故にしか唱へたり。寛永二十年印本吾嬬めくりといへるものに、禰宜町に左近といへる歌舞妓芝居、又角力其外薩摩太夫、虎屋が操、土佐が能などありける由にて、賑しき様を擧たり。又寛永十一年甲

戌村山又三郎といふ者、此又三郎といへるは、名護屋山三郎の弟子、村山又左、泉州堺より此地に下り、公許を得て、常芝居を興行し、能の狂言をやつし役者をまじへ、舞子六人に勤しむ。市村羽左衛門座是なり。

萬治三年庚子森田太郎兵衛といへる者、是も官府の免許により、木挽町五丁目汐入の地へ芝

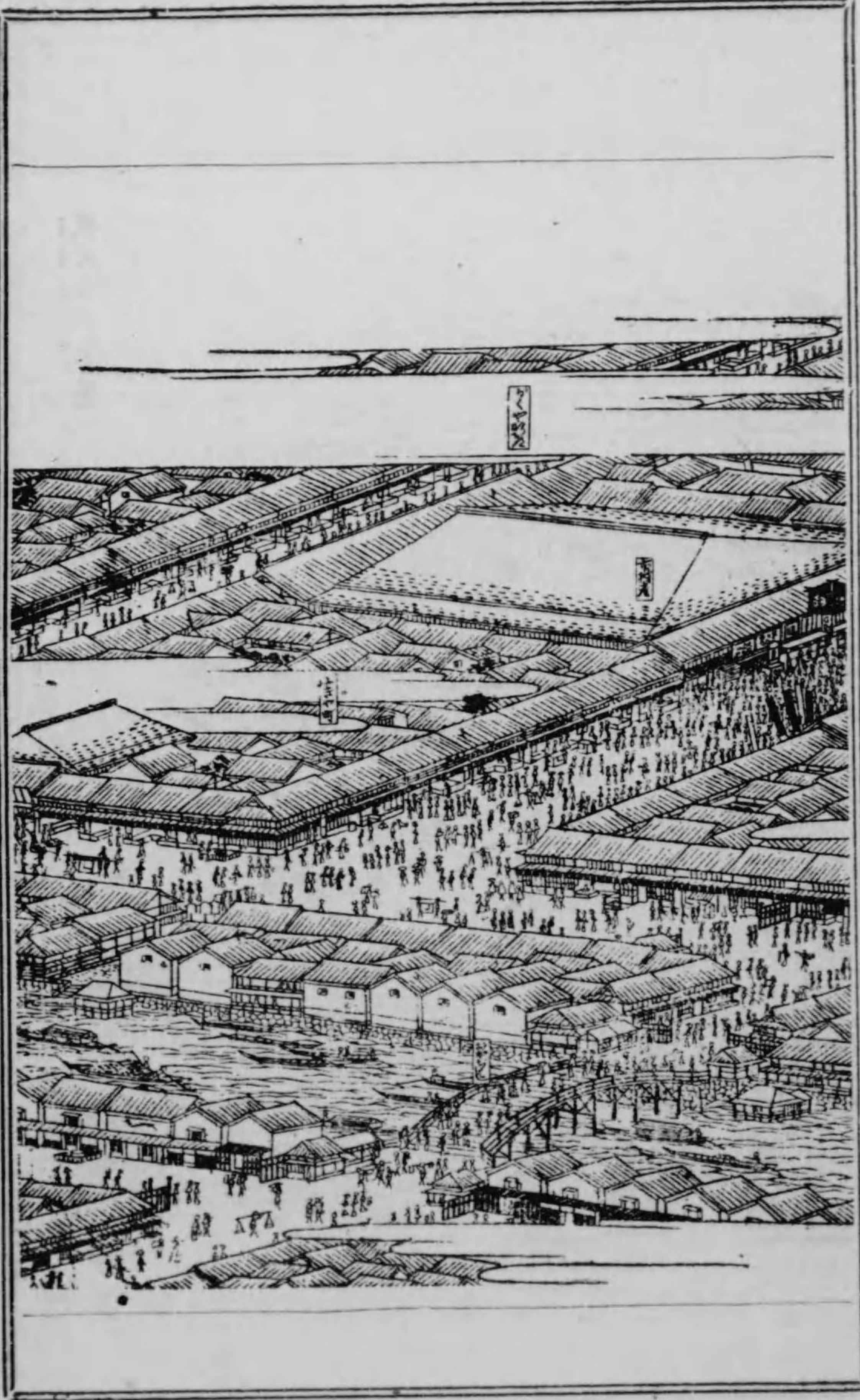
居を取建、坂東又九郎といへる者の二男又七といへるを養子とし、名を森田勘彌と改む。構木

町狂言座元なり。猶同卷、其餘堀町、葺屋町の間に、操座木偶芝居ありて、四時に賑へり。元禄開板

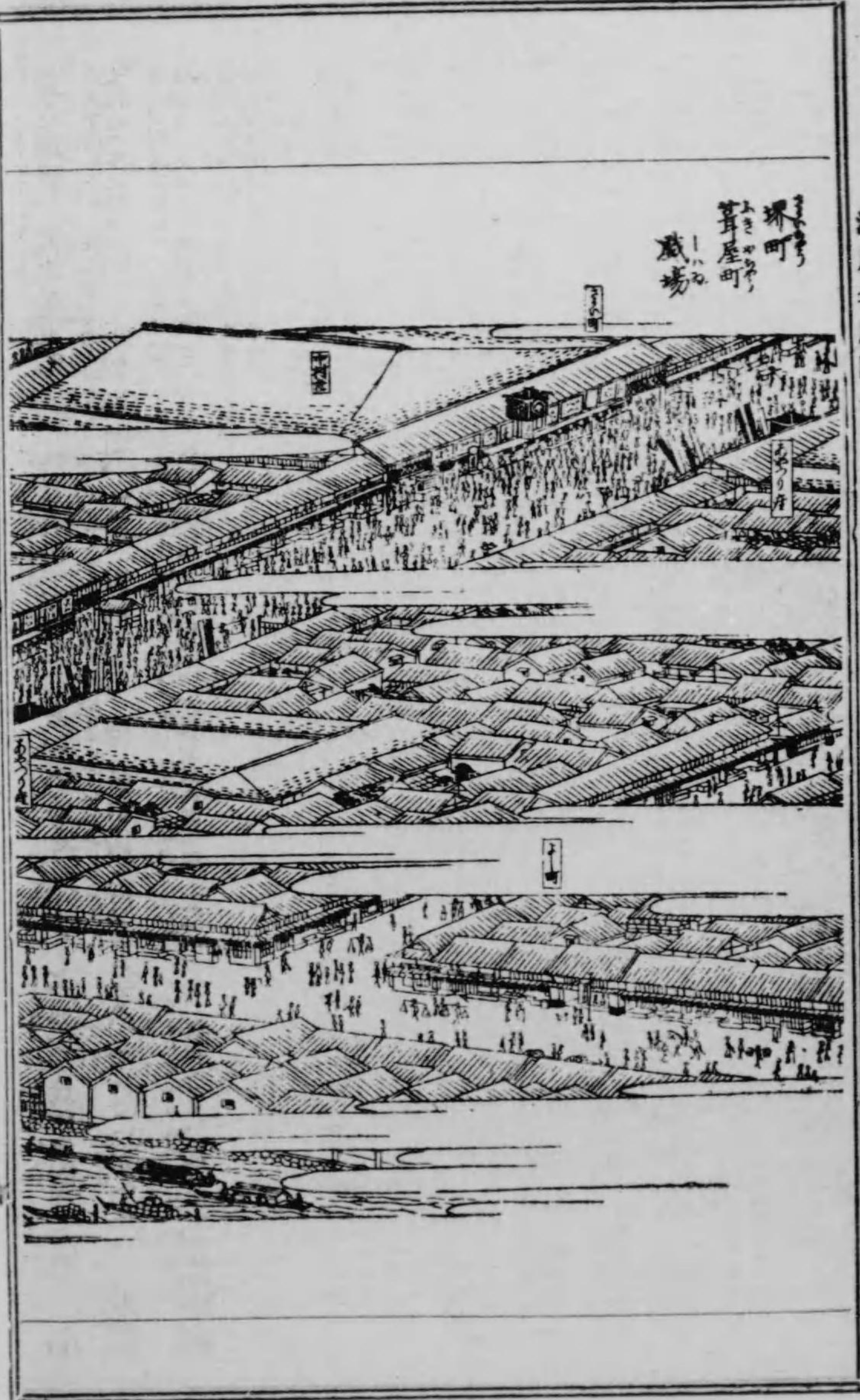
子に、堀町葺屋町の二町は、古へより操見せ物、又は狂言盡あるひは放下の品玉、隨切の曲を業とする者ども寄りあつまり、終日觀樂をなす地なりとあり。又江戸名所ばなしに、江戸大薩摩、土佐の太夫、和泉太夫の禰瑠璃、天滿八太夫、江戸孫四郎、江戸半太夫が説經、鶴

屋源太郎が南京あやつりなどさまじく、のみせものありしことをしるせり。





本町  
大工町  
蔵場







猿若狂言之古圖





吉原町舊地

和泉町、高砂町、住吉町、難波町等、其舊地なり。

住吉町難波町等の河岸を、龜河岸と字するは、龜屋多き故の俗稱なり。此所の小溝は則ち昔の曲輪の外堀なりと云ふ。

慶長十七年庄司甚右衛門といへる者、街を一所に定め給はり度き旨、官府に訴へ奉りし故に、初て此地を賜はり花街とす。往時慶長の頃迄は、江戸に定りたる傾城町もなく、二軒三軒つこよかしこに散在せしなり。其中軒を並べたりしは、麴町八丁目にて十

四五軒ありて、何れも京六條より遷る。又鎌倉河岸にも十四五軒、大橋柳町にも廿軒ありしと云ふ。此大橋と云ふは、今のときははし也。此柳町へは駿府彌勒町より移り、其外伏見夷町、奈良木辻等よりも、追々大江戸に移りぬ。慶長十一年の頃、柳町の地は召上られ、元誓願寺前

へ引移たりしが、傾城屋ども打寄相談の上、場所取立度由願けれども、御免なき所、庄司甚右衛門初て同十七年の頃願ひ、元和三年の頃被仰付、元和三年霜月地形普請出来して商賣せ

り。江戸町一丁目は御一統の後、初て開基せし故かく號け、同二丁目は鎌倉河岸より引け、京町一丁目は麴町より引く。同二丁目は追々に來りし上方の傾城屋を置り。一兩年にして普

請悉く成就せしかば新町と名付たり。角町は京橋角町よりうつり、寛永三年に至り、五町

全く家居落成して、こよに移れり、然るに明暦二年淺草の後、今の地へ遷されん事を、申し

渡さると雖も、明年引移り度由の所、翌年五月十八日の大火に焼亡す。依て同年六月悉く元吉原の地を引拂ふ。同年八月今の地へ移る。普請の間今戸、鳥越、山谷の間に借宅いた

し、渡世する事を許さる。花街今に舊地に在なば、戲場相接し、滋繁昌をば極むべけれど、祝融の祟彌しけかるべし。しかるに彼地へ移されし事、おほやけの御惠いと有難き事にこ

そ。第六卷、新吉原町

據するに、歌舞妓は其始め遊女より出たる名にして、歌ひ舞ふの妓女なりといふ畧語なり。昔は専ら高貴の人に愛せられし故に、戯れに長門守丹後守など呼びならはしけるより、いつしか遊女及び歌舞妓役者に、太夫の稱發りしとなり。故に今狂言座元を太夫元と唱へ、若女形の藝に長じたるを太夫と呼ぶは、其餘風なるべし。されど今大江戸には、遊女に太夫の稱を失へり。寛永十八年の印本をぞる物語といへるものに、この吉原町の歌舞妓女を愛する事をあげたり。中にも佐渡島正吉、村山左近、國本織部、北野小太夫、出来島長門守、杉山主殿、米島丹後守などといひて、名を得し遊女あり。是等は一座のかしらにて、其頃歌舞妓にて和尙と稱せしとぞ又日を重ね此町繁昌せる故、町割をなし、本町及び京町、江戸町、伏見町、堺町、大坂町、墨町、新町などと名付け、家居美々しく軒をならべ、草の假家をあらためて、板壁に作りかへ、又本町を中にこめて其めぐりに揚屋町を置き、幾筋ともなく橋町をひらき、能歌舞妓の舞臺をしつらひ置き日毎に興行しける由記せり。又江戸名所記等にも、遊女等芝居をかまへ、歌舞妓をなせしに皆人めて慕ひて世の妨ともなりければ、是を禁ぜられ其後は若衆歌舞妓と云ふ事を興行ありしかば、美しき少年に歌謡はせ舞はせけるとなり。

賀茂眞淵翁閑居地

濱町にあり。

寶曆十四年此地へうつり住するよし家集に見えたり。

眞淵翁一に岡部衛士、又は縣居とも



大門通

音地吉原町  
あり城の天  
門の通り多  
く  
名づく今ハ銅  
物屋其明  
多ク住リ

持  
ひ  
の  
ま  
の  
角





稱せり。賀茂縣主成助の末葉にして、世々洛北賀茂大神の宮司たり。同師朝の時文永十一年甲戌、遠州濱松庄岡部郷なる賀茂の新宮を、齋まつるべき詔を蒙り、又彼地を賜りて其宮の神主となり、即岡部郷に住せり。翁は其後裔定臣といへるが子にて、元祿十一年丁丑彼地に生る。壯より深く國朝の學に心をよせ、享保十八年癸丑花洛に至り、荷田宿禰春滿の教を受け、後大に國學を以て世に鳴る。荷田宿禰は本姓なり。世に羽倉齋宮と稱す。此人は洛南稻荷社の祠官なり。寛延三年庚午大江戸に來り、田安の殿の召に應じ、古への書の道の博士として、特に愛させ給ひ、其頃御衣を賜はりしかば、其かしまりに和歌を奉る。

あふひてふあやの御衣を氏人のかづかむものと神やしりけん  
 其後寶曆十年庚辰仕をかへし奉りて、濱町に隱栖す。翁を縣居と唱ふるは、庭を田居の様に作り、しかも賀茂氏の姓にも縁あればとて、みづから家の號に呼れたるとなり。生涯の著述凡そ六十餘部。其門に入て教を受け、世に其名を聞ゆる者、本居宣長、橋千蔭、平春海、藤原守萬伎、樹取魚彦、及び倭文女等なり。

家集

寶曆十四年の秋、濱まちといふ所へ家をうつして、庭を野べまたは畑につくりて、所もいさよかたへなれば、名があがたるといひて住みそめける。九月十三夜に月めでんとて、したしき人々つどひて、歌よみけるついでによめる。

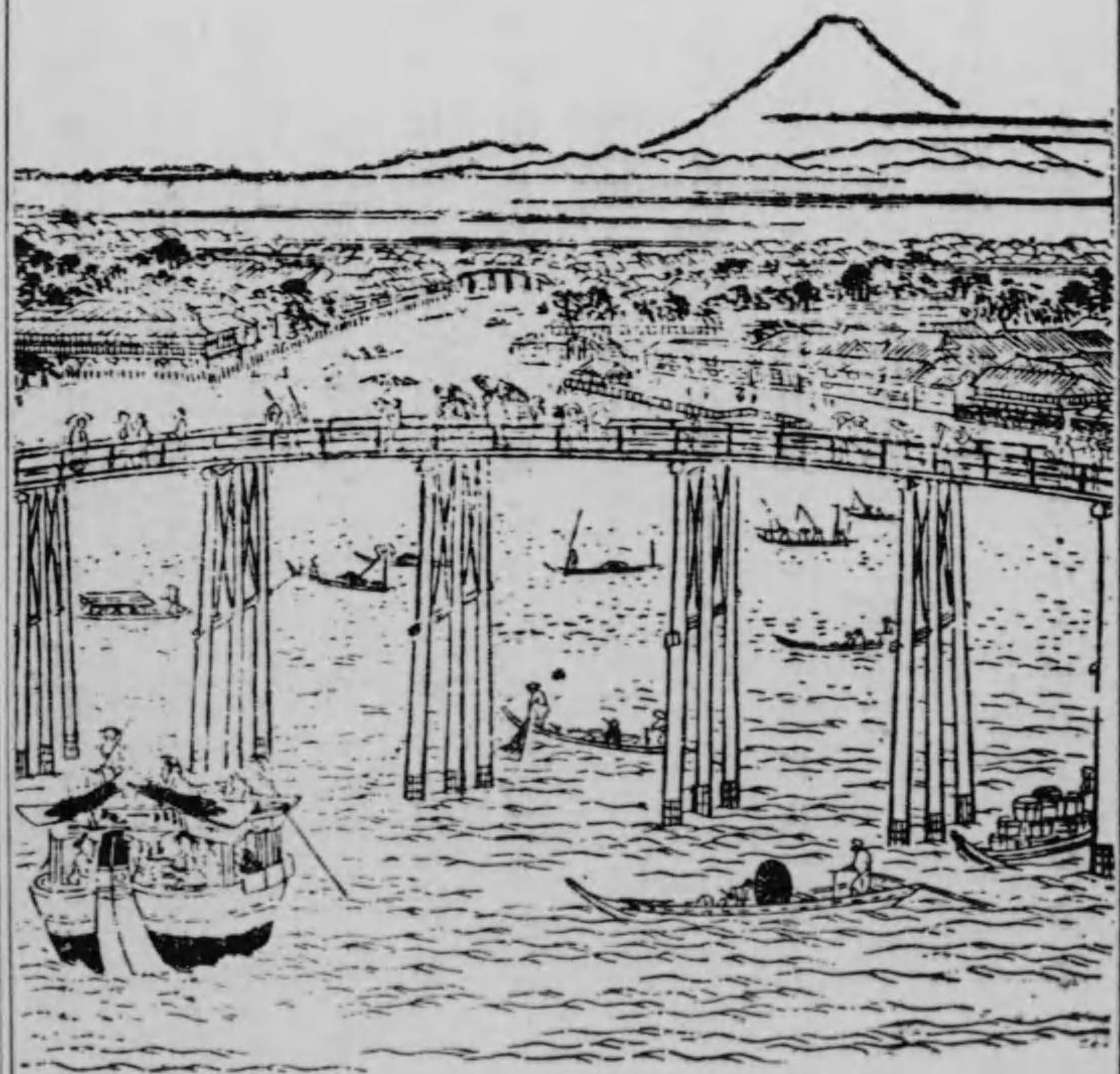
こほろぎの鳴くやあがたの我宿に月かけ清しとふ人もがな  
 あがたるのちふの露原かきわけて月見にきつる都びとかも  
 くすみ氏のもとより、嵐の朝とぶらひておこしたるかへり  
 ごとに、夜べ吹ちらしたる屋根板に、かきてやりぬ。

野わきしてあがたの宿はあれにけり月見にこよと誰に告げまし  
 きさらぎの末つかた、いく女の君おはしたるに、庭をはた  
 につくれるが、すみれの花咲きたりけるに。

春されば鈴菜花咲くあがたみに君來まさんと思ひかけきや



新大橋  
三ツ



あまのあし

船

川もあそ

舟

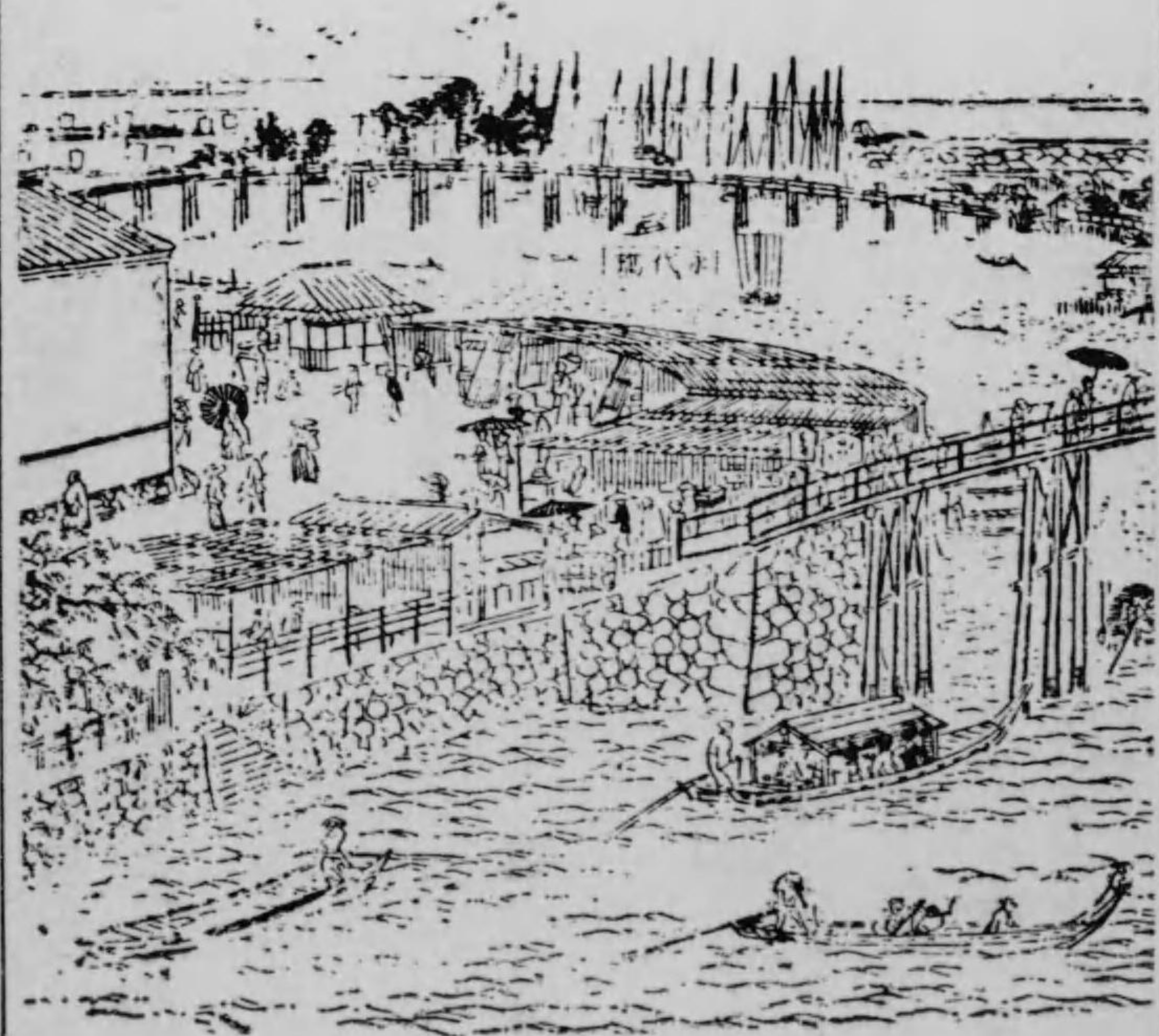
しん

の

系

井

下





新大橋

兩國橋より川下の方、濱町より深川六間堀へ架す。長さ凡そ百八間あり。此橋は元祿六年癸酉、始て是をかけ給ふ。兩國橋の舊名を大橋と云ふ。故に其名によつて新大橋と號らるるとなり。

風羅袖日記

元祿五申年の冬深川大橋なかばかよりけるとき

初雪やかかけかよりたるはしのうへ

芭蕉

同じく橋成就せし時

同

ありかたやいたゞいて踏むはしの霜

三派

新大橋の下分流の所を云ふ。淺草川と箱崎の間の流との分れ流るゝ所なればなり。此所は月の名所なり。因に云ふ、明和八年辛卯中流を埋して人居とし中洲と稱せり。されど洪水の時、便あしきとて、寛政元酉年に至り、復元の如くの川に掘立ち。昔は多く遊女歌舞妓の類ひ、こよに船をうかべて宴を催し、殊更月の夕は清光の隈なきを翫び、酒に對して歌諷ひなど、甚賑しかりしとなり。江戸雀に、諸國の大船殊に唐船、此川に於ける隈なき納涼の地なれば、船遊びの船に波の

つとみ風のさくら葎の葉の音吹きならしむるは、

三又江泛舟

春臺

風靜又江不起波。

輕舟汎々醉中過。

天遊只在人間外。

長嘯高吟雜棹歌。

人々にともなはれて八月の十六夜三派に舟をうかべて月見

はべりしに、歌諷ふ歌舞妓子の年十六なりといへば

美しき人も二八の十六夜月もみつまたあるものでない

ト 養

山もありまた舟もあり川もあり数はひとふたみつまたの景

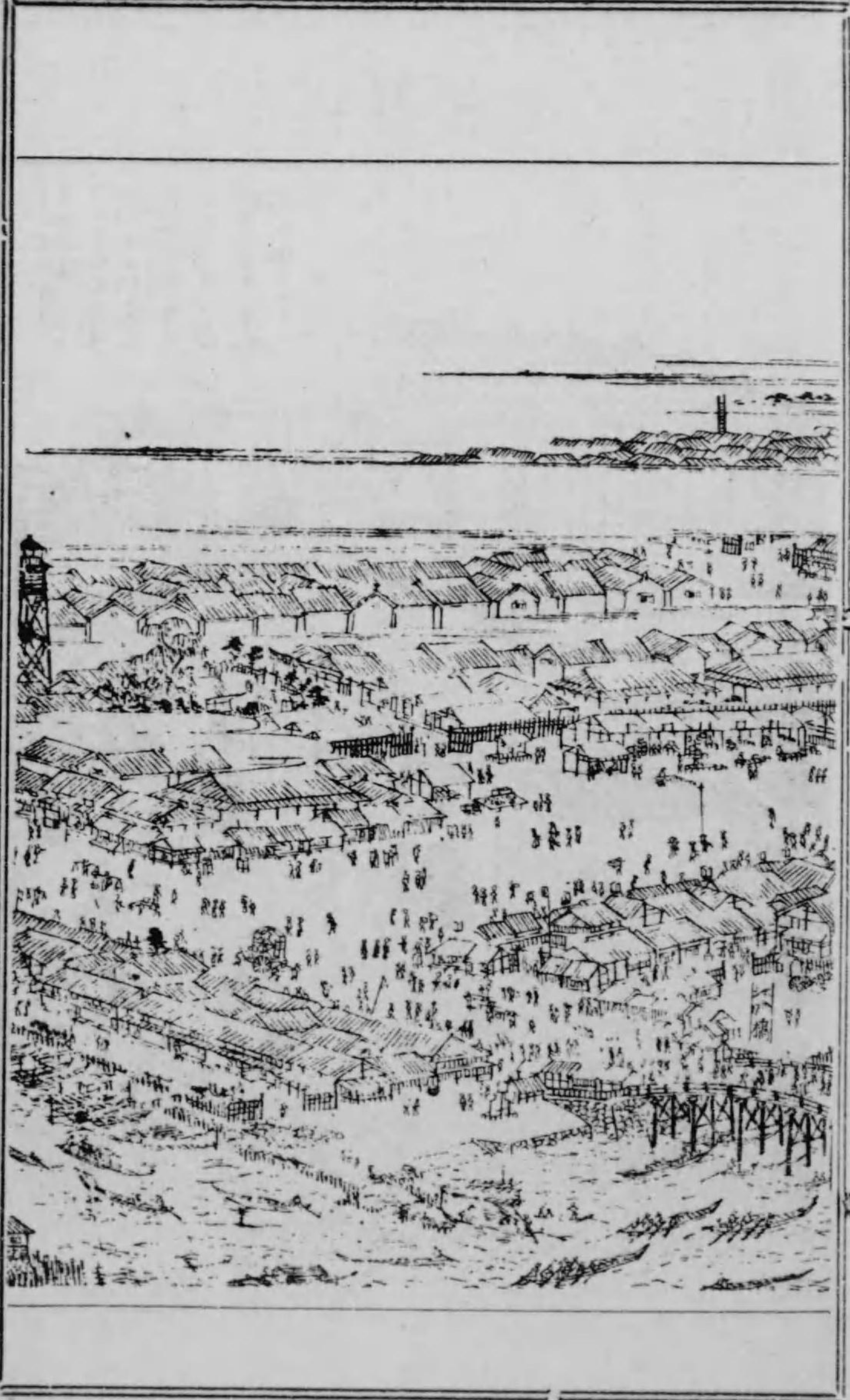
同

江戸橋

日本橋の東にありて、伊勢町より本材木町へ行く間に架す。南の橋詰異の角に船宿あり。江戸の内諸方への船場なり。又同所西の方木更津河岸と字す。房州木更津渡海往還の船こよに集ふ故に名とす。



四日市





三河百景江と  
りて、毎春松月  
まの夜日本橋乃  
南浜ふ集りて  
夜露をえりて  
抱ゆらんを  
大橋市といふ



四日市

江戸橋と日本橋の間、川より南の方の大路を云ふ。昔は四日市場といひし村にて、い

にしへは今の繁華の如き事なければ、萬の賈術も、市をなして交易せざれば得がたし。故に  
所々に其日市を立る區を名附て某日市と云ふ。羽州のあたりには、二日市と云より十日市と  
云迄、區の名につき交易せり。此地も昔は毎月四の日に市を立し所なりとぞ。故に今も其遺  
風にて、草物又は野菜の類ひ其餘乾魚などの市ありて、繁昌の地なり。此地に根津權現の御  
旅所あり。正徳年中に造 同所河岸に傍て封疆藏あり。下より石を以て疊揚げ、上に家根を覆ふ。  
明暦開板のむさしあぶみといへる草紙に、日本橋の南萬町より四日市迄の町屋を取除け、高さ四間に川端にそりて、  
北をうけ東西二町半に土手濠を掘みあげらると云々、今野島に四日市といへる町家あるは此所より引きたるなり。

祇園會旅所

南傳馬町一丁目と二丁目との間にあり。本社は神田明神の地にあり。祭所

素盞鳴尊にして、是を大政所と稱せり。毎年六月七日こゝに神幸ありて、同十四日歸輿し奉  
る、其間參詣多く甚にぎはへり。

鎧の渡

茅場町牧野家の後を云ふ。此所より小網町への舟渡をしか唱へたり。往古は大江な

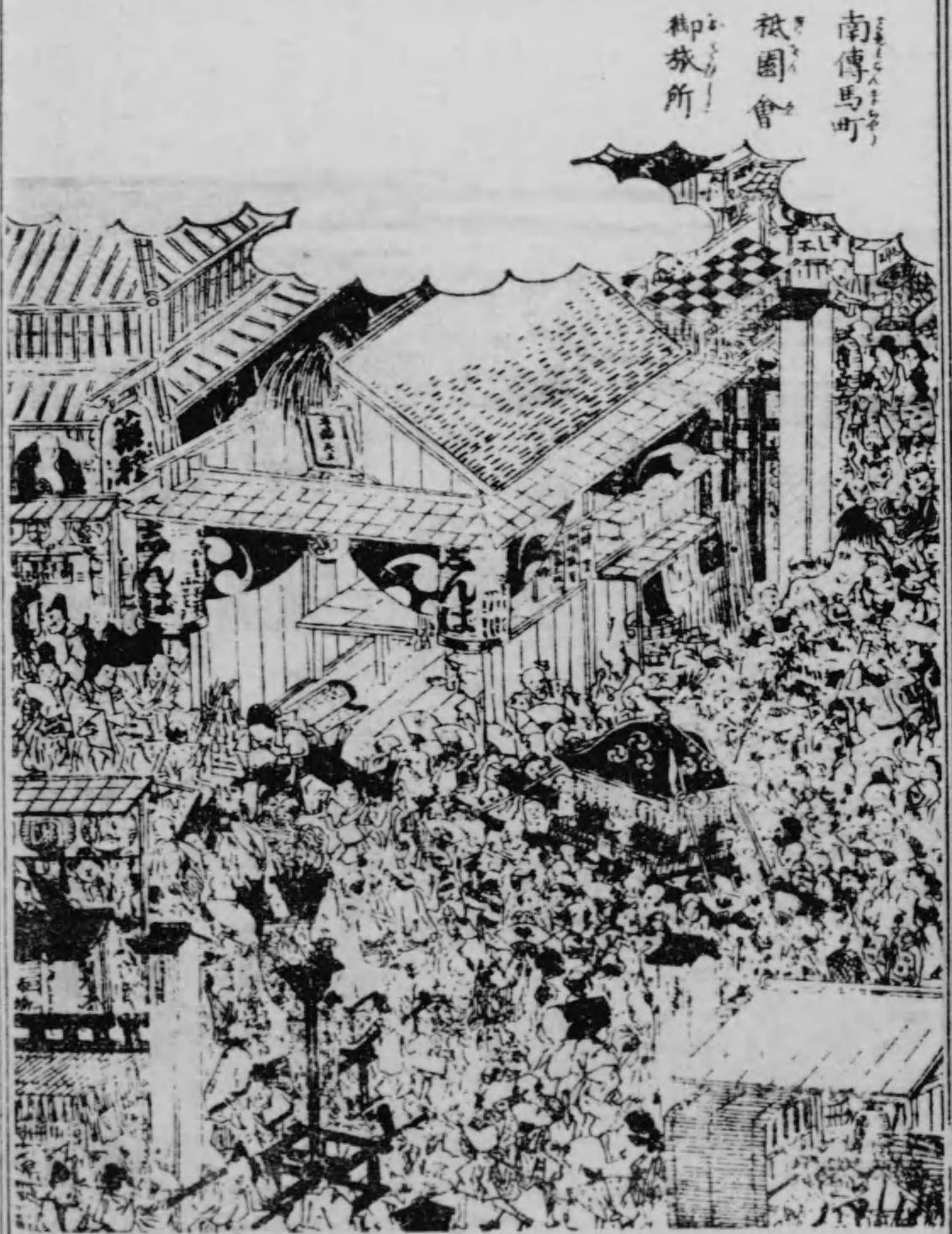
りしとなり。里諺に云ふ、永承年間 源義家朝臣奥州征伐の時、此所より下總國に渡らんと



中橋





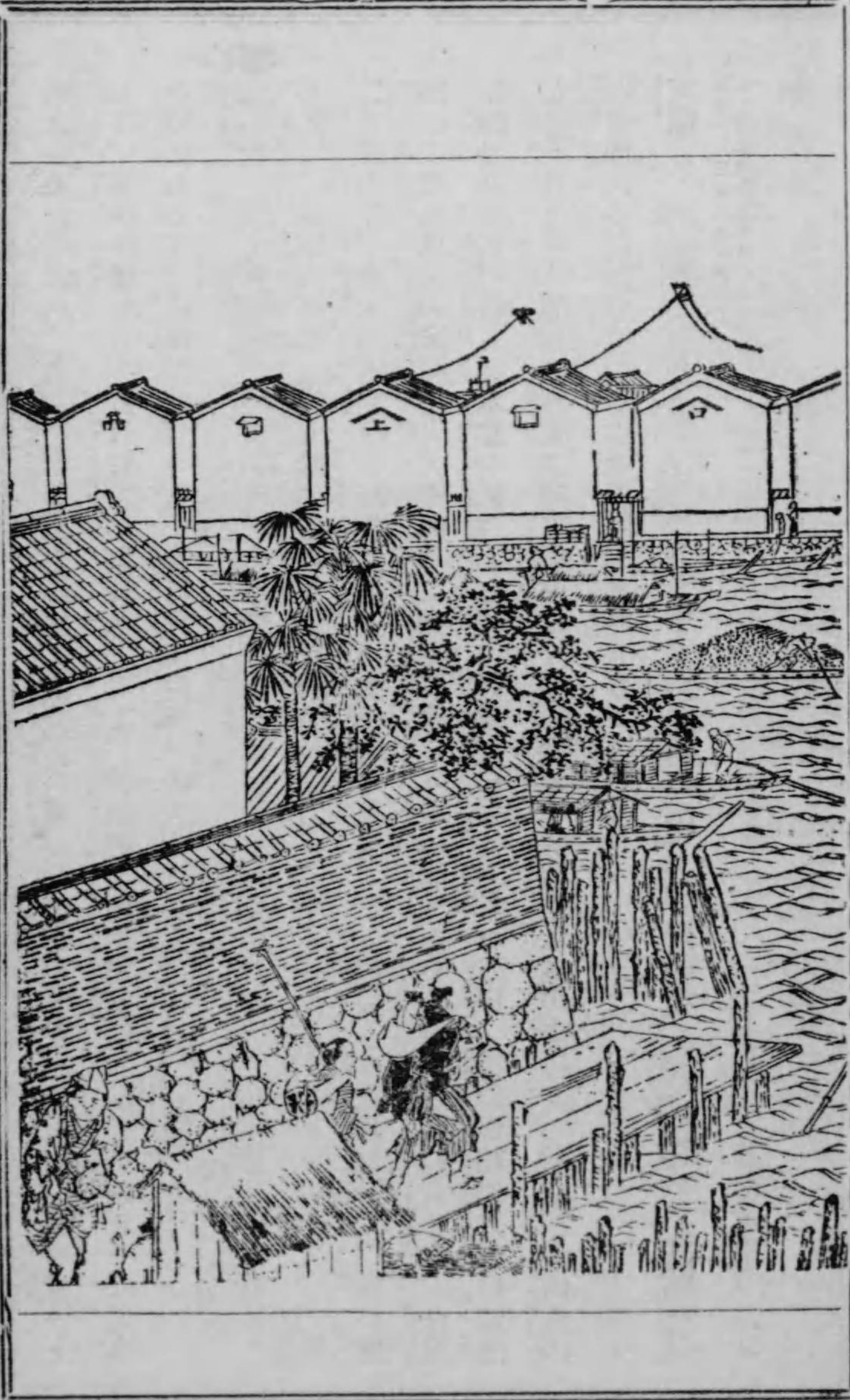


す。時に暴風吹發り、逆浪天を浸し、既に其船覆らんとす。義家朝臣鎧一領をとつて海中に投げ、龍神に手向て、風波の難なからしめん事を祈請す。遂につよがなく下總國に著岸ありしより、此所を鎧が淵と呼べりとなり。元祿開板の江戸鹿子に、平將門此所に兜鎧を置く、兜は塚に築て、牧野侯の庭中にありと記せり。

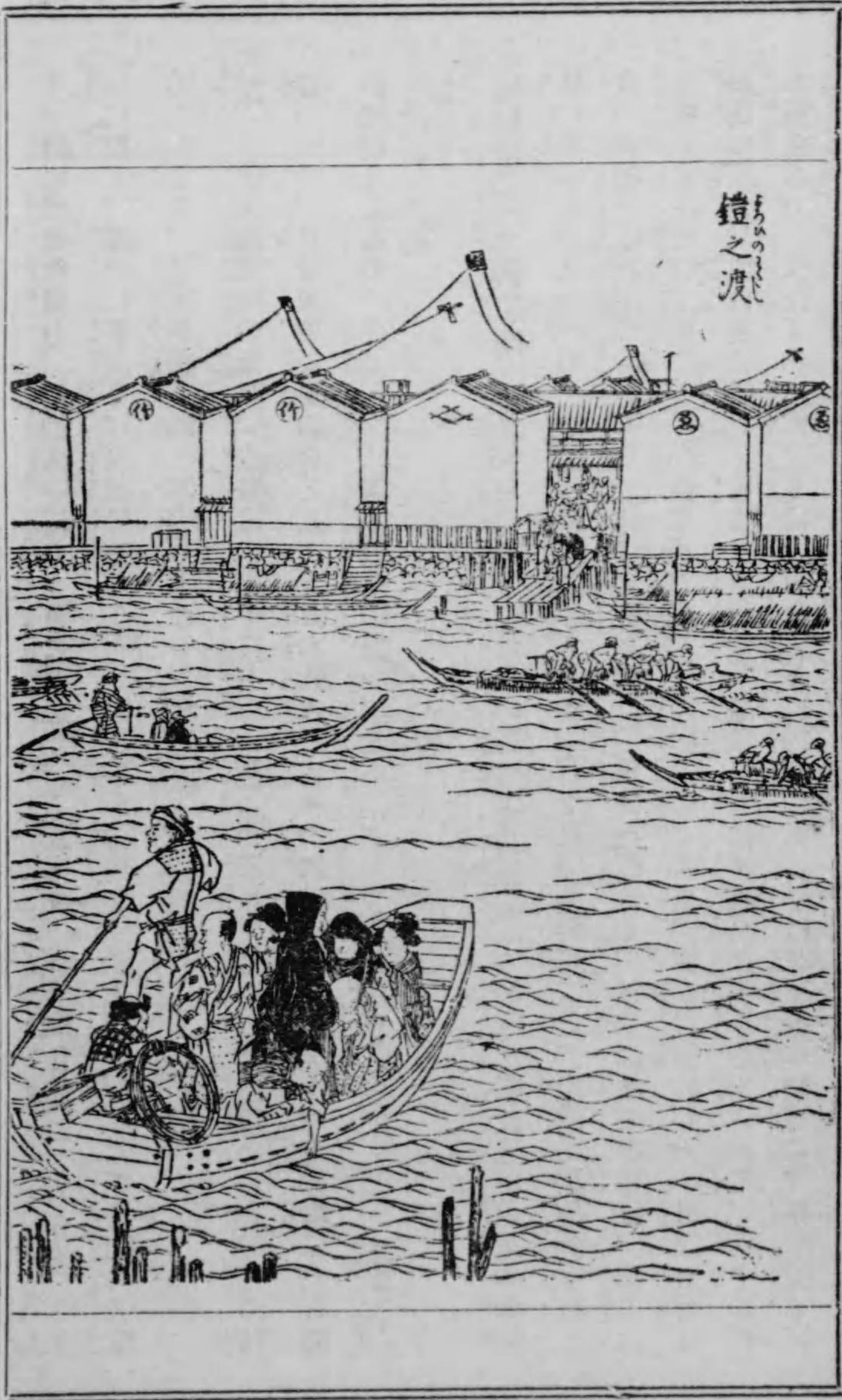
兜塚 同所海賊橋の東詰、牧野家の庭中にあり。源義家朝臣奥州征伐凱陣のとき、先の報賽のため、且は東夷鎮護の爲として、日本武尊の古き例に準ひ、自の兜を一堆の塚に築き籠め給ひしとなり。今其傍に義家朝臣の靈を鎮る小祠あり。紫の一本といへる草紙に、甲山とありて、藤原リしが、胃をば此地に埋めたとあり。

永田馬場山王御旅所 茅場町にあり。遙拜の社二字竝建り。寛永年間此地を山王の御旅所に定らるといへり。一字は神主閣下氏持也。一字は別當觀理院持也。隔年六月十五日御祭禮にて、永田馬場の御本社より。神輿三基此所に神幸あり。假に神殿を儲け、供御を獻備し、別當は法樂を捧げ、神主は奉幣の式を行ひ、夜に入て歸輿なり。其行装櫛大幣、菅蓋、錦蓋雲の如く、社司社僧は騎馬に跨り、或は輿に乗じ、前後に扈從す。諸侯よりは神馬長柄鎗等を出されて、途中の供奉嚴重なり。又氏子の町々よりは、思ひく練物、あるひは花屋臺車樂等に、錦欄純子杯





鐘之渡





のまん幕を打はへ、各其出立花やかに、羅綾の袂錦繡の裔をひるがへし、粧ひ巍々堂々と  
して、善美を盡せり。此日官府の御沙汰として、神輿通行の御道筋は、横の小路々々は矢來  
を結はしめて、往來を禁ぜらる。實に大江戸第一の大祀にして、一時の壯觀たり。

薬師堂

同く御旅所の地にあり。本尊薬師如来は、恵心僧都の作なり。山王権現の本地佛た  
る故に、慈眼大師勸請し給ふといへり。縁日は毎月八日十二日 正五九月廿日 には開帳あり、にして、門前

二三町の間、植木の市立り。別當は醫王山智泉院と號す。元は鐘島山と 號けしとなり。本尊縁起曰く、恵心僧  
都は、其父母大和國高尾寺の薬師佛に禱りて設くる所の靈兒なり。僧都佛門に入て後、法恩  
を謝せんが爲、自ら此本尊を彫刻ありて、高尾寺に安置せられしに、遙の後相州大場村に遷  
し奉りたり。然るに慈眼大師東叡山にうつし奉る。此地や大城の東に位し、しかも山王の  
本地佛たるにより、こゝに安置なし奉らるゝとなり。

天満宮

同境内にあり。社司諸井氏奉祀す。二月八月共に、廿五日を祭日とせり。神像は蓋帳にして、寛永年間柳營  
興あり、其後諸井氏請得て、こゝに勧請なし奉るとなり。

類惜子

北の窓

我栖北隣に、荻萩茂く生て笹阿なる地あり。茅場町といふ。名にふれて、昔は海邊なりし  
を、今は榮行家作りして、山王権現の御旅所と定め、薬師佛立給ふに、堂のかみばかりた  
だほのかに繪にかけると見ゆ、空地は水をためて池めかし、深草引く人しなれば、蓼の  
花穂に立のび、なもみ箒木色つきわたる。雨風につけても、虫の聲聞まさり、大かたの空  
もうつつなるに、待にかならず出る月かなとことわりし窓、ふたかたに明めり。中界 北に  
うたよねして、炎夏わづらはしからず、竹の簀子に這出て、螢をかぞふるもはしたなし。  
娘の四つばかりなる、あふなくふと走りてとらんとす、あやまちすべし、さはおりぬもの  
よ、手とりてなと、母ぞすかすめり。下界

俳仙寶齋其角翁宿

茅場町薬師堂の邊也と云傳ふ。元祿の末こゝに住す、即終焉の地也。  
按ずるに、梅の香や隣は秋生惣左衛門、といふ句は、其角翁のすさびなる由、普く人口に膾炙す、依て其可否はしらずといへども、  
こゝに注して其居宅の間、近きをしるの一助たらしむるのみ。

徂徠先生居宅地

同所植木店なりといふ。先生一號を該園といはれし。蔭は萱と同じ字義



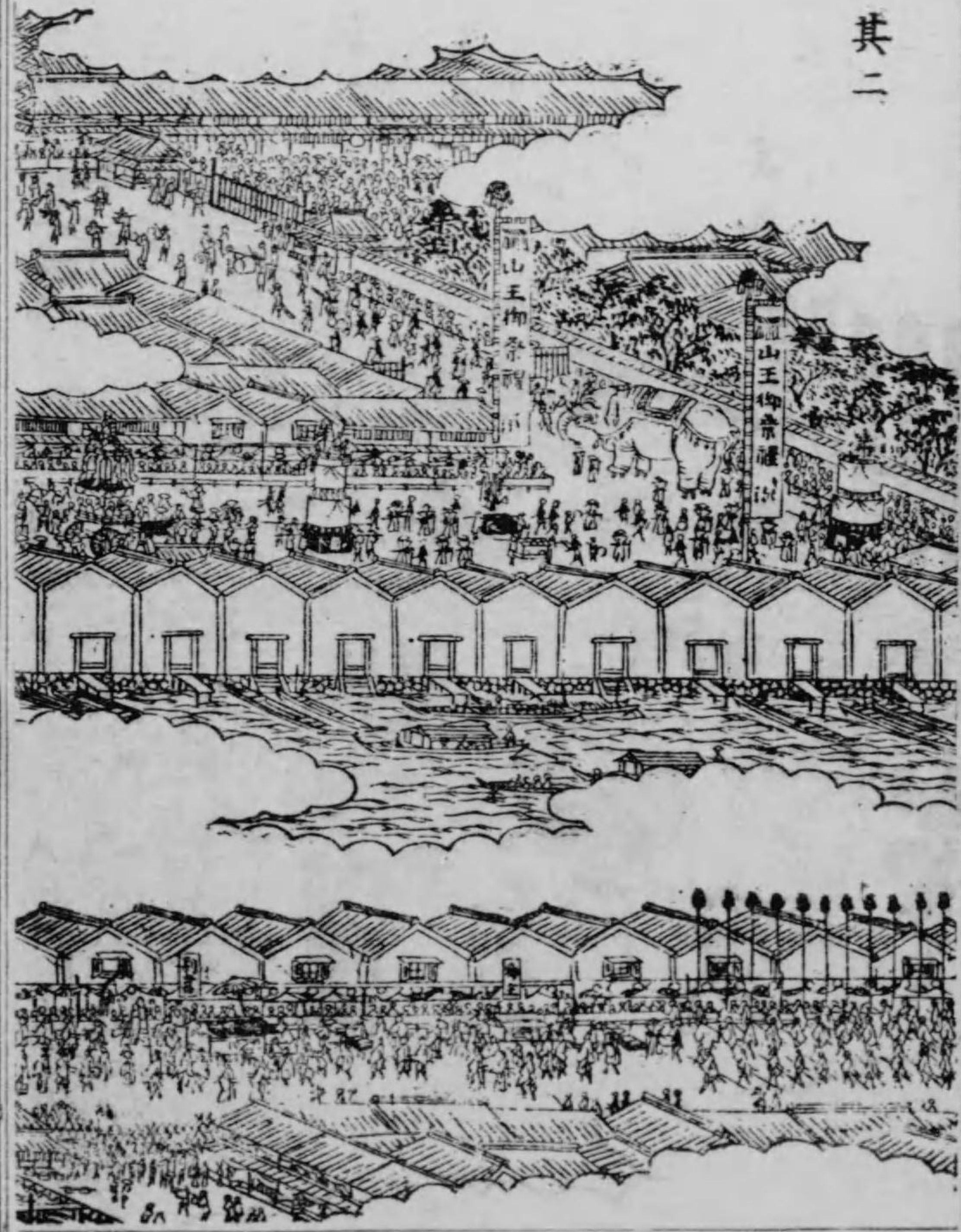
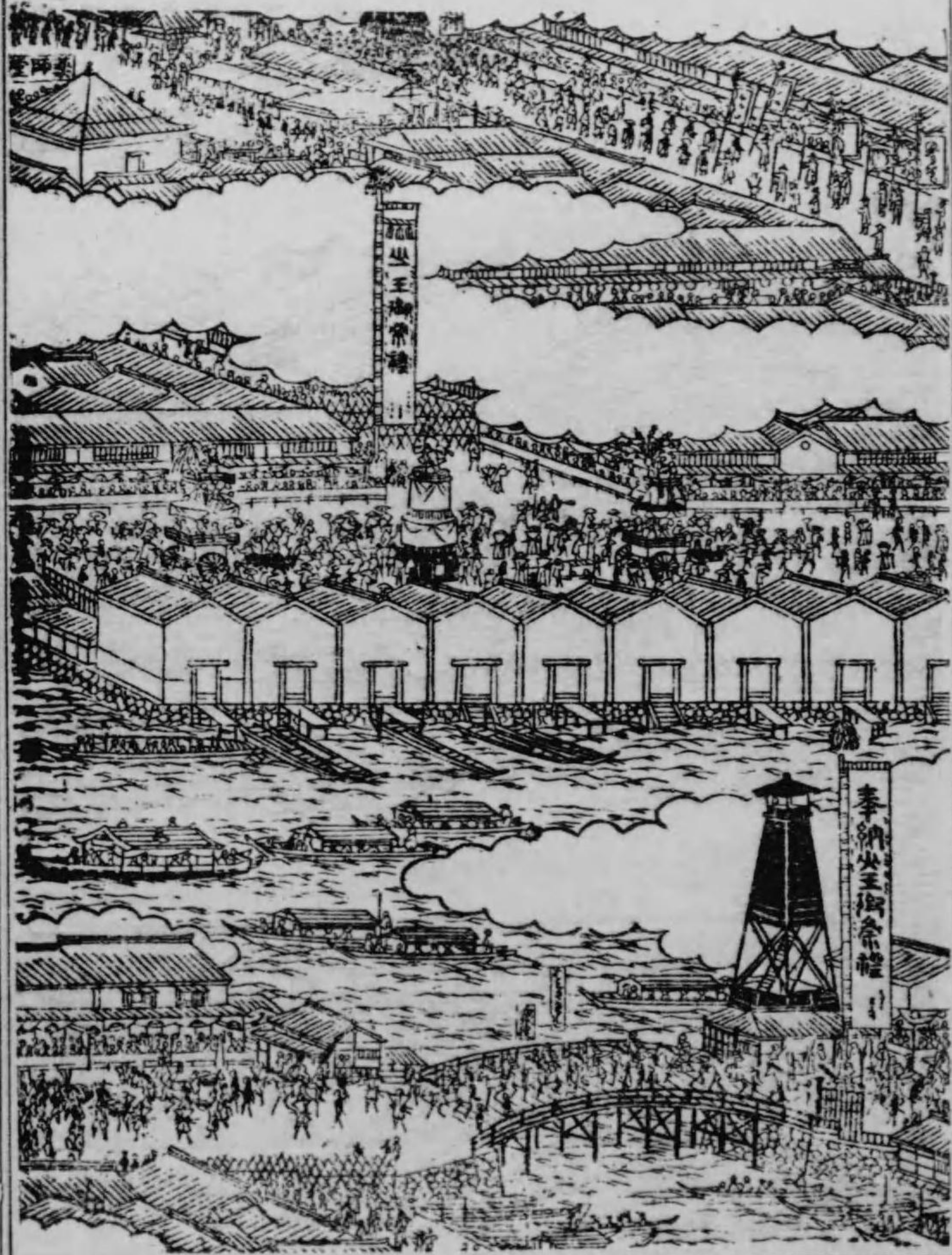
六月五日  
山王祭



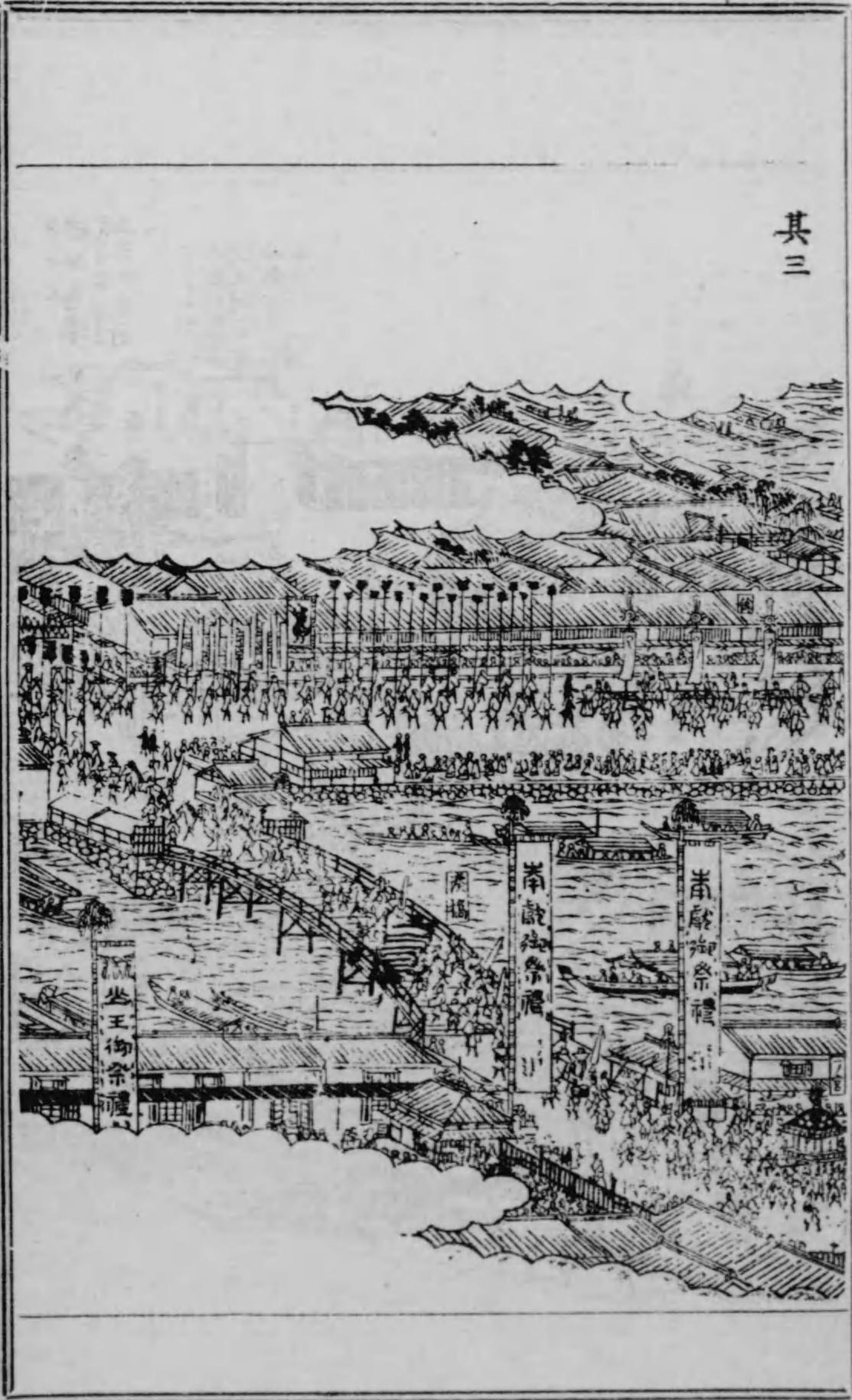
家木  
天下  
まのり  
や  
六車  
其角



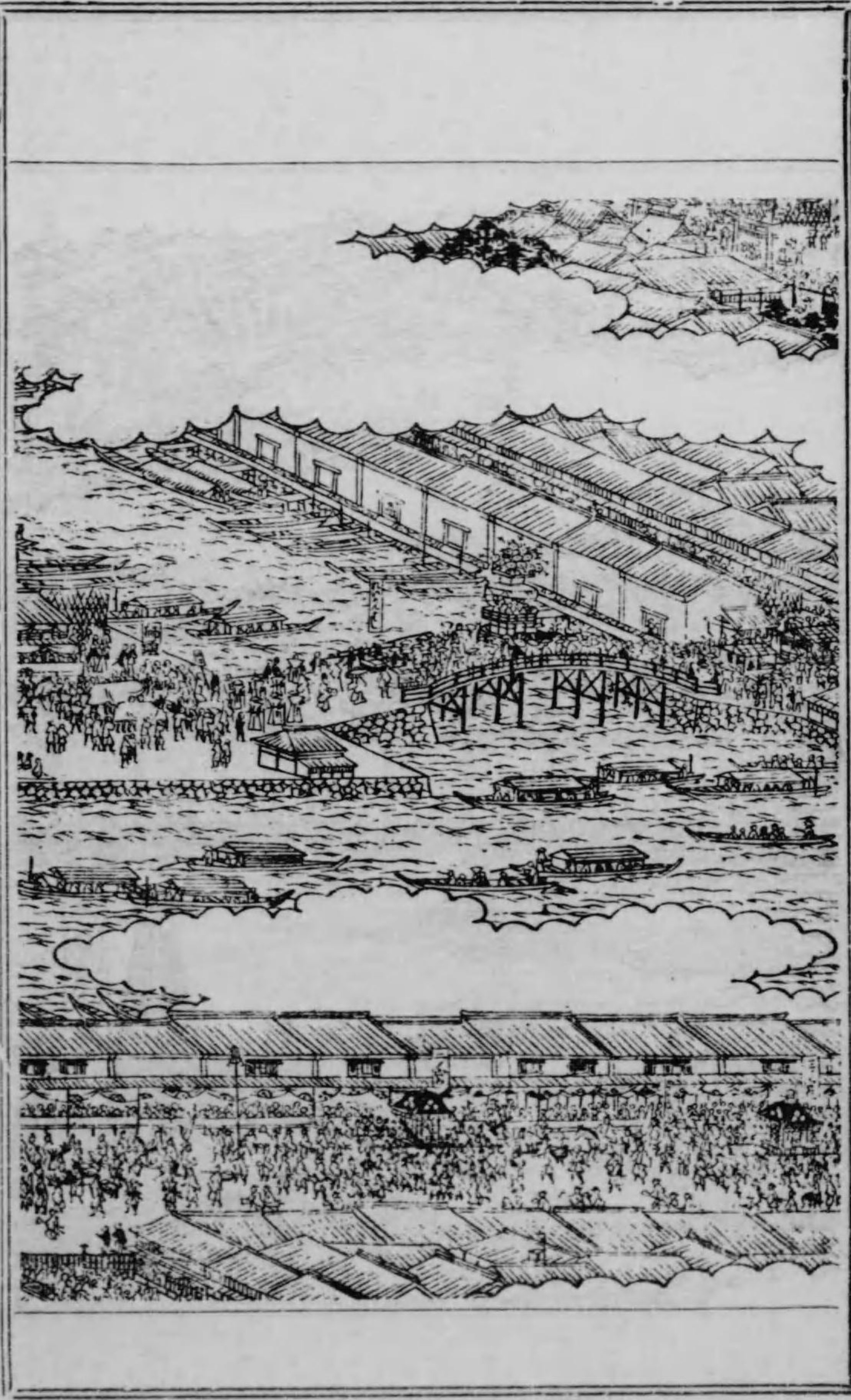








其三













伊雜大神宮



勸進聖判職人  
歌合の内花と獅子舞

たぐと  
あけ  
まの  
あけ  
まの  
獅子の  
たぐ  
たぐ  
あし  
道達院





なれば、稱せられしなり。よつて此地に住せられし事知るべし。

伊雑太神宮

北八町堀松屋橋より一町ばかり良の方、塗師町代地町屋の間にあり。故に、此

所を字して磯邊橋町と呼べり。土俗磯邊太神宮といふ。伊雑の御神は、天照皇太神宮の別宮にして、祭神は伊

佐波登美命と、玉柱屋姫命二座なり。寛永元年甲子伊勢長官出口市正某、伊雑宮より移

しまるらせ、通三丁目に宮社を営めり。今神明長屋と唱ふるは別是也。同十年癸酉今の地へ移し奉るといへ

り。例祭は六月廿六日に執行す。

三ツ橋

一ツ所に橋を三所架せし故にしか呼り。北八町堀より本材木町八丁目へ渡るを、彈

正橋と呼び、寛永の頃今の松屋町の角に、島田本材木町より白魚屋鋪へ渡るを、牛の草橋といふ。又

白魚屋鋪より南八町堀へ架するを、眞福寺橋と號くるなり。

靈巖島

箱崎の南にあり。町數今十八町。昔雄譽靈巖和尚、此地の海汀を築立て梵宮を營みて、

靈巖寺と號く。依て後世、靈巖島といふ地名起れり。初は江戸の中島と呼しとなり。東海道名所。後世寺を深川へ移さ

れて、その跡を町家となし給ふといへり。故に此地の北の通より、茅場町へ渡る橋を、靈巖

橋と號けたり。

隨見屋鋪

同所新川一の橋の北詰、鹽町の邊其舊地なりといへり。此所に瀬戸物屋多く住せり。故に茶

呼べ。川村隨見は、諸國の水土を考ふるに精しうして、大に世に勳功あり。海を築き川を掘り、田

畑を開發す。河内國の水を落さんとして、攝泉の堺に大和川を掘り、淀川の溢るを治んとして、

大坂に安治川を鑿り、音に呼びて安治川と云ふとぞ。其土砂を以て、川下に新に山を築き、洪水の時高

波を防ぎ除かん爲を専らとし、且沖よりの目當とす。世に隨見山と稱せり。本其餘の功最も少から

ず。菊岡活涼云く、川村隨見は御幕

伊勢太神宮

同所四日市町にあり。此地の産土神とす。此所を俗間に、新川と唱ふ。酒。伊勢内外兩皇

太神宮を勸請し奉り遙拜所とす。遷宮伊勢と同年なり。江戸鹿子には寛永中草創とあり。伊勢内宮の社僧、慶

光院比丘尼、江戸參府の折柄、旅亭の儲の爲に此地を給ふとぞ。慶光院伊勢上人は、格式御門跡地に

なり。始祖の比丘尼は、内宮建立の時より速歸として社僧たり。依て内宮の御師山本太夫は、始祖慶光院の子孫なる故に、今も彼寺の住持比丘尼は、代々この家より嗣侍るとなり。

按ずるに、明暦の江戸藩圖に、今所謂三の御丸の地に伊勢上人の屋鋪としるせし所あり。此上人の旅宿なるべし。後に此所へ遷させられしならん。



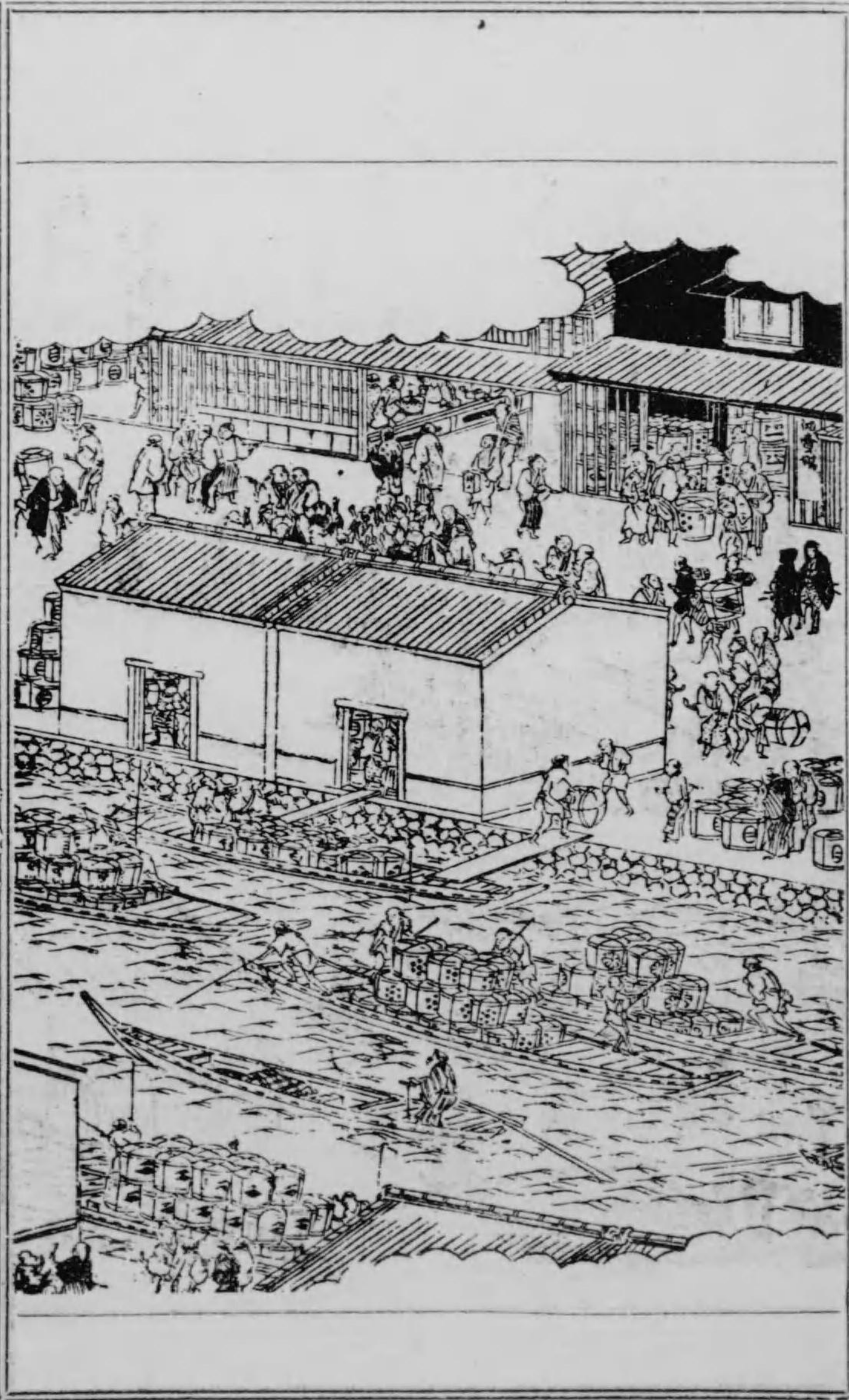
三ッ橋



風羅袖日記  
ハテ塚中  
茶の  
か  
ま  
の  
石  
の  
石  
此  
間  
芭蕉







新川  
酒問屋





新川  
大神宮





年山紀聞に云ふ、

永祿元年日記不詳、後、六月三日中山亞相神官御奏被談云、去月廿三日神宮外上棟無事令沙汰

之由注進有之。或比丘尼號上人先皇御代被下上人號女房初例歟名號慶光院以諸國勸進之力○此上棟取立

者也。内、又内宮上棟存立云々雖不相應之事。末世如之儀神慮有子細歟。不測知事也。

永代橋 箱崎より深川佐賀町に掛る。元祿十一年戊寅始て是を架せしめらる。永代島に架す

故に名とす。長凡百十間餘あり。此所は諸國への廻船輻湊の要津たる故に、橋上至て高

し。此橋のかもちざりし以前は、深川の東南は蒼海にして、房總の翠巒斜に開け、芙蓉の白峯は、大

城の西に峙ち、筑波の遠嶺は墨水に臨んで朦朧たり。臺嶺金龍の寶閣は、綠樹の陰に見えか

くれて、自丹青を施すに似て、風光さながら畫中にあるかごとし。

藥師堂 靈巖島銀町にあり。別當は眞言宗にして醫王山圓覺寺と號す。本尊は三州鳳來寺

峰の樂師と、同木同作にして、理趣仙人刻する所也大寶年間に造立ありしとなり。

此靈像はもと高野山橋本の里にありしを、慶長年間當寺の開基、惠生阿闍梨此地に遷し

奉り、後靈巖寺の境内に安す。深川靈巖寺の事なり、彼寺始この地にあり。萬治の後靈巖寺深川にうつる。其頃此藥

師堂と稻荷の社のみは、此地に残しとどめらるよといへり。

橋本稻荷社 同境内にあり。此所の鎮守とす。社記に云く、神像は弘法大師の作にして、

二寸あり。山城國伏見稻荷明神と、同木同作なりといへり。往古高野山の籠、橋本の里に宮居を

造りて、安置ありしが、故ありて後ことに勸請なし奉るとなり。

惠比須前稻荷祠 同所東湊町の南、高橋の北詰、人家の間にあり。別當は天台宗にして、昔は向

井侯のやしきにありしが、海賊橋より引移られし頃、宮居を構の外に出されしとぞ。此所を

るびすの宮前、又は蛭子前と唱へはべり。古老云く、昔此地より鎮西洲築地へかけて、一圓の海なりし頃は、此所

人字にえびの洲と唱へ、其洲崎にありし稻荷の宮なるをもて、海老洲の宮とのみよびならはせしが、後世誤りて蛭子神に混じ、又勇子に轉じいよく附會せしなりとぞ。この説さもありなりかし。

湊稻荷社 高橋の南詰にあり。鎮座の來由詳ならず。此地は廻船入津の湊にして、諸國の

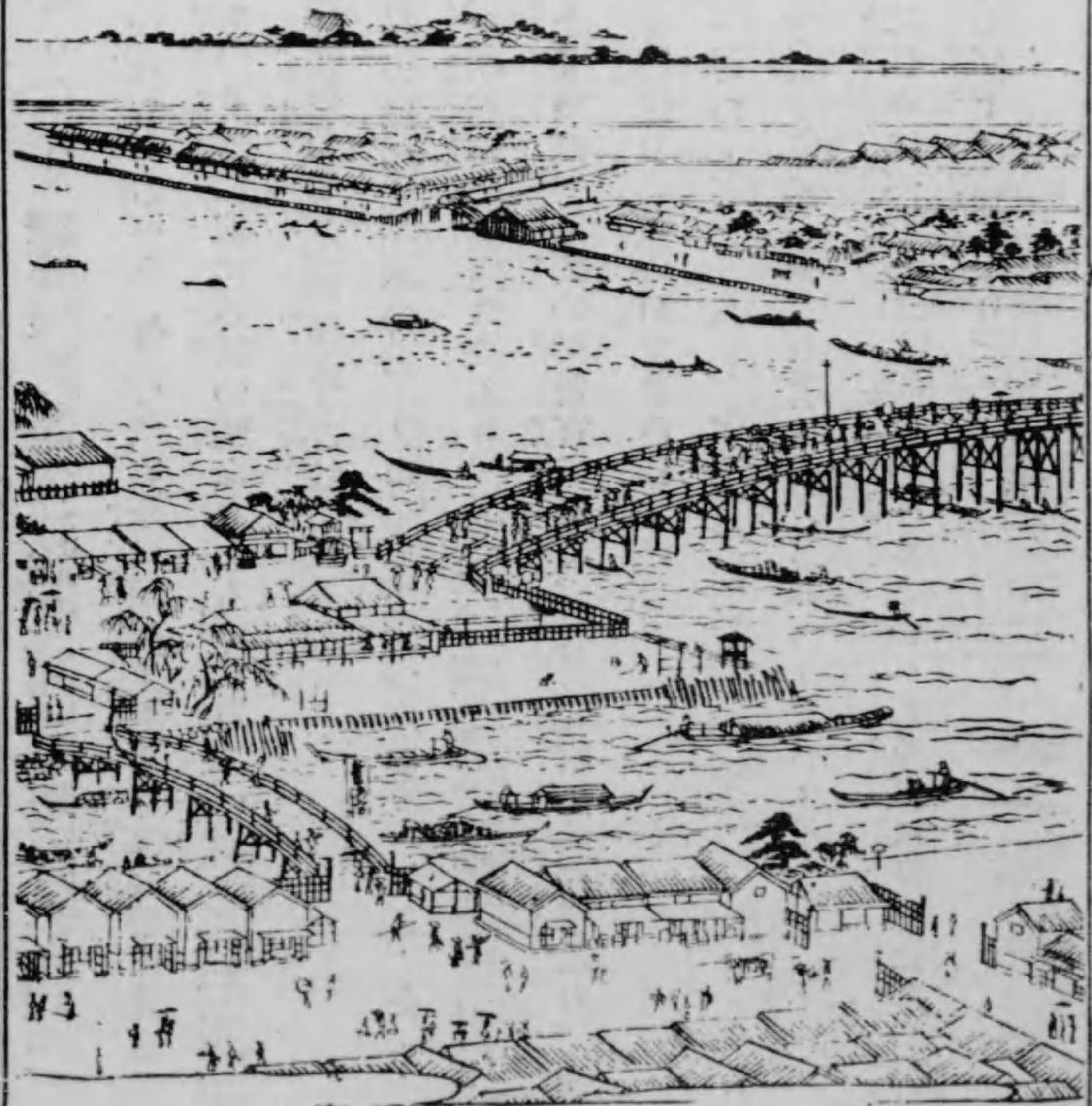
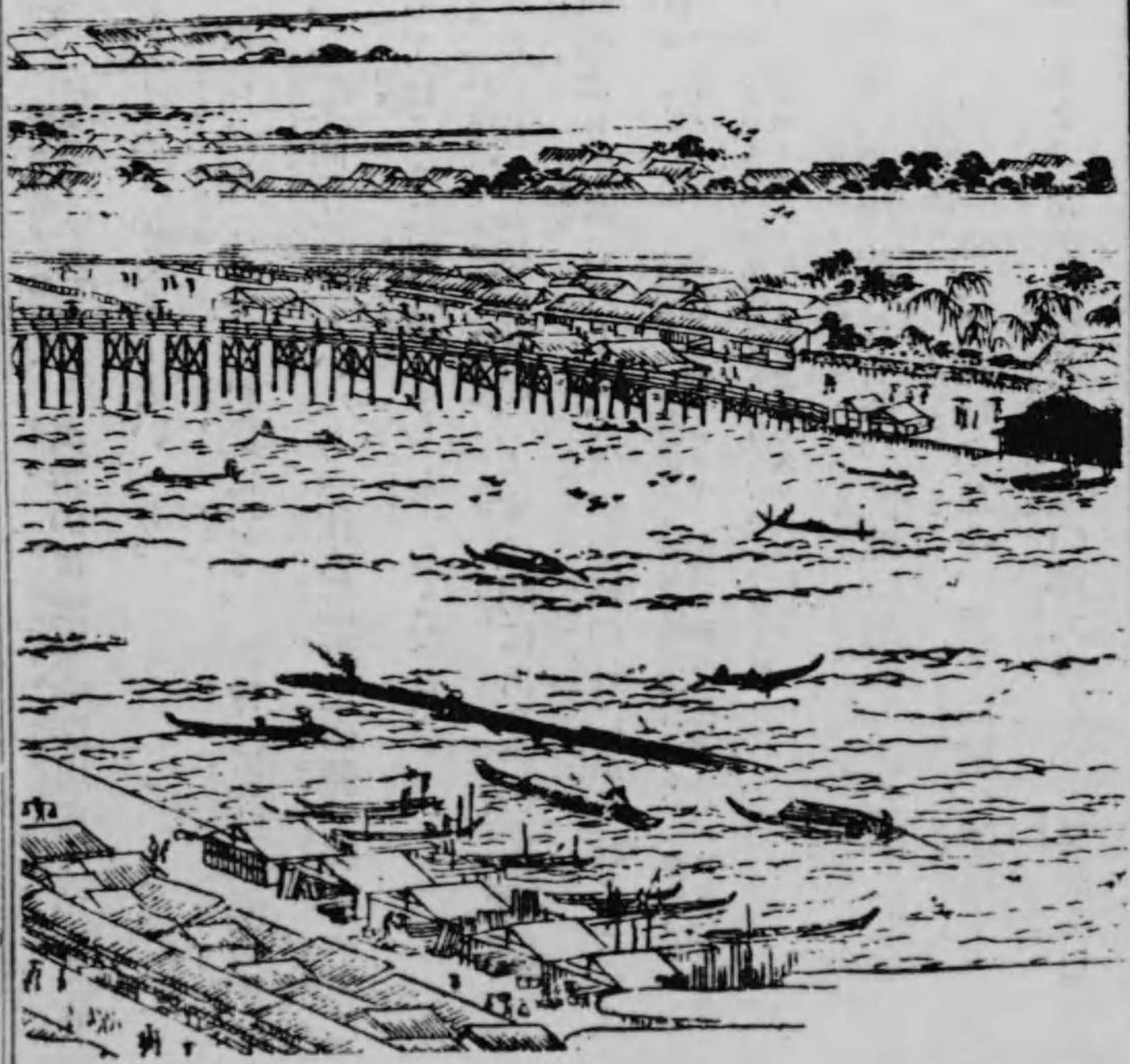
商船普くこよに運び碇を下して、此社の前にて積所の品を、悉く問屋へ運送す。此故にや

近世吉田家より湊神社の號を贈らるよ。當社は南北八丁堀の産土神なり。又此川口の北に監



永代橋

東望天邊海氣高  
三叉口上接海平  
布帆一片懸秋色  
欲破長風萬里清  
南郭





船所ありて船の出入を改めらる。事跡合考に云ふ、此祠昔は八丁堀一丁目の南岸にありしが、此地年月を重ねて、家屋立ちつゞきければ、八丁目の大川はたに遷せしとぞ。

銃炮洲

南北へ凡八町ばかりもあるべし。傳云ふ、寛永の頃井上稻富等大筒の町見を試し所なりと。或は此出洲の形状、其器に似たる故の號なりともいへり。白石先生の説に、此地は明曆火災後

出されしとなり。又ある家珍、今は薪炭石などの問屋多く住せり。藏の舊圖に、新出洲と記せり。

打出づる月は世界の銃炮洲玉のやうにて雲をつんぬく 半井ト養

半井ト養翁居宅地

同所明石町の裏通りにあり。或人云ふ、延寶九年半井ト養翁は父ト養の時賜はる所なりと云々。寛文江戸繪圖に、十間町の西の裏通り、寒

半井ト養翁は、東都の御醫官にして、牡丹花宵拍の裔孫なり。連歌およ

び狂歌を能せらる。此地を賜はりし頃の口ずさみに、

ト養は本道とこそ思ひしにうみちをとるは外科の望か

按ずるに、江戸砂子に、ト養の詠とすれども、歌の意は他の人の詠めるが如く、不審少からず。

了然禪尼菴室地

此地に住みはべりしよし、紫の一本といへる草紙に見えたり。禪尼の行

實は、第四卷落合泰雲寺の條下に詳なり。

佃島

銃炮洲に傍たる孤島をいふ。舟松町より舟渡あり。文龜年間江戸の舊圖に向島とあり。天正年

間東照大神君遠州濱松の御城にまし、皇都へ上り給ふ頃、攝津國多田の御廟および住吉

大神にまうで給ふとき、神崎川御船なかりしに、佃村の漁父獵船をこぎ出して渡し奉りし

かば、伏見御城にまします時も、御膳の魚を奉るべき旨、台命あり。また西國へ御使などの

折からは、かならず漁船を以て仕へ奉るべき旨、命ありしかば、大坂兩度の御陣にも、軍事

の密使或は御膳の魚獵等の事、日々怠なく仕へ奉りしかば、其後漁人三十四人江戸へめさ

れ、慶長年間淺草川御遊獵の時、網を引せ給ひ、同十八年八月十日海川漁獵すべき旨免許な

し給へり。其頃迄は、安藤石川兩侯の藩邸ありし頃は、今の小石川網干坂小網町難波町等に、旅宿して、然に寛永年間、銃

炮洲の東の干潟、百間四方の地を賜り、正保元年二月漁家を立竝べて、本國佃村の名を採て、

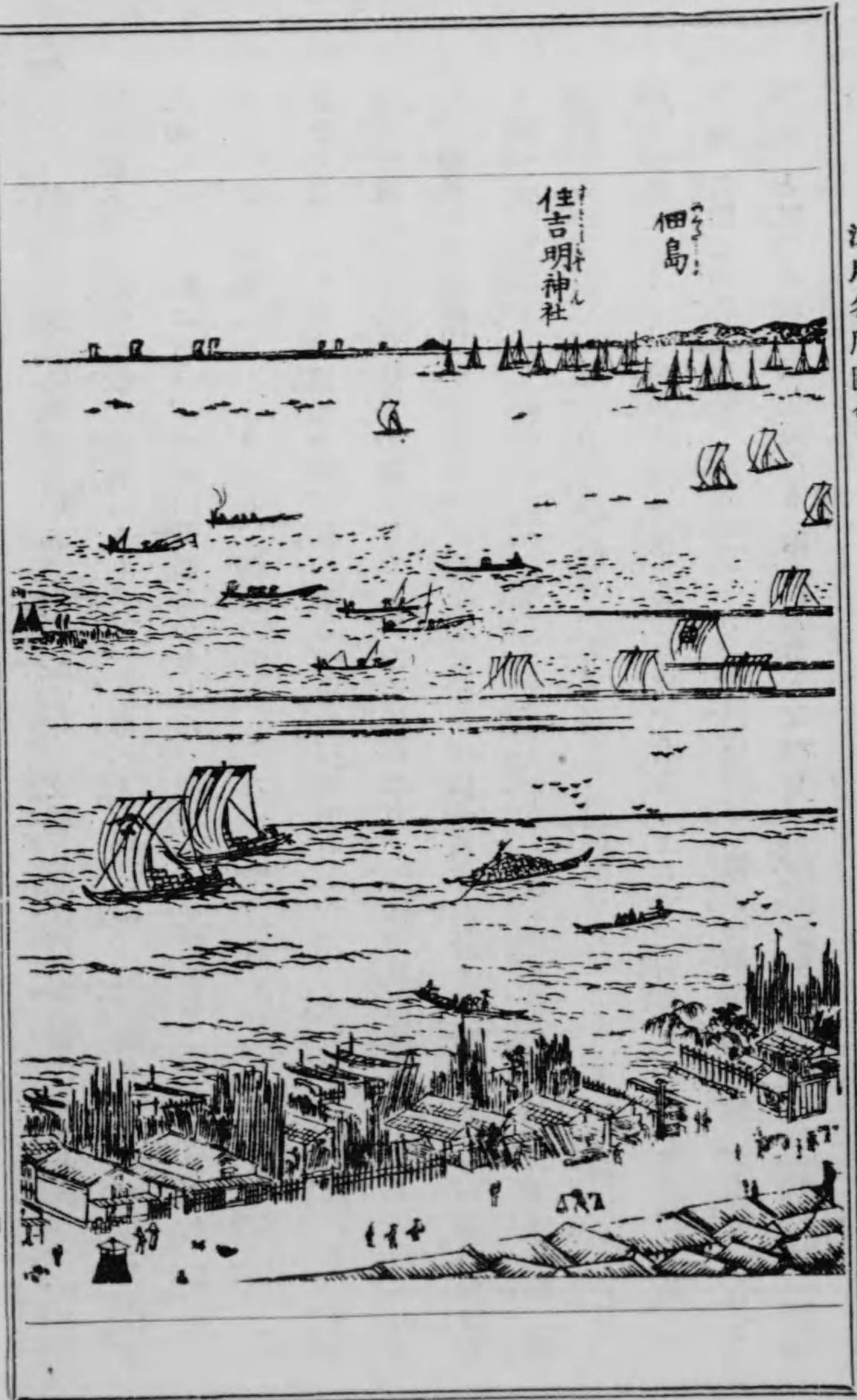
即ち佃島と號く。又白魚を取て奉るべき旨、台命によりて、毎年十一月より三月迄意らず

奉る。其間は他の獵を堅く禁めたまへり。猶其後深川八幡宮の前にて、空地三千坪を賜りて、

佃町と號けられ、御菜魚をも奉れる事となれり。或人の説に、此所は始め安藤右京進屋敷の地に於て、住

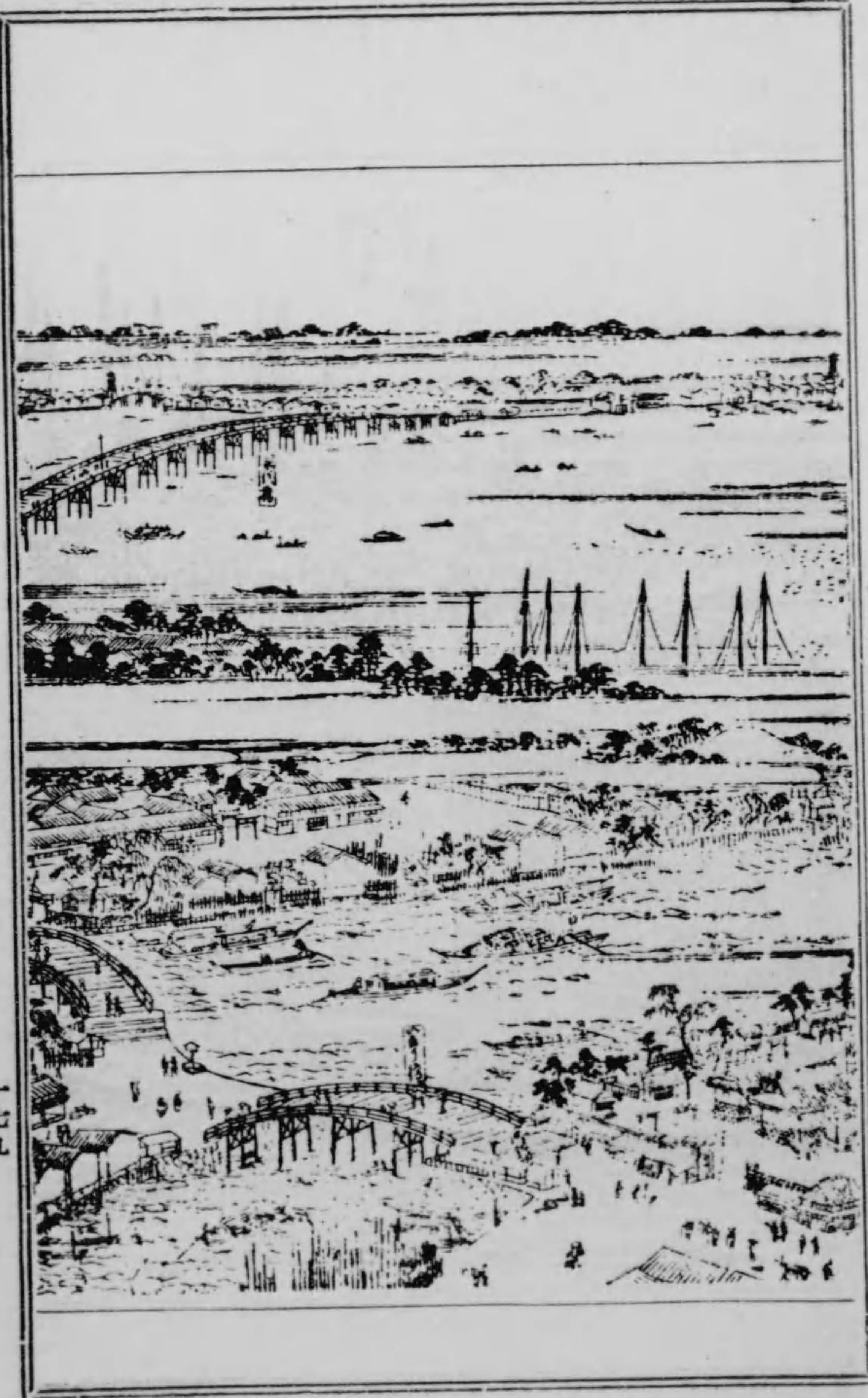
吉の社頭に繁茂する所の藤は、安藤家にて栽る所なりと



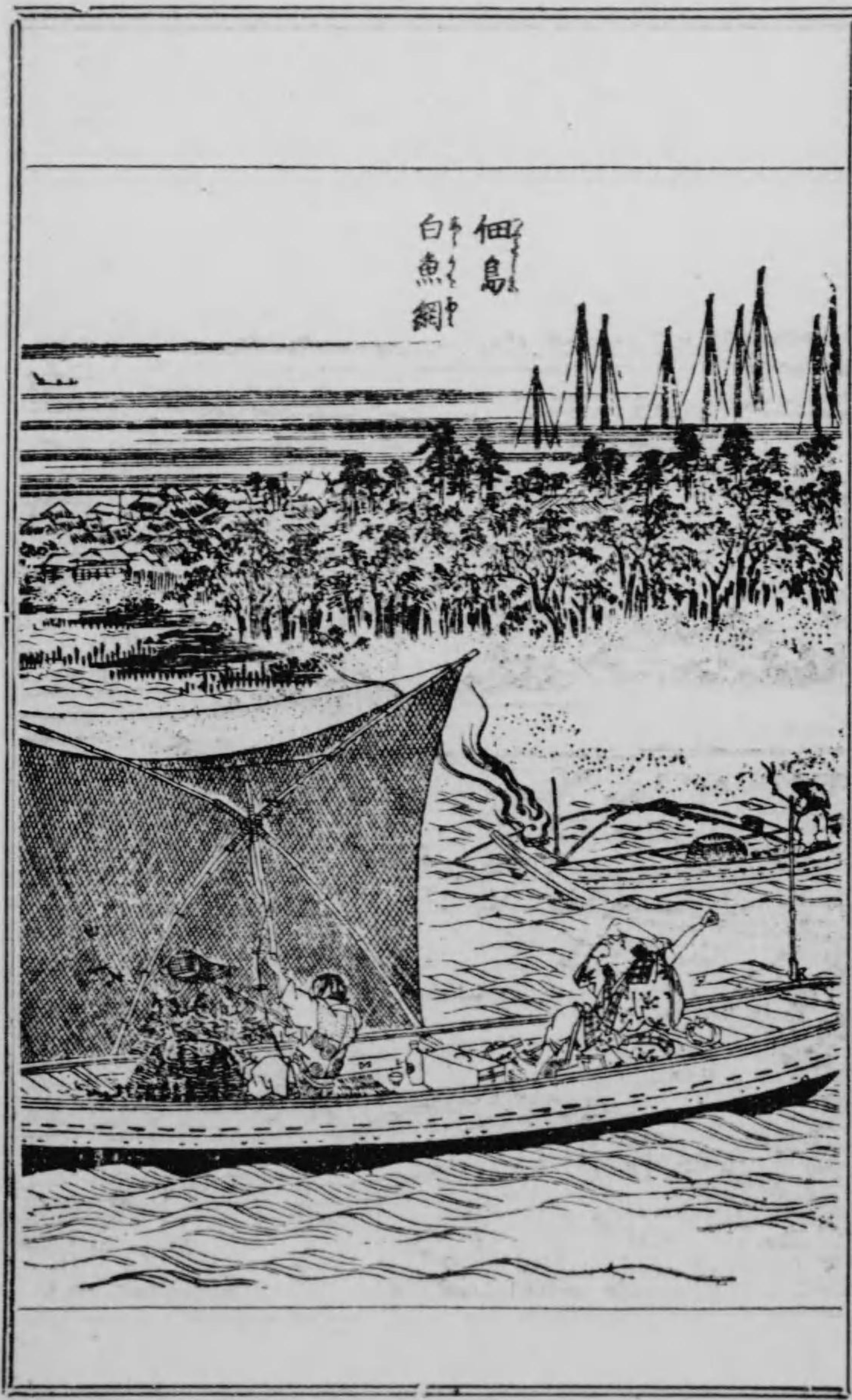


住吉明神社  
佃島











いへり。廣賀に佃島は紀州賀多の漁人雜居。此地は殊更白魚に名あり。故に冬月の間毎夜漁舟に篝火を燒き、四手網を以て是を漁れり。都下おしなべて是を賞せり。春に至り二月の末よりは川上に登り、彌生の頃子を産す、其子秋に至りて、七八月の頃江海に入ると云ふ。事跡合考に云ふ、兩國の川州名古屋の浦よりと 州名古屋の浦よりと云々。

住吉明神社 佃島にあり。祭る神攝州の住吉の御神に同じ。神主は平岡氏奉祀す。正保年間

攝州佃の漁民に、初て此地を賜はりしよりこゝに移り住む。本國の産土神なる故に分社して

こゝにも住吉の宮居を建立せしとなり。攝州の佃村は、西成郡にあり。古今集にたみの島とよめるは是なり。かしこにも住吉明神の宮居ありて、神功皇后三韓征伐御歸陣の時、其地に御船の

艦綱をかけ給ひしより已降、佃村の地に御船の鬼版を傳へ、いつき祭る事、千有餘年なりといへり。當社は此分社たり。 毎歲六月晦日名越祓修行あり。例祭は毎歲六月廿八日廿

道遙院實隆公住吉奉納和歌十首の題を詠じて奉りし中に

江上月

この浦の入江の松に澄む月のみなれそなれて幾秋かへむ 戸田茂睡

名月やこゝ住吉のつくだじま 其角

此地は都下を去る事咫尺なれども、離島にして漁人の住家のみ所得顔なり。彌生の潮乾には、貴賤袖を交へて、浦風に酔を醒し、貝拾ひあるは磯菜摘むなど其興殊に多し。月平沙を照しては漁火白く、芦邊の水雞、波間の千鳥も共に此地の景色に入りて、四時の風光足すとする事なし。

鏡島 佃島の北に竝べり。今石川島と號く。俗に八右衛門殿島ともいへり。昔大徳公の御時、石川氏の先代、此島を

りしより、炭置場人 舊名を森島と云ふよし江戸の古圖に見えたり。 又其圖に記して云く、此

島一名を鏡島と號く。古へ八幡太郎義家朝臣、鏡を收めて神體とし八幡宮を勸請す。石川

大隅守居住の時は、其庭中にありしが、今は銃炮洲稻荷境内にありと云々。或人云ふ、昔伏魔の

領を奉りけるに、重くして是を持つ者なかりし時、石川氏の祖大力なりければ、是を片手に持ちて、大樹の御前へ披露せし奉る

故に御感賞のあまり此所を宅地にたまふとなり。鏡を携へし賞として給ふ所の地なればとて、鏡島とは號けられたり。

江風山月樓 築地稻葉侯別莊の號なり。寛文二年壬寅の春、此所の海汀を填み土を積み石を

疊んで、翌る年の秋其功なれりといふ。風光他に勝れ、殊に洞庭の秋影にも越たりとなり。

咳逆者媼 同藩中にあり。いづれも高さ二尺ばかりの石像なり。稻葉侯の始祖、小田原にありし時、其邊りを巡見せられたし、とある深山に至るに一の草庵に一人の老僧の住めあり。其號を風外と云と。後是を城中に請せんとする事懸なり。故に其後



